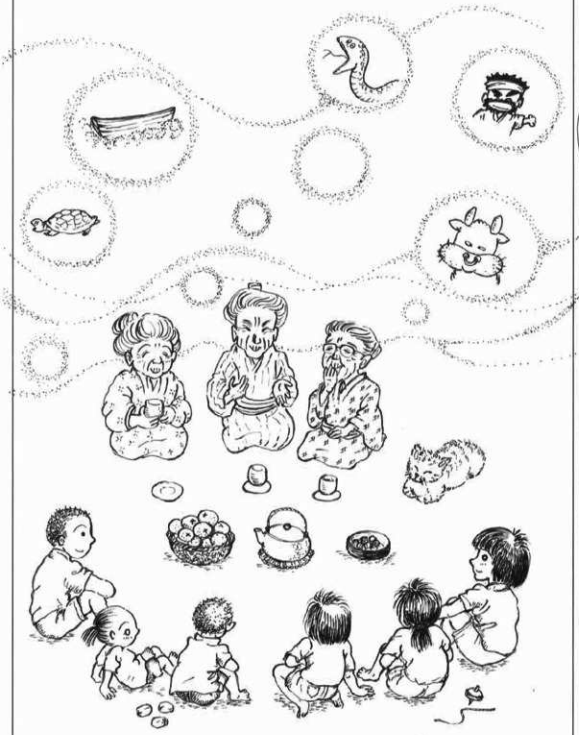
沖縄市文化財調査報告書第40集

沖縄市の伝承をたずねて

笑い話編



沖縄市文化財調査報告書第40集

沖縄市の伝承をたずねて

笑い話編

ごあいさつ

このたび、沖縄市文化財調査報告書第四〇集『沖縄市の伝承をたずねて　笑い話編』を発刊するにあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

今回の『沖縄市の伝承をたずねて　笑い話編』は、沖縄市において広く話されてきた笑い話を収録しています。こういった笑い話も現在ではあまり聞かれなくなり、だんだん失われつつあります。

このようなことから、沖縄市教育委員会では、民話伝承の保存・継承を図るため、昭和五十五年より沖縄国際大学口承文芸研究会の協力を仰ぎ調査を実施し、報告書を刊行して参りました。

本書が、家庭や学校のみならず、生涯学習の場で広く活用されることを期待し、末尾となりましたが、調査にご協力いただきました地域の皆様ならびに関係者の皆様に対しまして、深く感謝申し上げます。

二〇一一（平成二十三）年三月

沖縄市教育委員会

教育長　仲松　鈴子

凡例

一　沖縄市の民話調査と構成

① 沖縄市の民話調査は昭和五十五年「沖縄国際大学口承文芸学術調査団（遠藤庄治団長）」によって、沖縄市字池原と登川で初めて行われた。その後、昭和六十年から昭和六十二年度は編集事務局の調査。そして、その調査資料を基礎に、平成二年度に沖縄国際大学口承文芸研究会及び沖縄民話の会で「沖縄市口承文芸学術調査団」を結成し、まだ一度も調査を行ってない地区を優先し予備調査を行い、沖縄市全字の組織的調査（第一次本調査・第二次本調査・補足調査）をし、さらに平成三年数回の個別調査まで及んだ。

② 本民話集は昭和五十五年から平成三年にかけて行われた調査で聴取した話と、わらべ歌調査、文化財調査等で聴取された話をもとに「笑い話」を収録した。

二　本書掲載話の選定

① 笑い話で最も伝承が優勢だった特定の主人公が活躍する「モーイ親方」や「渡嘉敷ベーク」等の頓知話は、編集上の都合により、別に扱うことにした。

② 民話調査で聴取した話について、沖縄国際大学文学部国文学科の学生七名が沖縄市の民話を研究し、翻字して卒業論文として提出した。

平成二年度　旧美里地区　上門博之・山城綾子・宜保勝
平成三年度　旧コザ地区　香村夏子・照屋京子・石川小百合・大川清子

③ 卒業論文として提出された翻字話の中から掲載話を選定した。翻字されてない話で語りの良い話は、事務局で追加翻字した。

④ 聴取した話であきらかに出版物からの話に限っては割愛した。

⑤ ほぼ全話型を翻字対象とし、その中からできる限り多くの話を掲載した。重要な話型については、語りが断片的な話でも掲載した。

⑥ 同じ話型の話が続いているが、この民話集は出来るだけ多くの話を掲載し、後々の学術的資料として提供すること、また、一人でも多くの人の伝承を残すことを目指した。

三　翻字話の整備

① 翻字にあたっては、テープに収録された話者の語りを尊重し、できうるかぎり音声に忠実に文字化するよう努めた。

② 話者の語り口を失わないように心がけ、話者の明らかな語り違いは補正し、言葉の脱落、難解語句、ストーリーが理解しにくい場合は（　）で言葉を補ったり、話の内容が前後している場合は前後を入れ替えたりして適宜整備した。

③ 段落の設定及び句読点の扱いは可能な限り話者の語りに即するように心がけたが、区切りがつかない場合は、翻字者の判断で適宜句読点を打ち、話の展開にそって段落を設定した。

④　共通語の語りの中で部分的に方言の語りがある場合には、その部分に（　）で対訳をつけた。

⑤　方言の語りについては、漢字表記が可能な語句については意味がわかりやすいようにできるだけ漢字をあて、話者の発音通りにひらがなでルビをつけた。

⑥　漢字で表せない物の名前や擬声語、擬態語などはカタカナで表記した。

⑦　語りの中の会話部分や文脈上、会話と判断される部分で改行し「　」を用い、会話のあとは地の文に続けた。

⑧　歌の部分は改行し、二字下げて記した。

⑨　人名・地名・民俗語彙については、できるだけ注記をつけるようにした。

右記の条件に従って文章の整備をしたが、語りの雰囲気によっては、適宜、カタカナを使うなど条件を外れて表記した部分もある。

四　本文について

①　話型名は、調査時のまま用いた。同じ話でモチーフが異なる場合は題名の下に（　）でくくりモチーフ名を示して掲載した。

②　話の始めに題名・話者名・生年を記し、その下に所属していた行政区を示した。

③　対訳・共通語翻字において、方言をそのまま用いたほうが良いと判断した場合は方言を用い（　）内に訳を入れるか、注記にした。

五　注記について

①　民俗語彙についてはできるだけ注記した。なお、文献などを参考にした場合には（　）で文献名などを記した。

②　難解語句、意味のとりにくい部分については注記で説明するようにした。

六　本文掲載話の順序

①　掲載話の順序は方言で語られているもので語りの良いものを優先して並べた。

七　イラスト

①　表紙、本文中のイラストは長浜益美氏に描いていただいた。

調査にあたり各自治会長、各老人会長の方々に調査への便宜を図っていただきました。記して感謝の意を表します。

目次

ごあいさつ …… 3
凡例 …… 4
目次 …… 6

I 巧智譚 8
〔一〕とんち話 …… 8
(1) とんち小僧 …… 8
(2) 謎かけ歌 …… 11
〔二〕知恵比べ …… 13
(1) 盗人退治 …… 13
(2) 牛の上歯 …… 17
(3) 夫の改心 …… 19
(4) 知恵比べあれこれ …… 21

II 形式譚 24

III 誇張譚 26
〔一〕業比べ …… 26
(1) 壮大な力比べ …… 26
〔二〕巨大なもの …… 27

IV 愚人譚 28
〔一〕愚かな嫁 …… 28
(1) 屁ひり嫁 …… 28
〔二〕愚か者 …… 31
(1) 田舎者と上流言葉 …… 31
(2) ぬー聞ち／ぬー着ち …… 33
(3) 旅人と山亀 …… 34

（4）愚か者あれこれ …… 47
V 聞き違い 50
（1）英語の聞き違い …… 50
（2）芋の出来 …… 52
（3）聞き違いあれこれ …… 52
（4）カサギラセー …… 53
（5）ヒルも大丈夫？ …… 63
VI 艶笑譚 85
［一］営みの始まり …… 85
（1）年に何回 …… 85
［二］もの知らず …… 86
（1）女知らずの夫 …… 86
（2）男知らずの女 …… 88
（3）うぶな娘 …… 89
（4）子の勘違い …… 89
（5）スケベな聞き違い …… 90
［三］並外れ …… 93
（1）中城百合の花 …… 93
［四］動物との交わり …… 95
（1）妻と犬の浮気 …… 95
（2）娘と馬 …… 97
［五］艶笑譚あれこれ …… 98
VII 補遺 100

I　巧智譚

【一】とんち話

（1）とんち小僧

① 夏枯草、冬青草・鳴るのはどちら・内か外

普久原幸（大正五年生）泡瀬

［方言原話］

ある所にね、知恵のある子どもがいるということでね、この知恵のある子どもの所に行って、

「いったーアンマーまーかいが」んちゃぐとぅや。

「冬青草、夏枯り草や刈いが」んちゃぐとぅや、

「あん言しぇーぬーやがやー」んちゃぐとぅや。

「スーやまーかいが」でぃちゃぐとぅやー、

「夜ヌ目取いが」んでぃ。「夜ヌ目取」んでぃねー

「トゥブシ」んでぃ。夜火やねーんくとぅ「夜ヌ目取いが」言たんでぃ。

それからまたや、

「菓子うりかめー」でぃやーにさーじゃくとぅ、くぬ菓子二ちぬ手んかい持たさーにや、

「えー、いゃーやじぬ手ぬむのーまーさが」んちゃぐとぅや、たいて二ちかむたんでぃくとぅてー。うり置ちゃーにやー、「じぬ手ゆー鳴いたが」でぃ言たんでぃ。同しぼに鳴るでしょう。この子返事しないでね。

またよ、ひちゃぎーそーたんでぃ、うまんかい、うぬ人、

「えー、いゃーが一私ねーなま内んかい入るい、外んかいる出じるい」言ちゃぐとぅやー、

「いゃーが一私たーヒージャーグワー一ちどぅやるい、二ちどぅやるい」でぃ言たんでぃ。あんさくとぅやー、うぬ、ヒージャグワーかさぎとーたんでぃよー、やー、一、二ちどぅやるい、二ちどぅやるい」言たでしょう、やー。

「私ねーなま内んかい入るい、外んかいる出じーる」でぃしぇー、

「外んかい」でぃれー、「いーい、私んねー内んかいどぅ入るむん」でぃしぇー、「また内んかい入さ」でぃねー、「私ねー外んかい出じーる」。だ、足あまんかいどぅ出じとーしぇーやー。くまんかいいーちょーしぇーやー、ひっちぎー。うんぐとぅーし言たんでぃ。

あんしん、すてーくとぅや、むるよーふー、くぬわらぼーが言しぇーあたいたんでぃよー。

［共通語訳］

ある所にね、知恵のある子どもがいるということでね、この知恵のある子どもの所に行って、

「あなたのお母さんはどこに行ったの」と聞いたら。

「冬は青々している草、夏は枯れている草を刈りに」と答えると、

「そういうのはなんだろうか」と思った。

「お父さんはどこに行ったか」と聞いたら、

「夜の目を取りに」と答えたそうだ。「夜の目」というのは「タイマツ」だ。夜は火はないので「夜の目

※1 **知恵のある子ども**　松川童のこと。松川は、旧真和志間切松川で、現在の那覇市松川をいう。松川は、ちょうど首里と那覇との中間にある。松川童はその松川に住んでいたと伝えられる知恵のある子ども。この松川童の頓話は、主として沖縄本島の中部及び南部で伝えられる。

※2 **冬青草**　冬は青いが夏になると枯れる姿のことをいう。

※3 **夜ヌ目**　松明用の木材。

※4 **トゥブシ**　松脂の多くついた松材。細く割り照明用に使用。

を取りに」と言ったそうだ。
　それからまたね、
「菓子を食べなさい」といってすすめて、この菓子を二つの手に持たしてね、
「ねえ、お前はどの手のものが美味しいか」と聞いたらね、同時に食べたそうだからね。菓子を置いてから、(パンと手をたたいて、
「どの手がよく鳴ったか」と言ったそうだ。同時に鳴るでしょう。この子返事しないでね。
　また、軽く腰掛けていたそうだ、家の戸口に、その子は、
「ねえ、あなたは私が今、家に入るところか、外に出るところか、当てて下さい」言ってね、(また)
「あなたは私のヤギは一頭と思うか、二頭か」と言ったそうだ。するとね、ヤギは姪娘していたそうだよ、ねえ、「ヤギは一頭と思うか、二頭と思うか」と言ったでしょう、ねえ。
「私は今、家に入るところか、外に出るところか」と聞いて「外だ」と言えば、「いや、私は中に入るんだ」と言って、
「また中に入る」と言えば、「私は外に出る」。ほら、足は外に出ているさあねえ。戸口にすわっているさあねえ、かるく腰をおろして。(じっさいにはどこにも足が出せるので)そのように言っていたそうだ。
　そうやって、やりこめるのでね、すべてこの子どもが言うのはもっともなことであったそうだ。

②　鍬の数

平田嗣昌（明治三十四年生）　登川

[方言原話]
　うぬ、百姓馬鹿にそーるばーどうやんどー。アイ、うり、いく鍬落とうちぇーんでぃ仕事しちぇー、ぬー、ゆーちらーねーんどー。うぬわらばーがしぇーちーぬあてーるばーてー。
「馬ぬ足いく足うっちぇーとーが」んちぇーく、うぬ人ん、ムノー言ふぁんなやーに、しぇーうたっーさーさーに負きとーたんでいるばーどうやる。
　わらばーがしぇーち強はんなやーにありやるばーどうやる。別わらばーがやらーひんぎぃていふぁいんどー。うり、しぇーちーぬあやーに「いー、しむん」でいやーに。どぅーやうまうていかじとーひが、「アイ、うんじゅが馬足、いく足うっちぇーてぃ、行き戻いうままでー来が」でいちぇーくとぅ、うぬ人んわかちんどぅあへーやー。あんさーに「負きたるむん」でぃふぁらりーたんよー、うぬっ人。侍どぅやたんでぃどー。

[共通語訳]
　その、百姓馬鹿にしているわけなんだよ。アイ、それ、何回鍬を落としたかと(数えながら)仕事したら、それは仕事にならないよ。(侍とやり取りした)その子どもは才知があったわけさ。
「馬の足は何回運びましたか」とたずねたら、その人は何も言えなくなり、(子どもの)才知に負けてい

※1アイ　以外なことに出会った時などに発する言葉。

たということなんだが。

　子どもが才知にたけていたので、（役人）をやり込めたという話である。別の子どもなら逃げていくんだよ。その子どもは知恵があったので、（鍬の数を数えておけといわれたので）「はい、いいですよ」と答えて、自分はそこで畑を耕していたそうだが、「ああ、あなた様の乗られている馬の歩数は、何回運んで、行き帰りここまで来たのですか」とたずねると、その方もわからないさあねえ。それで、「負けてしまった」と去ったようだよ、その方は。侍であられたそうだよ。

③　ジンブナー

屋宜カメ（明治四十一年生）安慶田

［方言原話］

　昔ぇーよー、頭ぬすぐりていや、武士とぅかや色んな、なー、でぃきやーが出じーねーや、沖縄置かんたんでぃ、沖縄うてー。

　あんさくとぅや、公儀んでぃねー今ぬなー政府てー、いーねー。

　公儀からやー、うぬわらべー八ちないたんでぃ。うぬ雨ハジギタでぃぬむのー、うまぬ雨だいんちあくとぅ、うまんかいキタぬあるばーてー。家造いぬ、雨だいんちあくとぅやー、雨だいんちあくとぅ、うまんかいまた、ふぇーらっとーしがあるばー。うまんかい下がやーに、うぬ公儀から来る人んかい、「うんじゅなーが私ねーまーんかい飛んじゅが」でぃ言ちゃくとぅ、うぬわらびぬ。あまんかいどぅ向かとーくとぅ、「前んかい」んでぃ言たんでぃ。向かとーとぅくまんかい飛んじゅんち思とーてーるばーてー。あんくとぅ後じーんかい飛んじゃんでぃ。後じーんかい飛んじゃくとぅ、

「だー、うんじゅなーが私さくわかいんなー」んでぃたんでぃ、うぬわらびぬ。

　あんし、あんさーにうりんや、

「くれーなーうまんかい置ちょーちぇーならん」ち、大和んかいすんかったんでぃさんでぃる話んあたん。

［共通語訳］

　昔はね、頭が優れてね、武士とか色んな、もう、秀才が出たらね、沖縄には置かなかったそうだ、沖縄には。

　それでね、公儀といったら今の政府さあ、いわば。公儀からね（役人が来た時）、この子どもは八歳だったそうだ。その軒の差し出た庇の桁というのは、そこに家の雨だれ、軒があって、家を造る時には軒、軒があるからね、そこに張り渡たされている細い材木があるわけ。そこに下がって、この公儀から来ている人に、

「あなた方は私はどこに飛ぶと思いますか」と言ったようだ、その子どもが。「家の外側に向いているので、「前に」と言ったそうだ。向かっている所に飛ぶと思っているわけさ。すると、後ろに飛んだそうだ。後に

※1大和　沖縄から日本本土をさすことば。

飛んだので、
「ねえ、あなた方は私ほどじゃないね」と言ったそうだ、その子どもが。
それで、その子どももね（すぐれているので）、「この子どもはここに置いてはいけない」と、大和に連れて行かれたという話もあった。

(2) 謎かけ歌

① こじきの話

伊佐ツル（大正五年生）　泡瀬

あるお家にムヌクイ（物乞い）が行くでしょう。行ったらそこの人達がこのお餅をね、あげたら、乞食が歌うたったんだね。

はや満月は　三日月になりにけり

と半分くれたら。そうって一つしかもらってないから、二人で分けるでしょう。だから一人バーケー（奪い合い）するでしょう。だから一人が歌を作って、

はや満月は　三日月になりにけり

と言って二つに割って、こういうふうにしたという話もいろんな話あった。
それで三日月とか満月とか、あんでたとか言うていました。十五夜のお月様がや、三日月になるわけさ。一つしかくれてないもんだから二人で分けるいうたら、「じゃー、うれー歌作いしが食まやー（じゃあ、これは歌をよむ人が食べることにしようなあ）」と言って、一人の者が、

はや満月は　三日月になりにけり

と言ったらね、満月が三日月、半分になったわけ。そういうふうな話を聞いたわけど。

② 夏冬一緒と夜昼一緒

松下盛一（明治四十五年生）　池原

[方言原話]
終戦当時どー、石川ん人ぬてー、まーぬウスメーがらーわからなのーあしが。うぬウスメーがよ、用事かい行ちゅんでぃちてー、下からー夏物着やーに、上びからー冬物着ち通てーぎさんよ、用事かい。宮古ん人ぬ、片目がてー、反物売いがちょーるちむえーやるばーてー、石川かい。さくとう、うりがはいちゃかとーるちむえーやるばーてー、くぬ、おじー。下から夏物着ちょーしぇーや、上びから冬物着ちょーしぇーやー、

下は六月　上は霜月
夏冬一緒か　石川ん人

また、あんさーに、うぬおじーやよー『ん、うまー誰んうらんしが、私ぬんかいるやがやー』でぃち、どうーや見ちゃぐとう、下からー夏物着やーに、上びからー冬物着ちょーしぇーやー。あんすくとう、『くぬひゃー、私にんかいどうあん言さやー』でぃ思むてぃ、くぬ返しぬ歌、片目やしぇーや、

寝た目もあるし　起きた目もあるし
夜昼一緒か　宮古の人

［共通語訳］

終戦当時に、石川の人がね、どこのおじいさんか知らないけれども。そのおじいさんが、用事に行くといって、下からは夏物を着て、上からは冬物を着て出かけたらしいんだよ、用事に。宮古の人で、片目の人がさ、反物売りに来ていたようなんだね、石川に。すると、その、用事に行くおじいさんとバッタリ出会ったようなんだね、このおじいさんと。下からは夏物を着ているさあねえ、上からは冬物を着ているさあねえ。

下は六月　上は霜月
夏冬一緒か　石川の人

また、それで、そのおじいさんは、『ん、ここには誰もいないが、私に言っているのかなあ』と、自分の服装を見てみたら、下からは夏物を着て、上からは冬物を着ているさあねえ。すると、『こいつ、私に言っているんだねえ』と思って、このお返しに歌（を歌ったようだ。その人は）片目だったので、

寝た目もあるし　起きた目もあるし
夜昼一緒か　宮古の人

③　うた問答

高江洲義総（明治二十八年生）　泡瀬

［方言原話］

力口かむる　貝ゆ書ちゃい
米かみる女　文ゆ字書ちゃい

だから、ちゃっさ考げーていん、ぬーんち読むがだったらね、歌どぅやくとぅやー、

あまかかじかかじ　くまかかじかかじ
分からんでいやーま、あまかかじ、くまかかじしぇーるばーてー。

これ嘉数[※1]は島尻[※2]にんあしがや、あんさくとぅ、宜野湾嘉数んちあるばー。嘉数という村ぁ島尻にんあん。

［共通語訳］

（「賀」と言う字は）
力、口は食べる口
はまぐり「貝」を書いて
米を頭にのせる女
文の字を書くと
「数」になる。

だから、いくら考えて、どうやって読むかといえば、歌だからね、

あそこのカカズかと思えば　ここのカカズか
どっちか分からないと、あっち行ったり、こっち来たりしているわけ。

これ嘉数は島尻にもあるけどね、だけど、宜野湾嘉数にもあるわけ。嘉数という村は島尻にもある。

※1 嘉数　宜野湾市内にある字名のこと。
※2 島尻　島尻郡本島南部の総称。

〔二〕知恵比べ

（1）盗人退治

① 臼で盗人を捕らえた話

島袋次郎（明治三十四年生）知花

［方言原話］

ヒーラん昔ぇー、かんし抱ち年ぬ夜どぅやたらー。

あんさーに嫁ぬタムのー抱ちゃーにスクブんかい入りーし、盗人しくでぃ来にや、うぬタムンぬ下からすくちゃー、スクブんかいどぅーやけーりんちゃーに、うっかんしらっとるばーてー。

皆が寝んたくとぅやー、上なかいいちょーてぃ、また、年寄いのー、主ぬ見だってーるばー、うり、うまんかい入しぇー。

「夕飯のー置かっとーんくとぅ、皆来わ、わらびんちゃー」でぃちぇ。

「よー、この臼ぇームヌ聞ちむんやてぃや、あんすぐとぅ、いったや盗人しーが行ちーねーやー、しぐ、着物さーに臼ぇかん着物うっかんしてぃ、あんし帯し、臼ぬ上やちょんくんちきりわる、主のーあてーねーんむん、ないんでぃんどー」でぃちうり言とーるばー。あんさくとぅや、

「え、あいやいびーみ」ち。うぬ盗人うり聞ちゃーに。あんさーに着物はじやーに、臼ぇみめーくんちや。あんさくとぅ、ガラガラさくとぅなー、入ちょーしぇー見だっとーしぇーやー。

「盗人どー」さくとぅ、裸なとーしぇー、「盗人どー」しかちみらったんでぃ。

［共通語訳］

ヘラも昔はこう抱いて（年をとらしていたのは）年の晩のことだったのか。

それで、嫁が新を抱えて台所に入れるのを（見て）、盗人は忍んで来て、その薪の下にすくみ、台所に忍び隠れたら、（薪で）おおわれてしまったわけさ。

皆が寝ると、上座で座っていた年寄りは、主は見ていたんだろうなあ、盗人がそこに入るのを。

「夕飯が準備されているので、皆来なさい、子ども達よ」といって。

「ねえ、この臼はモノ聞き者だから、それで、お前たちが盗人に入る時には、すぐ、着物を臼にこうかぶせて、そして帯で臼の上はしっかり結ぶと、主に知られずに、うまくいくからね」とそう話されたようだね。するとだね、

「ああ、そうですか」と。その盗人はそれを聞いていた。

そして着物を脱いで、それで（臼を）結んだ。すると、ガラガラしたら、（盗人に）入っているのは見られているさあねえ。

「盗人だあ」したら、裸になっているさあ、

「盗人だ」と捕まえられたそうだ。

※1臼　穀物を砕いて粉にするための道具。

② 頓知で泥棒をこらしめた嬶さん

普久原幸（大正五年生）泡瀬

［方言原話］

おじーさんとおばーさんと居てね。ユーレー取ていちゃーに、うぬユーレー銭や、うまーユーレー取えーんちわかいくとう盗人きっさあまかい来てーるばーてー。あんさくとう、

「いゃーや、うぬ銭まーんかい置ちぇーたん」てぃむぬ、おじーさんがおばーさんかい言ちゃくとう、おばーさのー、

「私んねーンムカシぬみーんかいかじみてーくとうやちゃーんねーんさ、タンメー寝んじみそーれー」んち、ンムカシヌみーんかい入てーんてー。このおばーさんはね、頓知があるから、ンムカシんかい入てーねーんばーてー。うまかい盗人ぬうんちわかとーくとうや。あんさーになー、うまんかい入てーねーらんや、他んかいどぅかじみてーん。夜明きたくとうやー、ンムカシあるっさいっけーらっさっとーたんでぃ。

［共通語訳］

おじいさんとおばあさんといてね。ユーレー取ってきて、そのユーレーのお金はね、その家がユーレーを取ることを知っているので、盗人はすでにその家に来ていたわけさ。すると、

「お前は、そのお金をどこにしまっているのか」ということを、おじいさんがおばあさんに言うと、おばあさんは、

「私はンムカシの中に隠してあるから大丈夫だよ、おじいさん寝て下さい」と、ンムカシヌの中に隠していたんだろうね。このおばあさんはね、頓知があるから、ンムカシには入れてなかったわけさ。そこに盗人がいることを知っていたからね。それで、そこには入れてなくてね、別のところに隠していた。夜が明けると、ンムカシが全部ひっくり返されていたそうだ。

③ 頓知で泥棒を捕まえた話

普久原幸（大正五年生）泡瀬

［方言原話］

これお金入れてあったらね、なくなっているから、「なーうれー誰がら取てーくとうやー、うまんかい集まり」んでぃやーに集またくとうや、

「くり取てーしぇーやー、確かにやうりが手や、やー、味噌ぬかじゃするはじどー」ちゅって、取った人がこれ匂いしよったって。皆やー取てーねーんくとう、ぬーんでぃん思ぇしぇーやー。取った人も『あんやさ、かじゃすがやー本当』でぃ思やーに「フン」、あんさくとうバレたって。

［共通語訳］

（味噌の中に）これお金入れてあったらね、なくなっていたので、

「もうこれは誰かが（お金を）取ってるので、ここに集まりなさい」と声かけて、（皆が）集まると、

※1ユーレー　頼母子講のこと。互助的な金融組合。ムエー、モアイともいう。

※2ンムカシ　さつま芋からデンプンを取ったあとの粕。粕は少し発酵させてから、固く丸めて乾燥させた。長い間貯蔵できるので保存食として重宝された。

「お金取った人はね、確かにその人の手はね、味噌の匂いがするはずだ」と言ったら、取った人が自分の手を匂いしたそうだ。皆は取ってないから、なんとも思わないさあねえ。取った人は『そうか、匂いするのかなあ本当に』と思って「フン」（と手の匂いをかいだので）、それでバレたって。

④　煙管の裁判

金城實良（明治四十年生）古謝

昔はキシル（煙管）というものがあってね、煙草、刻み。それね、そのキシルというもの落としたらね（他の）人が拾ったんだ。人がね、拾ったから、「私のキシルはあんたが拾ったんだな」と言ったら、「そうでもない、そうでもない」こう（言い合い）したら、裁判になっているらしい。裁判になったら、その裁判長が（持ち主に）、「あんたも、あんしぇー[※1]煙草を入れて吸いなさい」と言って（拾った人にも）、「あんたも吸いなさい」と言ってね。

したらね、本当の主はきっちりいっぱいずつ入れたから、また一人の「私のもん」といった者は、拾った者はねあぶれて（入れたので）、「あんたのもんでない。これが（きっちり入れた人の）もんだ」。これで、裁判は解決したんだそうです。「本当の主はね、きっちり（キセルにキザミを）やって入れたものが、あんた（持ち主）のもの。あぶれてるからあんた（拾った人）のもんでない」。（持ち主は煙草の量を覚えていたのでちゃんと詰めることができたので、キセルを取り返すことができた）。

⑤　親調べ

金城實良（明治四十年生）古謝

（一人の子どもをめぐって、二人の親が名乗り出た）。

別の女と子どもを置いてね、そして、その子ども取りすぎ（あい）しているわけ、「私の子」。また産んだ人も「私の子」と言ってね。それが談判してね、二人だれも負けないでしょ。「そうなら、この足つまえて引きなさい」。引いてね、本当に産んだ人はね、これさけるでしょう、後はね、二人がつかんでした子どもはね。本当に産んだ人はゆる（離）して、産まない人は、自分の産んだ子でないから、うんと引っ張って。

だからね、それで、「うぬ子どもは、これが子」。こういうふうになったらしい。

こう引くでしょう、ね、本当に産んだ人がは、可愛いからゆるすんです。怪我したらいけないといってね。産まない人がね、うーんと引っ張る。引けば我は勝つからと言って。これが欲でしょう、欲。だから、私が産んだ子だから、これ、もったいないから、もう、怪我してはいけないからってゆるすんです。このゆるした者が、本当の親だったって。これで（わかったそうだ）。

※1 **あんしぇー煙草を**　それじゃあ、キセルの先の火皿に細かく刻んだタバコをつめ、これに火をつけて吸いなさい。

⑥　おまわりと盗人

屋宜カメ（明治四十一年生）　安慶田

［方言原話］

那覇んかい大泥棒ぬうたんでぃ。うぬ泥棒誰がん捕みーさんやー。あるおまわりさんが、『あんしぇー、誰がん捕みーさんむん、私が捕みてぃんでぃわりやる』んち、うぬおまわりさんが、サージコーガーキーし、悪い着物着ち、あんさーなかい泥棒ふーなーし、て一、泥棒ふーなーし出じゃーなかい、あぬうぬ泥棒やよー、ちゃーうーし行じゃくとぅ、

「いゃーまーかいが」んじゃくとぅ、

「私ねーうまんかい盗人しーが」んでぃ言たんでぃ。

「あんしぇー、私にん連てぃんじとぅらしぇー」んち、うぬおまわりさんが言ちゃくとぅやー、

「りっかーあんしぇーまじ、りっかーあんしー」行じゃんでぃ、うぬおまわりさのー。行じゃくとぅ、うぬ、盗人ハンドゥガーミんでぃねー昔ぇー、ハンドゥガーミんかい水入りーしぇーや。ニーブーさーま汲でぃちゃーに、ハシルんかきーたんでぃ、うぬ盗人ぬ。昔ぇー鍵ねーんしぇー。大昔ぇー鍵ねーんしぇーやー。うぬハシルミチんかい水かきたくとぅや、うぬハシローならんよーいあっちゅたんでぃ。あんさくとぅよー、うまんかい水かきたくとぅ、ならんよーいーあっちゃくとぅやー、あんくとぅ、うぬばーに、うぬおまわりさんが盗人かちみてぃ。

また、ちゃーしん、あまなかい、「私がかちみーくとぅ、うまんかい待っちょーきよー」んでぃ約束やてーんてー、うぬおまわりさのー。うぬ盗人よー、背ぬ高さしなかいやー、体んだてーんし頑丈者やたんでぃよー。うり親ぬちゃー話どぅやるばーてー。あんさくとぅ、かなわんぎさーなっていくぃ、殺さっていよー。今ぬぐとぅしぇー、うれーねーんしぇーやー、昔ぇー。手ぴかーじるやっさい。あんしうぬおまわりさのー倒さっていやー。あんくとぅかしーさーが来んでぃ朝からまた。かしーさーが来くとぅ、うぬばーにうぬ盗人かちみていやー、うぬおまわりさのー、いっぺーコー上がいたんでぃ。うぬ話んあたんどー。

あんさーに誰がんかちみーうさんたんでぃ、うぬ盗人。また恐さし、やー、また背ん高さなかい、頑丈ぎさぬ大やたんでぃ。誰がんかちみーうーさん。

［共通語訳］

那覇に大泥棒がいたって。この泥棒は誰も捕まえることができなかった。あるおまわりさんが、『そうやって、誰も捕まえることができないもの、私が捕まえてやろう』と、このおまわりさんが、手拭いでほおかぶりをして、粗末な着物着けて、そして泥棒のふりをして、泥棒のふりをして行ってから、その泥棒をずっと追いかけて行って、

「お前はどこにか」というと、

「私はそこに盗みに」と言ったそうだ。

「それじゃあ、私も連れていって下さい」と、このおまわりさんが言ったらね、

※1 りっかー　「さあ」と行動をうながす時に言う言葉。
※2 ハンドゥガーミ　水を蓄えておくカメ。生活用水として使用。

「さあそれならまず、行こう」と（一緒に）行ったそうだ、このおまわりさんは。この盗人は水がめといったら昔は、水がめに水入れるさあね。ヒシャクで（水を）汲んできて、雨戸にかけたそうだ、その盗人が。昔は鍵はないさあねえ。大昔は鍵というものはないさあねえ。その雨戸に水をかけたからね、この雨戸は音をたてることなく開けられたそうだ。だからね、雨戸に水をかけたので音もせずに開いたのでね、その時に、このおまわりさんがこの盗人を捕まえた。

また、このおまわりさんも「どんなことがあってもこの盗人は私が捕まえるからそこで待ってなさいね」と（同じおまわりに）約束してたはず、このおまわりさんは。この盗人はね、背が高いうえに、体もたいそう大きく頑丈そうであったって。これは親たちの話なんだけどね。そしたから、勝ち目がないと知っていたが、やっつけられてね。今のように、これ（武器）はないさあねえ、昔は。素手ばかりであるから。そしたら、このおまわりさんは倒されてね、だから、加勢する人が側から来たそうだ。加勢する人が来たから、この時にこの盗人を捕まえてね。このおまわりさんは、たいそう階級が上がったそうだ。こんな話があったよ。

そうやって誰も捕まえることができなかったって、その盗人は。また恐がって、それに背も高いし、頑丈そうで大きかったそうだ。誰も捕まえることができなかったそうだ。

（2）牛の上歯

①　侍の牛

久場政三（明治四十三年生）　園田

［方言原話］

侍が、今度はとってもいい牛養うておったらしい。あんさーい、

「この牛売り」んでいちん、てぃーちん売みそーらんよー侍や、うぬちかなとーる牛ぇ。さーい、博労同士相談さーなかい、

「な、うぬん、うぬ牛ぇてぃーちん売らんくとう」んでぃやーなかい。あとー、いぬ博労同士相談さーなかい。あんさーい、

「とー、あの牛ぇてぃーちん売らんくとうぃゃー行ちゃーなかい口開きてぃ見ち、あぬ牛買ていくーよー」んでぃち。あんし博労同士相談さーなかい。あんえー、うぬ博労一人ぬ者ぬ行ちゃーなかい、うぬ牛ぇー出じゃち見じゃーなかい、口開きてぃ見たら、牛は上びぬ歯ねーんしぇーやー、上の歯は。下にあるけども。あんさぐとう、

「トートー、うぬ牛ぇー私がないびらんむん、入っとーちゃびらうー」でぃやーに牛ぬ家んかい入りやーに。今度うぬ、牛ぬ、

「ぬーが、ぬーやが」んちゃぐとう、

「うんじゅなー牛ぇー、私がならんしぇー、うぬ、カタヒチムンなやーなかい私がーないびらんどー」でぃ。

※1博労　各地を渡り歩き、牛や馬、豚の売買の仕事をする人。

「ぬーが、ちゃんぐとぅーそーが」んちゃくとぅ、
「上びぬ歯やねーやびらん」
「ワッ、上ぬ歯やねーらん」
「私がないびらん。うれー買やーがうらー早くなー売みそーりよー」んち、あんし一人ぬ者ぬうりさーい。あんさーまた次の博労やらさーなかい、今度半分代さーい買ていちぇん。
だから博労にはやられたわけさ。侍のそういう経験はないやろー。牛ちかなたいぬーさいする経験。また、口も開きてい見ちゃるばーんちぇーねーらんしぇー。うんぐとぅーし一博労なかいわちゃくさってい、半分代し売とーるばー。

〔共通語訳〕
侍が、今度はとってもいい牛を養うておったらしい。それで、
「この牛売って下さい」と言っても、なかなか売って下さらないわけ侍は、その養っている牛を。それで博労同士相談して、
「も、この侍は、その牛をなかなか売らないから」と言って。しまいには、同じ博労同士相談をした。そして、
「なあ、あの牛はなかなか売ってくれないから、あなたが行ってから（牛の）口を開けて見て、あの牛を買って来い」と言って、そうやって博労同士相談した。この博労の一人が行ってから、その牛を出して見て口を開けて見たら、牛は上の歯はないさあねえ、上の歯は。下にはあるけども。すると、
「さあさあ、この牛は私が買うことはできませんので入れておきましょうね」と言って牛小屋に入れた。すると牛の（飼い主の侍は）、
「なに、どうかしたのか」と言うと、
「あなたの牛を私が買わないのは、この牛はかたわ者なので、私は買うことができません」と。
「何、どうしているというのか」と聞くので、
「上の歯がありません」
「え、上の歯がない」
「私は買うことができません。他に買い手がいたら、早くお売り下さいね」と言って、そうやって一人の（博労の）者は帰った。そしてまた、次の博労を行かしたら、その時は半分の値段で買ってきた。
そうやって博労にやられたわけさ。侍はそういう経験はないやろう。牛を養ったり、もろもろの経験は。また、口を開けて見たこともないさあ。そのようにして博労たちにからかわれて、半分の値段で売ってるわけさ。

②　牛の歯

普久原幸（大正五年生）　沖縄

〔方言原話〕
ある所にね、牛飼った人がいてね、その牛の飼い主はお金持ちの人であって、大切な牛だから誰にも売らないって言っていたって。それで買い手はたくさんいるけどね、売らないというもんだから、誰か

がねあれ買える人だったら、知恵がある人だったらということでね、それで買いに行ったら、誰が行っても売らないのに、この（知恵のある）人は行ってね、「にったー牛ぇカタヒチムンやっさー」と言ったらしいよ。

「ぬーんちあん言ゆが」んちゃくとぅ、

「うぬ牛ぇやー上歯やねーらんどー。なーにったーむぬ、むしかうり私にんかいうぬ牛売らんだらーやー、私がや、ふりてぃ歩ちや、あまぬ牛ぇや、カタヒチムンちかなとーんどーでぃやーにや、私がふりてぃ歩ちゅんどー」とーくとぅ、

「あんすらーなーいやー買れーなー。誰んかい言なよー」っち売ったって。売ったらね、この牛は本当はね、この牛というのはね、上歯はないって。動物には角がある動物は上歯はないって。ヒージャーもないってよ、上歯は。だから、これ、私父から聞いていたわけ。

［共通語訳］

ある所にね、牛飼った人がいてね、その牛の飼い主はお金持ちの人であって、大切な牛だから誰にも売らないって言っていたって。それで買い手はたくさんいるけどね、売らないというもんだから、誰かがねあれ買える人だったら、知恵がある人だったらということでね、それで買いに行ったら、誰が行っても売らないのに、この（知恵のある）人は行ってね、「あなた達の牛はかたわ者だね」と言ったらしいよ。

「どうしてそう言うのか」と言ったら、

「その牛はね上歯はないよ。もう、あなたの牛、もしそれを私にその牛を売らなければね、私がねふれまわって、あそこの牛はねかたわの牛を飼っているよと言って、私が方々へいいふらすよ」と言ったら、

「それならあなたが買いなさい、もう。誰にも言うなよ」と売ったって。売ったらね、この牛は本当はね、この牛というのはね、上歯はないって。動物にはね、角がある動物は上歯はないって。ヤギもないってよ、上歯は。だから、これ、私父から聞いていたわけ。

（3）夫の改心

①　夫を改心させた妻

内間シモ（明治四十四年生）城前

とっても酒喰（のんだくれ）よ、酒喰旦那さんあたってからさ、ごうまんで。また、この妻は働き者で信仰が深かった。心ぐわー上等やたんでぃ。なー、酒飲まーん（酒飲み）みんな連れて来てよ。酒飲んで喰たりしてよ、七人ぐらいだったって。して、この女はさ信仰持っていたって。

ある日さ、今日ももうかってきたらよ、「酒出せ出せー、酒出せー、酒出せー」と言って妻もあんまりイジルわけって。

ある時にさ、何もない中で、雨がドロドロ降る時にさ、『もー、今日はや、今日もまた叩かれるねー』と思っているけれどさ。かみくくれてな、したら、

雨垂ぐわーぬ下んかい（軒下に）立ってや、『神様やめんしぇーねーや、くーやーんかんちち、どぅーぬ主人がてー、くーやー何出じゃしんでぃくーすが、ちゃーるふーじぇーましやいびーがやー（神様がいらっしゃいましたら教えて下さい。今日は雨が降ってかせぐことができないのに、私の主人が今日はなにを出せと言われたら、どうしたらいいでしょうか）と言ってよ祈ってる時によ、

「髪の毛はないか！」でぃ言たんでぃ。神の御言葉がさ、神の浮かんでいるわけさ、あんな信じたら。昔はイリガンといって、も、髪の毛みんなだらしてしたでしょう。イリガンてこれぐらいしてから二百円なー売られたよ。頭はみな剃ってからよ、くくって、これを売ってからよ。すきだしから、ぬーから（いろんなものこしらえて）。またや、ウチュクイかんていー、サージんかんていから（風呂敷をかぶってね、テヌグイをかぶってから）、ハギ（ハゲ）ているでしょう。また、つき出し分みんな出して腹いっぱいあげてから、酒飲んでいったから、

「いゃーや頭ぬーなとー」が（お前の頭はどうしたのか）」と叩いたから、坊主なっていたって、自分の妻がよ。したら、

「いゃーやかたちちゃーるふじが（お前のその姿はどういうことだ）」んち、や、

「朝夕かんちちや、つき出し出しぇーんでぃちち、今日や雨降でぃやもーきーが行かりん。かんちち、哀りちゃくとぅむいゃーや、あんちち切や。どぅーぬどぅー売いるや、自分の体どう売いるや、あんし、まーからうぬ銭ちちくーが。どぅーや、あんちうれー、むる、イリガンなかいや、イリガンしていや、うりさんどー。いったんかいや、まかなていくいーんどー（朝夕こうしてね、つき出し出しなさいと言われるが、今日は雨が降ってね働きに行けない。それで、悩んでいたら、髪を切ろうと思った。自分の体を売ってね、自分の体を売るしかなく、そうじゃないと、どこからそのお金を工面すればいいのか。私は、それでイリガンをね、イリガンをとってお金にしたんですよ。あなた達に食事をあげたんです）」と言ったらよー、

「ハーッ」。このオトーは、この夫はさ、悔い改めてさ、泣いてよ、

「申し訳なかったやー。あんちぬ心ぬ清らさんなー（こんなに心がきれいなのか）。なー、申し訳なかった」と言ってよ。もう、一緒にさ、この場にさ、七人のごうまんな男までよ、もう、悔い改めてさ、

「なー、今日から！、あんちゅくとぅさんかやー（もう、今日からは、そのようなことはしないでおこうなあ）」と言ってよ、信仰したってよーこれ、そのごうまんな人らち。

朝夕女一人苦しめて、苦しめておいてから、後ぬんじゅみねー（あげくのはてには）何もないでしょう。

神様あんなするって。どんな人間もね、罪を許さないといかないって、神は悔い改めたらよ。あんな事もあるよ。

※1イリガン　入れ髪。女性の髪（カンプー）を結う時、髪が少ない人が頭髪を補うために入れる髪のこと。

それからは、もう、酒飲む夫も悔い改めて、働いて、一生懸命家庭上等作って、あれしたって。あんなこともあるよー。髪の毛まで剃ってから、イリガンして売ってから、これでね、つきだしでしょう。どんなね、男はヤナムンやてぃんや（悪い人であっても）、昔は人間なすけれど（まっとうな人間にするけれど）、今はそうでないで、こんどこんちゅーしや、むる。今世の中は非常に違って。昔のことは。後はしっかりしてもう、銭もうけ一緒にしてよ、成功したらしいよ。

② ジュリ通いをやめさせた妻

湧田トミ（大正五年生）センター

自分の旦那が花の島に通っているわけさ。雨が降っていたって。この旦那は行けないで雨宿りして、こっちに立っていたはず。

雨や静かなていたぼり
（雨よ止んで下さい）
里が花ぬ島着ちゅる間
（わが思う方が花街に着くまでは）

大雨が降っているから、奥さんが（歌を）詠んでいる。旦那はこれ聞いてね、心をひっかえして（入れ替えた）。

（4）知恵比べあれこれ

① インナーを取った人

本部ツル（明治三十九年生）宜川

［方言原話］

十二、三どぅないしぇーやー。三人私たーすぐ立ちょーるばーてー。残いや離りとーたるばー。まぎウナジぬや、ムサムサムサむげーとーるばーてー。あんすとぅ、あるおじーさんがやー、「えー、わらばーたー、うれーハブやくとぅくぃーぐとぅやー、いったー早くひんぎれー、ひんぎれー」ち、ひんがちゃるばー。わったーひんがさーんかいや、ティール持ちょーしぇー、ううりんかいむる取たい入りーぎーたん。ウナジやたんでぃ。
うれー、わらばーそーいぬ話。

［共通語訳］

十二、三歳しかならないさあね。三人私たちそこに立っていたわけさあ。残りの人たちは離れていたわけ。大きいウナギがさ、ウジャウジャいたわけさ。そしたら、あるおじいさんがね、
「ねえ、子どもたちよ、これはハブだからかむのでね、あなた達は早く逃げなさい、逃げなさい」と、逃がしたわけ。私達を逃がしてからね、（おじいさんは）ティール持っていたので、それに全部取って入れていた。ウナギだったそうだ。
それは、子どもの頃の話。

※1ティール　竹製のつぼ型の容器で腰にさげて使う。

②　娘の厄除け

新城安平（大正二年生）　宮川

戦前ね、こっちは糸満だな。これ本船が、船が、入って来てね、そしてこの船持ちらは、方言でフナトーと言うさ、船持ちらは。その人らボートに二、三名乗ってきて丘に上がって、本船を沖にイカリ下ろして待って。そいで、マチヤグワー（小さな雑貨店）で、お店でさ、一合売りって酒買うて、この三名酒飲んでするうちに、風が急に来てね、二月の季節外れの台風だから、二月頃来るのはあれは二月カジマヤーという方言では。だから、時期外れの台風来て、この人らはもう、船に帰られんから、

「天気なったら明日帰ろう」ってやっていたら、

「もう、このマチヤグワーに泊ろう」っていったら、マチヤグワー小さいから泊れないから。この側の家はまた大きな家であるわけ。んでー、向こうに、

「こっちは小さいから、あんたとこに今日一晩は泊らしてくれー」言うてお願いしたらよ、向こうの人は、

「年ぇ十七、八ぐらいのネーネーが病気で何してるから泊られない」と言った。だからこの船持ちらはね、少し知恵出したんだな。

「はー」と言って。ただもうこう下見してたんだろうな。この娘さんは御飯も食べないで一週間ぐらいなるって。一人娘であるはずよ、これが。そしたら、

「あんた方、これは何か」、ユタぐとうというんだ。何かカカイムン（つきもの）というさー沖縄語で。

「それがあるだろう」と言って、この船持ちらは、もーこの家下見してわかりよったんだねー。

あんた所の豚小屋の側にガジマル木いうてね、大きな木が生えていた。そして、

「このガジマル木はねヒゲは一つはね、あんたとこのオカマ、カマ。昔は大きなカマがあったこれの後ろにヒゲは一つはいっている」と。この人は非常にうまいこと言うたんでしょうなー。

「一つはねこの娘さんの枕もとにいってる。一つは豚小屋にさしている」と。だからこの豚ね、今日たいがい五時頃だったらしいが、

「この豚今日でつぶして、ガジマルの大きな木も切って。それのタタリやかからこれ切ってから、代わりまた小さいの持ってきて植えればいいから」。

「そうだ、これで治るもんやったら」。この豚はアーヒャー（親豚）いゆうてね、アーヒャー（親豚）やるいゆうて豚やけも、これ、も、なにもないから総動員で、親戚全部出て総動員でこれ殺して。そして、また、このネーネーに連れて行って、これはまた一番栄養あるチムグワーあげるさー、肝臓。これをねって食べらして、マブヤーグミというのやったわけ。そうして、この人がウソ言うてさ、ウソ言うたらこれがあたったって。そして、これも食べて一晩寝たら、このネーネー明くる日、一週間もご飯食べんのがね、明くる日なったら大元気なって。もー、一番鳥がうたう時分には、（船乗りらは）も、ウソついたから大変だからさ、早く船に逃げようとした。また、このネーネーが朝起きて親に言うにね、

※1**糸満**　沖縄本島南部の主要都市。漁業の盛んな所として知られる。
※2**一合**　一升の十分の一。
※3**二月カジマヤー**　旧暦二月の大しけの続く期間のこと。風向きが急変し、ときには突風をともなう。
※4**ネーネー**　お姉さん。ここでは娘さんのこと。
※5**ユタ**　占いなどをおこなう巫女。沖縄ではユタに病気などについて、占ってもらうこともある。
※6**ガジマル**　ガジュマルのこと。クワ科の常緑高木。
※7**チムグワー**　豚の肝で滋養や薬効があるとされる。グワーは小さいものや、愛称の接尾語。
※8**マブヤーグミ**　身体から遊離したマブイ（霊魂）をその人に戻す儀礼。

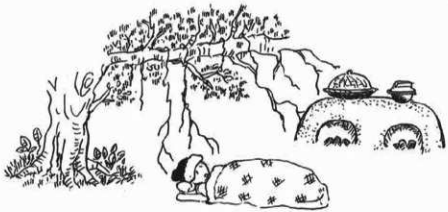
「私はもう、あの人らがマブヤーグミしたから非常に元気なったから、お母さん元気なったよー」ったら、「じゃー、あの人らのお陰やから、早く肉も持ってあの人らにお土産持たそう。夕べつぶした豚肉持たそう」したら、あれらはウソ言うたから捕まえられると思ってね、その肉持って行く時からもう、浜からボート出して本船の前に向いていた。肉持たそう思うてさ、

「こい、こい、こい」言うて、この家族が言うけどね、ウソ言うたこの人らは。も、捕まえられると思って、よけい、この船をこいで逃げて。あれらは、このお礼言うつもりでやったわけ。

　そしてこれ（娘）は元気になって。三カ年過ぎて、この人らが帰って来てね、また来てね、このマチヤグワーで酒飲んで、

「向こうのネーネーはね、あの時、あんな不元気で何したら元気なったかなー」と言うたら、このマチヤグワーの人がね、

「あんた方がねー豚も殺して、何してマブヤーグミしたから非常に元気なって、今は婿入れて、婿さんももろうて、一人娘やから、女の子も一人出来るよー」って、「私らがウソだったか、これで治ったか」。



Ⅱ　形式譚

①　話に葉なし

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

［方言原話］

「話や葉んねーん」でぃしとーゆぬむんどぅやくとぅよー。

「うっぺーぬ大根あん」でぃちゃくとぅ、「うぬ葉ちゃっぴがそーたらーやー」んちゃくとぅ、「うれ、話やさ、葉ねーんたんどー」でぃ言るばーてー。

「一坪ぐらいの大根ぬあたんでぃさ」くとぅ、「これは葉はどのくらいあったかなー」でぃちゃくとぅ、「うれー話どぅやいとぅ、葉ねーんたんでぃ」。話どぅやくとぅ葉ねーんたんでぃ。

［共通語訳］

「話には葉がない」というのと同じことだからよ。

「こんな大きな大根があった」といったので、「その大根の葉はどれほど大きいものだったのかねえ」と言ったら、

「それは話なので葉はなかったよ」と言うわけさあ。

「一坪ぐらいの大根があったそうだ」というので、「これの葉はどのくらいあったかなあ」というと、「それは話なので、葉はなかったそうだ」。話なので葉はなかったそうだ。

②　田芋の葉

比嘉良信（大正五年生）中の町

［方言原話］

根ん葉んねーんしぇーやー。あんさくとぅ、那覇からあまんかい行ちーねー、田芋馬車んかい乗して行ちゅてんてー、えーりん。

「アーッサミヨー、うひなーなーぬ田芋馬車ぬみーそーたっさー」んでぃちぃ、うぬ人言ちぇーるばーてー。「馬車ぬみー田芋積どーし見ちゃっさー」やれー話しぇーわかいるばーてー。「馬車ぬみーそーる田芋持ちはいたっさー」んちゃくとぅ、また、うぬ聞ちょーる人。

「あんしぇー、うりが葉やれー、家ぐぁーぬうひ広がとーてーんでーやー」んでぃ言たんでぃよー。

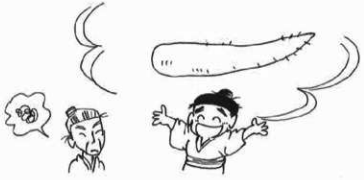
芋が大きければ、葉大きい当たり前のことではあるのねー。馬車一台に田芋一ち乗いるわけーねーんしぇーやー。うり、聞ちゃる人田芋一つで馬車にみーそーたんでぃ思とーるばーてー。

あんくとぅ、聞ちぱっぺーはやっぱり変な所に行ってしまうわけ。

［共通語訳］

（話には）根も葉もないさあねえ。すると、那覇からあそこ（町）に行く時には、田芋を馬車に乗せて行ってたんだろうねえ、たぶん。

「アーッサミヨー、こんな大きな田芋が馬車にいっぱいしていたなあ」と、その人は言ったようだね。「馬



※1アーッサミヨー　非常に驚いた時になどに、思わず口にする言葉。

車のいっぱい田芋を積んでいるのを見たよ」なら話はわかるわけさあ。「馬車のいっぱいしている田芋を運んでいたねえ」と言ったので、また、それを聞いた人は、

「それなら、その芋の葉なら、家の大きさくらい広がっていただろうな」と言ったそうだよ。

芋が大きければ、葉大きいの当たり前のことではあるのね。馬車一台に田芋一つだけ乗せるわけはないさあねえ。それ、聞いた人は田芋一つで馬車いっぱいになっていたと思っているわけさ。

だから、聞き違いはやっぱり変な所にいってしまうわけ。

Ⅲ　誇張譚

〔一〕業比べ

（1）壮大な力比べ

①　大力者の牛担ぎ

普久原幸（大正五年生）泡瀬

［方言原話］

まーぬ力あてぃからや、ちゃー力だめししーぶさてーるばーてー。あんさーに海からや、サバニかたみやーによ、うまぬ家（やー）んかい来（ちゃー）に、

「いったースーまーかいが」でぃやーに、うまぬ家（やー）ぬうまかいいちょーとぅー、サバねー。さくとぅやー、うぬスーやまた牛うーふぁし来（ちょー）たんでぃ、

「ちゃーが」でぃちてー、

「いゃーん力」。

あんすくとぅよー、昔の人はね、こんなことがあったらしいよー、あっちこっちで。

［共通語訳］

どこでも力のある人はね、つねに力試しをしたかったようだね。それで海からね、サバニを担いで、そこ（大力者）の家に来て、

「あなた達のお父さんはどこに行ったのか」と言って、そこの家に座っていた、サバニは置いて。すると、そこの主人はまた牛を背負って来たそうだ、

「どうだ」と言ってね、

「お前も力持ちだね」。

だからね、昔の人はねこんな（力試しをする）ことがあったらしいよう、あっちこっちで。

②　仁王仏とマカ仏

新崎カマド（明治四十二年生）中の町

波之上（※1）にあるさー。マカー仏（※2）と仁王仏（※3）という仏があるさーねー。仁王と言うのは名前だよ。あれはね、あれも内地から来て、遊びに来ているわけだけど。この仁王仏はよそに遊びに行っているわけ。その間にお友達が内地から遊びに来ているわけだけど、マカー仏（ぶとうぎ）が、

「仁王仏（ぶとうぎ）まーかい行（ん）じゃが（どこに行ったか）」といったら、

「私（わ）たー仁王仏（ぶとうぎ）一里先から足音ぬあくとぅ、やがてぃめんしぇーん（私達の仁王仏は一里先から足音が聞こえるから、やがて来るでしょう）」一里先からそういう足音が聞こえるから、やがて来るから。

「うちの仁王仏、庭に石ころがあるから、それを毎日、それと一緒に遊んでいる」といって見たら、大きな森（と同じくらいの大きさ）で。（マカー仏は）恐くて、「これと一緒に、毎日これを持って遊んでいたら、どういう人か分からないから」と言って、これも腕比べらしいんだけど、すぐ逃げて行ったって、驚いて。

「あまんかいまぎ石ぬあくとぅ、わったー仁王仏（ぶとうぎ）マカー、仁王仏（ぶとうぎ）毎日（ぬーにち）うりとぅどぅ遊（あし）どーくとぅ、あ

※1 **波之上**　琉球八社の一つである波之上宮がある一帯。

※2 **マカー仏**　仏法を守る神で、寺の門の両わきに置く一対の金剛力士の妻の方。

※3 **仁王仏**　仏法を守る神で、寺の門の両わきに置く一対の金剛力士。

りとぅ行じむたび遊びみそーれー（あそこに大きな石があるから、私達の仁王仏はマカー、仁王仏は毎日それと遊んでいるので、行ってそれと遊んで下さい）」でぃちゃぐとぅ（と言うと）、見じゃーに、すぐひんぎー（見て、すぐさま逃げて行った）。仁王仏んでぃねー男。波の上に飾られているはずよー。夫婦だよ。仁王仏、マカー仏。昔のものはなくっても、今は作って飾ってある。

内地の人が、仁王仏と戦いに来ているけど、「あの石ころと遊んでみなさい」と言ったら、これを見てから驚いて。大きな森があったって、これを見て驚いて、もうそのまま帰ったって、だまーって。

そのぐらいもー、沖縄は偉い人がいたらしいんだけど、もー内地には馬鹿にされてね。今は、同じようにみているけど。

［二］巨大なもの

① 海で一番大きなもの

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

［方言原話］

ガニぬまぎさんどぅぬ話する本当やたがやーでぃ思いっさーやー。

岩んでぃちうまってぃ海ん人が火燃ちさくとう、歩ちゃぐとうるガニやさんでぃわかたんどぅぬ話でー。本当かうれー、どーかなーと思うね。

岩るやるんでぃいゃーに、うまうてぃムヌあちらちかむんちさくとう、火燃ちゃれー、ながりぬ熱りやーに、歩ちょーたんでぃ。あんさーい、「ガニどぅやっさー」でぃ。岩ぬうひそーんでーぬーわからんやー。クジラぬ話「まぎさんどー」し話やしがよー。だー、昔話クジラやかんガニぬまぎーがうたんどぅぬ、昔ぇ。

［共通語訳］

カニが大きかったという話をするが、本当だったかなあと思うよね。

岩と思ってそこで漁師が火を燃やしたら、歩いたのでカニだとわかったという話だが。本当かどうか、どうかなあと思うね。

岩だといって、そこで食べ物を温めて食べようとして、火を燃やしたら、（カニの）背中が熱くなり、歩いていたそうだ。それで、「カニだなあ」と。岩の大きさあったというからわからないよね。クジラの話も「大きいよ」という話だがね。だけど、昔話はクジラよりカニの大きいのがいたという、昔は。

Ⅳ　愚人譚

〔一〕愚かな嫁

（1）屁ひり嫁

①　屁ひり女

神里マカト（明治四十五年生）安慶田

〔方言原話〕

「今日や結婚式だからね、いゃーやあまんじ屁ひんなよー」でぃ言ちゃぐとぅや、

「あんしぇーなー、ぬーがらうすとーきらさ」、うすてーたんでぃ、ワターうっぴふっくぃていよー。なー、また、うちなちゃーなかいうりさくとうてー、親んかい、

「なー、私ねーなー、でーじなとーさなー。うぬワタんうっぴふっくぃとーしがやー屁ひらん。ありそーくとう」んちゃぐとぅや、

「とーあんしぇーなー、あまかい、家ぬくしーんかい行じゃーに、家ぬくしーぬウーぬみーんかい行じゃーに、屁ひっちくわー」。くさーうまんかい行じゃくとぅ、パーラない屁ひっちよー、あんさーなかいねーんなとーたんでぃ、うぬ屁。あんさーワタんねーんなとーたんでぃ。

〔共通語訳〕

「今日は結婚式だからね、お前はあそこで屁をひるなよ」と言ったらね、

「それじゃあ、何かでふさいでおかなければ」、ふさいでいたら、おなかがたいそうふくれてしまってね。それで、その結婚式が終わったので、親に、

「もう、私は大変なことになっている。このおなかがこんなにふくれているのはね、屁をひらないで、がまんしているから」と言ったらね、

「さあそれなら、あそこに、家の後ろに行って、家の後ろの芭蕉の所に行って、屁をひってきなさい」。後ろの芭蕉の所に行って、おもいきり屁をひった、そうしたら、すっきりしたそうだ、屁をひって。そしておなかのふくれもなくなっていたそうだ。

②　へひり嫁

普久原幸（大正五年生）泡瀬

〔方言原話〕

いっぺー屁ひやーやたくとぅ、うぬ女。結婚させたらねうぬおばさんたー心配さーにや、うまぬ家んとぅー行じゃんでぃ。あんくとぅ、うりが屁ひっちぇーねーや、あまうていうりしーねーならんくとう「いゃーやー、んまーや、ちゃーいーねーや、アドーやうまんかい入ていや、うんぐとうしいりよーやー」って言ったら。あんさーに、うぬおばさんたーやうまぬ家んかい行じゃーに、

「アードゥーマージュー　ウービートーミ」でぃ言たんでぃ。

あんさくとぅよ、昔の人はくーてんぐぁーそそう

があったら出されるからねー、出されたらまた迷惑さー、えーかんちゃーまでぃんやー「あれー、あまから出じゃさったんでぃどー」でー迷惑。なまん人平気だけど。

「アードゥーマージュー　ウービートーミ」でぃ言ったんでぃ。

［共通語訳］

たいそう屁をひる人だったらしく、その女は。結婚させたらね、そのおばさん達が心配してね、嫁がせた家まで行ったそうだ。それで、女が屁ひったらね、嫁ぎ先で屁をひったらいけないから「あなたがあそこでいつもすわる時には、カカトをお尻の穴にあてて、そうやってすわりなさいね」と言ってた。そして、そのおばさん達はそこの家に行って、

「カカトだよマージュー、覚えているか」と言ってたそうだ。

だからね、昔の人は少しでもそそうをしたら家から出されるからね、出されたらまた迷惑さあ、親戚までもね「あの娘は、嫁ぎ先から出されたそうだよ」と言われたら迷惑。今の人は平気だけど。

「カカトだよマージュー、覚えていますか」と言ってたそうだ。

③　屁ひり嫁

徳里カメ（大正七年生）園田

［方言原話］

お嫁に行く時には、何回も言ったんですって、

「アードゥーどぅーやーマージュー」ち、いくけーぬん親が習ちやらちゃんでぃ。いちょーてぃ尻んかいアドゥ押しんきでぃちょーるばーてー。それ、聞いた。

嫁に行くけど屁をへって、今いうオナラをして出されるんですって。出されるんだってよ、そこの姑さんに。それを聞いたんです。そしたら、今度はお母さん心配して、今度の時にはもー、

「アードゥーどぅーやーマージュー」と言った。だから私らも、それを、女はそれしていかんと言よった。

［共通語訳］

お嫁に行く時には、何回も言ったんですって、

「カカトだよマージュー」と、幾度も親が教えて行かしたそうだ。すわっていて尻にカカトをあてておきなさいと言っているわけさ。その話を聞いた。

嫁に行くけど屁をひって、今いうオナラをして（嫁ぎ先から）出されるんですって。出されるんだってよ、そこの姑さんに。それを聞いたんです。そしたら、今度はお母さん心配して、今度の時にはもう、

「カカトだよマージュー」と言った。だから私らも、屁を、女は屁をひったらいかんと言よった。

④　屁ひり嫁

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

［方言原話］

うれーマージュー名やてーんてー。「アードゥーどーマージュー忘しんなよー」でぃちファーフジんかい。アードゥーんでーアドゥ、アドゥくーいんちっとうるばーてー、チビんかい。

「アードゥーどーマージュー忘しんなよー」でぃ、「ウー」とーてぃ行ちゅるばーてー。「うり忘しんなよー」とうるばー。アジュくんちへるんでぃばーならんばーてー、えーりん。

［共通語訳］

娘の名はマージューといってたんだろうな。「カカトだよマージュー忘れるなよ」と祖父母に言われていた。カカトとはカカトね、カカトでふさぎなさいというわけさ、尻に。

「カカトだよマージュー忘れるなよ」と、「はい」といって（嫁に）行くわけさ。「それを忘れるなよ」というわけ。カカトをあてていたら、屁をひっても音が出ないわけさ、たぶん。

⑤　屁ひり嫁

西平マツ（明治三十四年生）久保田

親がね、あんまりね、子どものすぐ屁ひってね、もうすわるわん、立てぃわん（座っても立っても）、みな（しょっちゅう）プー、プー、プーしよったって。

この女はよ、屁ひりんち知らない、嫁に貰いに来てね、結婚する時によ、親がよ、子どもにね、「アードゥーよーマージュー、アードゥーよーマージュー、（カカトだよマージュー、カカトだよマージュー）言うてね、この足のこれ（カカト）にね、カカトとでね、お尻こっちに（あてて）ね隠して、これであれ（屁が出ないように）やったって。

そうやけどよ、隠してもよ、もう結婚したらね、あんまり、屁がすごいから親ぬ家に帰したって。これはもう何かの病気でしたでしょう。

⑥　屁ひり嫁

佐久田千代（大正七年生）室川

（ある所に屁ひりの娘がいたので、お母さんはいつも、

「アールーよーモーサー（カカトだよモーサー）」でぃーねー（と言っては）「覚ぴーとーみー（覚えていますか）」でぃちぇーうっさに（と確認したりしていた。やっぱしあるさあねえ、これね。そって、「アドゥ（かかと）とはね、これは覚えているかあ」って言ったらね、「覚ぴーとーみー（覚えているか）」ちぇーういし、結婚のーしまちぇーるばーてー（と言ったりして、結婚は無事に終えたらしいねえ）。

「あんしぇー向こう行ったらね、なんにでもウー（御）を入れないとね言葉とーらん（通用しない）から、ウー入れなさいよー」と、これはもう、ずっと

※1ウー　御。尊敬を表す。

教えられているから。して、向こう行ってから、結婚していってからよ、隣の家にね、なんとか（何かを）借りに行かしたからよ、昔は全部米とか豆とか作っているさーねー自分で。そっーて、この広い所にゴザ敷いて、ニクブク敷いて豆干してあったって。して、鳥が来て食べよったって。したら、（嫁にいった娘が）、「ウンジュナ、ウニワヌ、ウマーメー、ウトゥイヌ、ウクワミシェービーサ（あなたのお庭にあるお豆をお鳥がお食べになっていますよ）ウフワーイ、ウフワーイ」と言っていたそうだ。全部に「ウ」を入れているさ。首里では「ウータリ、アータリ」してね。

⑦　屁ひり嫁

佐渡山ゴセイ（大正二年生）城前

このアドゥ（かかと）、これをこっち（尻の穴）に突っ込んでおきなさいという意味だったんだはず。プーしてなるから、これ突っ込んでいたらプーしないさ。「アードゥーよーカマドゥー（かかとだよカマドゥー）」とかなんとか言っていた。

いっぺー屁をひる人であったらしい。「このアドゥ（かかと）はおしりのところにあてなさい」って言よったって。

［二］愚か者

（1）田舎者と上流言葉

①　ウーミー嫁

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

［方言原話］

一つはね、もう一つ面白い話、ちょっと長いけどもね。

田舎の女の子がね、今度は首里にね、お嫁に行くようになったって、お嫁に。でー、こっちの親、兄弟が、女の親、兄弟がね、

「むこう、首里んかい行ちーねーや、むるウーとミーや入てい話さいあいねーならんどーやー」んち、も、うんと田舎の人に教えられたらしいんだよ、ね。

うわーかせいでいって、ある日のこと、あんし、この、庭の方にね豆を干して、その嫁ぐわーに、番させて、「君は番しておきなさいよー」っと言うたらしいんだよ。

「ウー」と言うてねやったらしいんだ。そーして、そのうちに、鳥が来て豆をつつきよーるという。そして、言い分がおかしいんだよ。

「アヤータイ、アヤータイ」

「ぬーが、ひー」んちゃぐとうや、

「ミ庭に、ミ庭にふちぇーるミ豆、ミ鳥ぬ、ミ喰いびーしが」でい。

「ミ庭にふちぇーるミ豆、御庭に、御庭にふちぇーる

※1 ニクブク　藺などで編んだ敷物で物干し等にも用いた。
※2 ウフワーイ　トリを追い立てる言葉か。
※3 ウーとミー　敬う言葉。
※4 アヤー　士族の母親の呼称で「お母さん」。

ミ豆、ミ鳥、ミ鳥ぬ、ミ喰いぴーしが」と言ゅうたんだ。言葉、あんだけ「ミー」と「ウー」入れたわけさーねー。そして、

「あんしぇー、チルグヮー追れー」と言ゅうたらね、「ミホーイホーイ、ミホーイホーイ」と言っていったらしい。

［共通語訳］

一つはね、もう一つ面白い話、ちょっと長いけどもね。

田舎の女の子がね、今度は首里にね、お嫁に行くようになったって、お嫁に。で、こっちの親、兄弟が、女の親、兄弟がね、

「むこう、首里に行ったらね、すべてに「ウー」と「ミー」は入れて話しないといけないからね」と、も、うんと田舎の人に教えられたらしいんだよ、ね。

嫁いで行って、ある日のこと、そして、この、庭の方にね豆を干して、その嫁に番させて、「君は番をしておきなさいよ」と言うたらしいんだ。

「はい」と言うてねやったらしいんだ。そして、そのうちに、鳥が来て豆をつついていたそうだ。そして、言い分がおかしいんだよ。

「お母さん、お母さん」

「どうしたのかね」と言うとね、

「御庭に、御庭に干してある御豆は、御鳥が、御食べになりますが」と。

「御庭に干してある御豆は、御庭に、御庭に干してある御豆は御鳥、御鳥が、御食べになりますが」と言ゅうたんだ。言葉、あんだけ「ミー」と「ウー」入れたわけさあねえ。そして、

「それなら、チルグヮー追いなさい」と言ったらね、「ミホーイホーイ、ミホーイホーイ」と言っていたらしい。

②　侍の鶏

久場政三（明治四十三年生）　豊田

［方言原話］

侍が田舎下りした時にですよね。村人がよ、その侍の鳥が逃げてきて、トーマーミーいうてそら豆さ。トーマーミー食べにきておったらしい、その侍の鳥が。そうしたら、

「うんじゅなー御鳥えー、私たートーマーミー、御喰んしぇーびんでーさい」んち、

「あんしぇー追れー」でぃち、

「うー」んでぃち、うまかいぃちゃーなかい、あんさーい、

「御ッシッシー、御ハッハー」言うてから、何でも

「御」ちきてるさー、

「御ッシッシー、御ハッハー」と言う。

［共通語訳］

侍が田舎下りした時にですよね。村人がよ、その侍の鳥が逃げてきて、トーマーミーいうてそら豆さ。トーマーミー食べにきておったらしい、その侍の鳥が。そうしたら、

※1ミホーイホーイ　追い立てることを一寧に言う言葉。
※2御ッシッシー　「御」は敬う接頭語で、シッシーは鳥を追い払う声。敬いすぎて「お」をつけたばかりに……。

「あなた方のお鳥は、私達のそら豆を、お食べになっているんですが」と、
「それなら追いなさい」と、
「はい」と言って、そこにすわってから、そして、
「御ッシシー、御ハッハー」言うてから（追い払ったそうだ）。何にでも「御」という敬う言葉をつけてから、
「御ッシシー、御ハッハー」と言った。

③ 桃買うか

稲嶺盛英（明治四十三年生）山里

おばあさん、私も少しは親戚になんだ。
この人が一緒に御殿殿内に桃売りに行ったらね、
「桃買みそーりー（桃を買って下さい）」言うてー行ったら、そこの御殿殿内のお母さんが、
「いやぴらんくとう、うけーみしぇーびり（いりません）ので、お帰りになって下さい）」、
「桃、桃買みそーりー（桃、桃を買って下さい）」言うてね、言うたら、このおばあさんが、
「いやぴらんくとう、うけーみしぇーびり。（いりませんので、お帰りになって下さい）」と言うたさ。で、この人はまた、
「桃をうっけーらしんでぃ（桃をひっくり返して下さい）」でいこう聞いたんだね。それで、もの笑いして帰ってきた場合がある。

（2）ぬー聞ち／ぬー着ち

① きていったもの

普久原幸（大正五年生）泡瀬

[方言原話]
召使いや使やーに、主がてー、
「えーサンダーよ、今日やいやーや首里行じ来よー」
「ウー」。しぐ、はーえーし行じちぇーたんでぃ。
あんさーにや、
「行じちゃーびたん」でいちゃぐとうや。くれーなー何かムヌ言いちきさーにやらするちむどぅやるむぬ。「今日や首里行じ来よーでいしぇー、何がらぐわー用事し行じ来よー」でいやるむぬ、「ウー」んでいやーに、しぐけー行じ来たんでぃよー。あんし、「いやーや何チチ行じゃが。だー、いやー私が何ん言やんまーる、いやー行じちぇーる。何チチ行じゃが」んちゃくとう、
「クンジーグワーチチ行じゃん」でぃ言びたーんでぃ。
こんなのね、んなぱいしているわけさ。

[共通語訳]
召使いを使って、主人がね、
「ねえサンダーよ、今日はお前は首里に行ってこいな」
「はい」。すぐ、走って行って来ていたそうだ。そしてね、
「行って来ました」と言うとね。それは、何か頼みごとをして行ってもらおうと思っていたのに、「今日は

※1 **御殿殿内** 拝領地を保有している士族の家の敬称。
※2 **チチ** 「聞く」の意味だが「尋ねる」と勘違いした話。

首里に行ってきなさいというのは、何か用事で行ってこい」ということなのに、「はい」と言ってすぐ行って帰って来ていたそうだ。そこで、

「あれ、お前は何を聞いて行ったのか。なんとお前は、私がなにも言いつけないうちに、行って来たのか。何を聞いて行ったのか」と、

「紺地を着て行きました」と言っていたそうです。だからね、こんなのはただ行っただけさあ。

②　きていったもの

内間ヨシ子（大正十五年生）大里

校長先生がよ（明日は首里まで用事に行って欲しいと）、用務員に言うたから、その用務員はよー、朝早く起きて首里まで行ったって。何も用件も聞かないでよ。んであのう、

「行ってきましたよう」って帰ってきたら、言うたからね、

「ねー、いゃーひゃーウフソー、ぬーチチ行ちくぁたが（おまえというやつはなんと間抜けか。何を聞いて行ったのか）」と言うたから、着物の話、感じているわけ、この用務員は。でー、

「芭蕉小着けて行った（芭蕉の着物を着て行きました）」って。

「芭蕉小チチ行ちゅびたん（芭蕉の着物を着て行きました）」と言いよったというから、もう、私達腹くわるか（私達はお腹をかかえるくらい笑って）。

用務員にさ、「明日は首里まで何か用事は、明日その行く時に、何しに行くんですか」って聞くと思ったんでしょう。すると、この人はよー、朝も五時に起きて、首里まで行って来たって。で、行って来たら、

「もう、行って来ましたよう」って校長先生に言うたから、

「用件は聞かないで、何つけて何しに行ったかあ」という意味でしょう、「えー、ぬーチチ行ちくぁたが（何を聞いて行ったのか）」と言うから、

「芭蕉小チチ行じ来びたん（芭蕉の着物を着て行ってきました）」と。

（3）旅人と山亀

①　旅人と山亀

吉田（島袋）タケ（大正七年生）知花

［方言原話］

山原ぬ旅や　幾度んさしが
糞ぬ歩ちゅしや　今度初み

というのこれ聞いたさーねー。旅ん人がなー、クスまいぶふぁーねてーるばーどぅやてーんてー。山ぬみーんかい入によー、木ぬ葉やまじまっとーしぇーやー、うまや、山原山や。うまなかいカーミーぬしくどーてーるばーてーな。あんすくとぅ、うまんじなークスまいぶはぬ、クソーけーまたくとぅ熱りたくとぅ、うぬカーミーや、なー、歩ちはちぇーるばーどぅやさに。歩ちはちゃくとぅ、木ぬ葉までいなー、スンチャースンチャーし。クスんまでーしから、う

※**1 芭蕉**　琉球糸芭蕉の繊維で織られた着物。風土に適し、さらりとした肌触りのよい、沖縄の夏の代表的な着物である。

※**2 山原**　沖縄本島の北部のこと。山が多いので山原と呼ばれる。

りまでぃすんちふぁちぇーんてー、ゆーさんねー。あんしる、
　糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初み
んち歌ん詠でーちざんでぃち。「山原山んじでー、まーまーでぃクスまいねーうんぐとぅーやんでぃんどー」でぃち、先生から聞かさってーたどぅ。

［共通語訳］
　山原の旅は　幾度もしたが
　糞の歩くのは　今度初めて
というのこれ聞いたさあねえ。旅人が糞をしたくなったんだろうねえ。山の中に入って、木の葉は積み重ねられているさあねえ、そこは、山原の山は。そこに亀がすくんでいたんだろうねえ。それで、そこで糞をしたくなって、糞をしたら（甲羅が）熱くなったので、その亀は、もう、歩いて行ったんだろうねえ。歩いて行く時に、木の葉までも、もう、引きずって。糞と、木の葉まで引きずっていったんでしょうねえ、もしかしたら。それで、
　糞の歩くのは　今度が初めてだ
と歌を詠んだそうだと。「山原山で、所かまわず糞をしたらこんなことが起こるよ」と、先生から聞かされたんだよ。

②　旅人と山亀

高江洲義総（明治二十八年生）宮瀬

［方言原話］
　歩ちゃがちーるーふり小便しーわるやるばーてー。あんくとぅ、やな草ぐゎーぬみーんかい行じゃーにさくとぅ、うまんかいカーミーすくどーてーる、山ガーミぐゎーが。どぅーぬ立たんまーどぅ歩ちゅたんでぃ、どぅーぬ立たんまーどぅね。熱コーコーなーいくとぅ熱ち、熱ち。あいくとぅ、どぅー一人むにーし歌しぇーるばーどぅやる。
　山原ぬ旅や　幾度んすしが
　糞ぬ歩ちゅしや　今度初み
カーミーぐゎーぬ上んかいるしぇーしが、熱りたくとぅ、うぬ人ぬ、人ぬ立たんまーるーうてい歩ちゅたんでぃるばーてー。山道歩ちゃくとぅ、ふり小便しーぶさぬばーに、しぐ草ぐゎーぬみーんかいガーサー、ガーサー歩ちゅたんでぃるばー。すくどーしぇーわからんてーるばー。

［共通語訳］
　旅の途中で用を足したくなったんだろうな。それで、草むらの所に行って用を足すと、そこに亀がすくんでいたようだ、山亀が。自分が立たないうちに亀が歩き出したようだ、自分が立たないうちにね。（亀は甲羅が）熱くなるので、熱い、熱いと。だから独り言をして歌をしたんだろう。

山原の旅は　幾度もしているが
　糞が歩くのは　今度初めてだ

亀の上にしているが（気づかないでいたら）、熱くなったので、その人が、人が立たないうちに歩き出したというわけさ。山道歩いたので、用を足したくなった時に（そこですると）、すぐ草むらの方にガサ、ガサと（亀が）歩いたそうだ。（亀が）そこにすくんでいるとは知らなかったわけさ。

③　旅人と山亀

徳里静（明治四十四年生）住吉

［方言原話］

山原の旅は　幾度んさしが
　糞ぬ歩ちゅしや　今度初みていって。やー、あんでぃ言びーたんどーやー。私たーはたーあんどぅ言たんどー。

カーミーくわきとーしぇーやー、カーミー首んしちりんち。あんさくとぅ、うぬ人便所いーぶさてーるばーてー。行じゃーなかい、うまんじ、にじらんいちゃくとぅ、アチコーコーしぇーんてー。あ、うぬカーミーや歩き出したってよ。あんさくとぅ、

山原ぬ旅　幾度んさしが
　糞ぬ歩ちゅしゃー　今度初み

んちぬ歌作てーたんでぃちゃー。これはいつも笑っていたよ。

［共通語訳］

山原の旅は　幾度もしたが
　糞が歩くのは　今度初めてって。ねえ、そういうふうに言ってましたよね。私達のところはそう言ってましたよ。

亀は隠れているさあねえ。亀は首もちぢこまって。そしたら、この人は便所に行きたくなったんでしょうねえ。行って、そこに我慢できずに用を足したら、ホカホカしたんでしょうねえ。そしたら、その亀は歩き出したってよ。それで、

山原の旅は　幾度もしたが
　糞が歩くのは　今度初めてと歌を作っていたといってね。これ（話をして）はいつも笑っていたよ。

④　旅人と山亀

屋宜カメ（明治四十一年生）安慶田

［方言原話］

私のお母さんはね、この屋宜という人の娘。また、うぬ屋宜という所の嫁さんは幸地という所の娘やるばー。あんすくとぅ、幸地から来るオカーんかい、うぬまた、幸地んでぃる人ぬ、

「エー、私ねー、いほーなムン見ちゃっさー」んちゃくとぅ、

「ぬーがいゃー、ち、ぬー見じみそーちゃが」んちゃぐとぅ、

「いほーなムンぬ歩ちはいたん」でぃ言たんでぃ。

「エー、山んじクスまたくとう、歩ちょーていはいたん」んでいるばーてー。あんさくとうやー、「ぬーがエー、ちぬんクスん歩ちゅんなー」んちゃくとう、「カーミーぬ上かいまてーんてーてーひゃー」でぃ言みしぇーたんでぃ。

あんさくとうカーミー歩ちはちゃぐとう、うぬ前ヌ幸地ぬタンメーがる

山原ぬ旅　幾度んすしが

糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初み

んち、やたんでぃさんでぃち、私たー親ぬ話しみしぇーたんよー。

［共通語訳］

私のお母さんはね、この屋宜という人の娘。また、その屋宜という所の嫁さんは幸地という所の娘なわけ。それで、幸地から来たお母さんに、そのまた、幸地という方が、

「ねえ、私は変なモノを見たさあ」と言うので、

「なんだってあなたは、なに、変なモノを見られたのですか」とたずねると、

「変なモノが歩いていった」と言ったそうだ。

「ねえ、山で糞をしたら、歩いていったんですよ」と言うわけさ。だから、

「なんだって、糞が歩くものか」といって、

「亀の上で糞をしたんだろう」とおっしゃっていたそうだ。

そうやって亀が歩いていったので、その前ヌ幸地のおじいさんが、

山原の旅は　幾度もするが

糞が歩くのは　今度初めて

と、そういうことがあったそうだと、私たちの親が話していたんですよ。

⑤　旅人と山亀

高江洲昌保（大正二年生）センター

あれ（鳥）は（家に）入って来たらね、これはね何か厄があるからといって、厄病がこれあるからといって、浜下りしないといけないといって話があるの。

そしてね、浜下りやって、木の葉の山原に散歩して、用を足したいと行くでしょう。それをカーミー（亀）の上にしっこ、ウンコやったわけさ。背中が熱いもんだから歩き出したわけさ、そのウンコは。山に用を足しに、もう、山原行ったら木が林になっておるからね、そこへ用を足しに行ったら、ウンコが歩きよる。それ本当かもしれんよ。

山原ぬ旅や（山原の旅は）

幾度んあしが（何度もあるが）

糞ぬ歩ちゅしや（糞が歩くのは）

今度初めてだ（今度初めてだ）と。

だからね、今度ハワイ帰りがまた、沖縄の方はゾウリとかゲタなんかはいとるさや。ハワイ帰りは靴をはいてる。

※1鳥　野鳥は人間の運命を予告する霊力を持っているものと信じられていた。特に家の中に入ると不吉なことが起こるといわれ、その厄を払い清めるため浜下りをした。

※2山原　沖縄本島北部の国頭郡を、山が多いので山原という。

靴ぬ歩ちゅしぇー（靴が歩くのは）
今度初み（今度が初めて）

と。ハワイ、ちー、それは金武、山原。靴の歩くのは今度初めてぃ。靴はいておるわけ、新しい靴をはいてハワイ帰りは靴をはいて。沖縄の人はゲタとかゾウリとかはくでしょう。ゾウリといっても、アダヌバーサンバ（アダンで作ったゾウリ）といって、それがあるわけさ。それで、ハワイ帰りは靴をはいとる。見たこともない、見たこともない、「ぬーうれー、ぬーやが（なに、これはなにか）」でぃ。靴ですよー。靴と糞とくっつけて。

⑥　旅人と山亀

喜屋武ヨシ（大正十年生）久保田

糞ぬ歩ちゅしや（糞が歩くのは）
今度初み（今度初めて）

っていうものでしょう。あれはさ、何かいえば、よその人訪ねて行ったんだろう。ほんでトイレ行きたいもんだから、山の中に入るさあ。山の中にいて、カーミー（亀）、山ガーミー（山亀）がいるさあねえ。それを草が、木ぬ葉っぱがかぶっているもんだから、これがあるいうことは知らんで、トイレこっちに、上にしたもんだから、この亀が歩いたからそんな言っているんだよ。そんで、これがいるとはわからんさあ。そんで、亀が歩いているんだけど、

山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（何度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしや（糞が歩くのは）
今度初み（今度初めて）

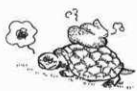
というのは、このカーミー（亀）の上にやったのが、亀が歩いているんだってウンコが歩いているんじゃないさあ。それを言うてあるってよ。

⑦　旅人と山亀

喜納兼優（大正七年生）東

昔、離島でもあらゆる所薪しかないでしょう。山原に山伐採に山買ってよ、いくらといって。山買って伐採して山原船に運んで自分の故郷に持ってくるさあねえ。その時に伐採するこの人、山刈りに行った人が、この山原の山でウンコしたわけさあね。ウンコしたのが亀の上に、ヤマガーミーグヮーといっておるよう。亀の上にフンをやってしまってるんですね。この亀が歩き出したわけさ。だから、「クスが歩ちゅしぇー、今度初み（クソが歩くのは、今度初めてだ）」といって、言われておるんだよう。

山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしや（糞が歩くのは）
今度初み（今度初めてだ）



※1 **金武、山原**　沖縄本島北部の金武町。沖縄の地名には類似が多く、他の字と区別するために、隣接村同士を併称して所在を限定した。

⑧　旅人と山亀

上原ウシ（明治四十二年生）住吉

［方言原話］

糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初み
ちしや。うれー山ガーミー、山ガーミーの上に便したって。したから、カーミーがうらーわからん。わからん便したから、このしてある下に亀さんがいたわけ。これの上にしたから、これが歩いたから、
糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初め
んち歌しちゃんでぃ。山原ぬカーミーが、
山原ぬ旅　幾度んさしが
糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初み
見ちゃんでぃち。うりが歩ちゅくとぅ、あんいち歌しちゃんでぃ。亀の上にウンコして。

［共通語訳］

糞が歩くのは　今度初めてだ
というのはね。それは山亀、山亀の上に便したって。すると、亀がいるのを知らなかった。知らないで便したから、便した下に亀さんがいたわけ。これの上にしたから、亀が歩いたから、
糞が歩くのは　今度初めてだ
と歌したそうだ。山原の亀が、
山原の旅は　幾度もしたが
糞の歩くのは　今度初めて
見たといって。亀が歩くので、そうやって歌をしたそうだ。亀の上にウンコして。

⑨　旅人と山亀

嘉陽よし子（大正五年生）比屋根

山原に野菜の種とかなんとか売りに人が、男の方であったでしょうねえ。それで行く時にカーミー（亀）の上に葉ガラー（枯れ葉）とかチリがあったそうです。それが上にウンコしてしまった、その男の人は。してしまったから、その亀がそれを引いて歩くでしょう、だから、
山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしているが）
糞ぬ歩ちゅんでいしぇー（糞が歩くというのは）
今度初み（今度初めてだ）
と言うてね歌作ってあったそうです。だから、珍しいねーっち。
自分がやってしまってから、亀の上だから、チリ（でおおわれているので）わからんでしょう、昔あれだから。それが歩いていってしまったからね。山原はもう、毎月何回もいらっしゃっている方でしょう。
糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めてだ）
といって歌作ってあったって。

⑩　旅人と山亀

当山平治（大正五年生）住吉

山の中で、木の葉がいっぱいあって、急に用便もよおしたもんだから、亀は木の葉、枯れ葉のまさって、そこにおったわけ。そうして（亀がいると知らずに）大便をやったもんだから、急に熱くなったもんだから動き出した。だから、「山原の旅は何回もやったのに、ウンコが歩くのは今度初めて」。亀の甲羅も枯れ葉と似てわからんでしょう。あれー、もう、まったく枯れ葉といっしょだから、『なーるほど、これはもっともだなあ』と。

山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしや（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めて）
初めて見たという。

⑪　旅人と山亀

平亀（明治二十八年生）美里

山原に遊びに行ってから、ご飯を食べて行ったから、道中で、また、下痢やるよ。それするところにカーミー（亀）が座っていてね、ほうたら、便のーうりが上んかい（した）、うり（亀）が歩っちゃぐとう、「クスぬ歩ちゅしぇー、ぬーぬー」でぃしぇー、うりやるばー。（便を亀の上にしたら、それが歩いたので、「糞の歩くのはなんとやら」というのは、その話であるわけ）。

山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めて）
んでぃち、歌にしたりしていた。

⑫　旅人と山亀

新城安平（大正二年生）室川

島尻[※1]あたりの人が、山つかいにおる亀がおるでしょう、小さついの。間違ってね、山出てトイレ行ったんでしょう。だから、亀のわうれてわからんで、あれの背中にオナラしたらなにしてが歩きよったという。下におったから、おもしろいさあ。

旅や幾度んさしが（旅は幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしや（糞が歩くのは）
今度初みてぃ（今度初めて）

ウンコが歩きよったと。亀といってわからんと、これの上になにしたんでしょう。だから、この亀が歩いたから、ウンコが歩くのは初めて見た。

⑬　旅人と山亀

渡慶次光子（明治四十一年生）大里

[方言原話]

山原、あんすくとう歩ちゅどう行ちゅくとうてー。うりんカーミーぬきれいにすわっていたはずね。あんさーに、うんくとうし、
山原ぬ旅や　幾度んさしが

※1島尻　沖縄本島の南部の地域。

山道やてーんよー。山道どうん昼ん暗さしぇーやー、
うんぐとーる山道どぅやていから、
　糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初みてぃ
でぃたんでぃ。

［共通語訳］
　山原には、そう歩いて行くからね。その亀が（そこに）ちゃんとすくんでいたはずね。だから、そうやって（すくんでいたので）、
　山原の旅は　幾度もしたが
山道だったはず。山道は昼でも暗いさあねえ、そういう山道だから、（用をたしたところが亀の上で）、
　糞の歩くのは　今度初めてだ
と言っていたって。

⑭　旅人と山亀

神里マカト（明治四十五年生）安慶田

［方言原話］
　うーてーるばーてー。あんさくとう、うぬ、クスまいふさぬでーまたくとう、カーミーが歩ち、『アッサミヨーうまーカーミぬ歩ちゅるやー』でぃちよー、うまっていっぺーひるまさそーたんでぃ。
　山原ぬ旅や　幾度んさしが
　糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初み

［共通語訳］
　（亀が）いたわけさあ。それで、その、糞がしたくなりすると、亀が歩いたので、『アッサミヨーここは亀が歩くねえ』といって、そこでたいへん珍しくしていたそうだ。
　山原の旅は　幾度もしたが
　糞が歩くのは　今度初めてだ

⑮　旅人と山亀

友寄ナヘ（明治四十一年生）住吉

［方言原話］
　山原ぬ旅は　幾度んさしが
　糞ぬ歩ちゅしや　今度初み
って。カーミーぬ上んかいクソーまたぐとうや、クソーまでぃからさくとう、うりが通てーるばーてー。さくとう、
　糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初み
んだぢ。

［共通語訳］
　山原の旅は　幾度もしたが
　糞が歩くのは　今度初めてって。亀の上に糞をしたら、糞をし終えたら、亀が通ったようだね。すると、
　糞が歩くのは　今度初めてと。

⑯ 山原と山亀

金城ナベ（明治三十六年生）松本

［方言原話］

山原ぬ旅や

山ガーミんかいクスまてーんてー、えーりん。あんさぐとう、歩ちぇーんてー、うりが。あんさぐとう、「クスぬ歩ちゅしぇー、くり初みどう見じゅる」んでいたんでい。

［共通語訳］

山原の旅は

山亀に糞をしたんでしょうねえ、たぶん。すると、歩いたんでしょうねえ、糞が。すると、「糞が歩くのは、これ初めて見た」と言ったそうだ。

⑰ 旅人と山亀

宮城タケ（明治四十年生）与儀

山原旅したから、山原の山は木の葉がたくさんあるでしょう。それの上にフンをやったわけさー。そして、この亀の上に（フンをしたらしく）山原ガーミー（山亀）、これが歩いたから、

山原ぬ旅や（山原の旅は）

幾度んすが（幾度もしたが）

糞ぬ歩ちゅ旅や（糞が歩く旅は）

今度初み（今度初めて）

でい。

⑱ 旅人と山亀

宮城次郎（大正三年生）園田

山原ぬ旅は（山原の旅は）

幾度んさしが（幾度もしたが）

糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）

今度初みてぃ（今度初めてだ）

吉屋チルー[※1]が、辻にうる[※2]ジュリ[※3]さ、吉屋チルーが作ったもの。ウンコやったら温まるさーなー。温まったから、亀はかんし行ったから、亀が歩いているが、ウンコして歩いていたから、こうなる、この意味。木の葉の下にいたわけな、カーミーぐわー（亀が）。

⑲ 旅人と山亀

西平マツ（明治三十四年生）久保田

山原ぬ旅はね（山原の旅はね）

幾度んさしがね（幾度もしたが）

糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）

今度初み（今度初めて）

ってよー、歌、歌だけしよったって。

山に薪むん（タキギ）取りに行ったんでしょう、この女の人はね。カーミ（亀）の上にすわってウンコやったわけ。この、カーミがね、動いて歩いたって。これでね、女の人がよ歌やってね、

山原ぬ旅（山原の旅は）

幾度んさしが（幾度もしたが）

糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）

今度初み（今度初めて）

※1吉屋チルー　歌の名人。
※2辻　現在の那覇市辻町。辻町には遊郭があった。
※3ジュリ　遊郭の遊女のこと。

でい。な、クス（糞）と思ったわけ、カーミー（亀）と思ん。

糞が歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めて）

これは昔のことよー。

⑳　旅人と山亀

比嘉喜代吉（大正四年生）山内

山原ね旅したらね、山の中でウンコしたらしいですよ。そんで、山ガメの上にウンコしたら歩いて行きよったって。それで、

山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしや（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めて）

と、それ聞いた。それ本当かもしらんね。保護色的な葉がしているからね。枯れ木の葉に非常に似ているから、山ガメは。

㉑　旅人と山亀

屋宜ハル（大正三年生）安慶田

[方言原話]

山原ぬ旅、　幾度んさしが
糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初み

んでいち歌いぬんすんでいしぇー、うれーいまめー
ぬ事どぅやんでいどー。いっぺー昔ぬ話ぇあらん。
今んちぬ話。百年内ぬ話るやんでいどー。

あぬよ、歌作くてーるばーてー、うぬ、山原かい行じゃぬ人ぬ。なー、うんにーねーなー便所んちぇーねーらんくとう、木ぬ葉ぐゎーぬうゎーぴんかいちるさるはじやしが、うぬカーミーぬうゎーぴやてーんてー。あんさくとう、うりがどぅきなたくとう、うぬ、カーミーが歩ちゃくとう、うりが歌作てーるばーどぅやる。うんとうーし話聞ちゃんどー。うぬ、本人から聞かんしが。本人から聞かんろー。ただ、またばなしる聞ちゃる。

[共通語訳]

山原の旅は　幾度もしたが
糞が歩くのは　今度初めて

といって歌をするのは、これは最近の事であるそうだよ。とっても昔の話ではない。今の時代の話。百年内の話であるそうだよ。

あのね、歌作っているわけさ、この山原に行った人が。もう、その時には便所というのはないから、木の葉の上だと思ってしたはずだけど、この亀の上だったんでしょうねえ。そして、用を足してからよけたら、この亀が歩いたから、その人が歌を詠んだのである。そうやって話を聞いたよ。この本人から聞いてないが。本人から聞いたんじゃないよ。まあ、伝え話として聞いたわけで。

㉒　旅人と山亀

山内盛福（大正二年生）南桃原

山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めて）

この辺ではそういう風に聞いているがね。

山原の旅は　幾度もしたけれども、
糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めて）

と。亀の甲にウンコしたと、それが歩いたもんだから、そのした人がそう歌詠んだとかね。

㉓　旅人と山亀

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

これ、これなんかはまた本当ですよ。

山原の旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞の歩ちゅしや（糞が歩くのは）
今度初み（今度が初めて）

という。これはねえ、田舎の人が、ま、こちらの人が、山原に材木出しに行っておる時に、まあ、ハバカリ行きたくて行ったその時に、野糞というでしょう。これをタレに行って座ったら、これ亀がおるとは考えずに座ったわけさ。で、出して立ってみたら、これが動き出したから、そういう伝え話になっておると。

㉔　旅人と山亀

照屋カマド（大正元年生）園田

[方言原話]

ウンコしたわけじゃない。うりが歩ちゃぐとうなー、今度初み歩ちゅし見ちゃんでいるばーどうやるや。

[共通語訳]

（山亀の上に）ウンコしたわけじゃない。亀が歩いたのでもう、今度初めて（糞が）歩くのを見たということであるわけさあね。

㉕　旅人と山亀

神村盛昌（大正九年生）園田

[方言原話]

山原ぬ旅や　幾度んやしが
糞ぬ歩ちゅしや　今度初み

っち歌んあたんどー。これカメの上にあやまってやったわけさーね。そういう例でしょう。

[共通語訳]

山原の旅は　幾度もしているが
糞の歩くのは　今度初めて

と歌もあったよ。これ亀の上にあやまって（糞）をやったわけさあね。そういう例でしょう。

㉕　旅人と山亀

中野京子（明治四十二年生）山内

山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞の歩むしや（糞が歩くのは）
今度初めてぃ（今度初めてだ）
人が亀の上に、亀とは知らんで亀の上にウンコしたって。この亀が歩いたからウンコが歩いた。

㉗　旅人と山亀

照屋ツル（明治四十二年生）照屋

［方言原話］
山原ぬ旅　幾度んさしが
糞ぬ歩ちゅしぇー　今度初み
んち、カーミーんかいクソーまたくとう、歩ちゅたんでぃ。

［共通語訳］
山原の旅は　幾度もしたが
糞の歩くのは　今度が初めてだ
と、亀の上に糞をしたら、歩いたそうだ。

㉘　旅人と山亀

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

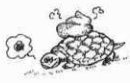
見たから歩いて行ったさー。だから、
山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（何度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしぇー（糞が歩くのは）
今度初み（今度初めて）
ちょうでー葉っぱの上に便所したから、歩いて行くわけ。

㉙　旅人と山亀（山原と団亀の歌）

仲宗根カメ（明治四十二年生）登川

［方言原話］
山原ぬ旅や　幾度んさしが
糞ぬ歩ちゅしや　今度初み
んでぃち、ただうっさる歌あんやー。

［共通語訳］
山原の旅は　幾度もしたが
糞が歩くのは　今度初めて
と、たったそれだけ歌があるねえ。



㉚　旅人と山亀

平田フミ（明治三十五年生）　登川

山原の旅は（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしは（糞が歩くのは）
今度初み（今度初めて）

㉛　旅人と山亀

島袋ヤス（明治四十二年生）　山里

山原ぬ旅は（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めてだ）

㉜　旅人と山亀

宮里信栄（明治四十一年生）　古謝

亀がおってね、旅人がそれにクソをたれた。だから、
糞ぬ歩ちゅしや（糞が歩くのは）
今度初てい（今度初めてだ）

㉝　旅人と山亀（歌）

宮里ヨシ（大正七年生）　与儀

亀は見たことあるけど、こんなこと見たことないさー。
山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んすしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしや（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めて）

㉞　旅人と山亀

比嘉フミ（明治三十九年生）　与儀

山原ぬ旅（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めて）

㉟　旅人と山亀

粟国春子（大正二年生）　山里

逃げたわけさー、亀は。ウンコたれてかけられたから。
山原ぬ旅や（山原の旅は）
幾度んさしが（幾度もしたが）
糞ぬ歩ちゅしぇー（糞の歩くのは）
今度初み（今度初めてだ）
亀の上にウンコしたから、逃げたはずよ。

（4）愚か者あれこれ

①　豆腐を見ておけ

金城眞良（明治四十年生）古謝

［方言原話］

子どもは正直者と言ったらね、これはまた何かと言ったらね、

「私は隣の家まで行って来るから、猫の豆腐喰し見でいよー」言ちゃくとうや、あん言るうちねー、うぬ猫ぉ豆腐喰いぎーたんでい。親ぬ来るえーかー、うぬ豆腐おうち喰たくとうや、

「いやーやマヤーぬ豆腐喰しぇー見だんたんなー」んちゃくとう、

「うん、見ちょーたん」

「あい、追らんたんなー」でいちゃぐとう、

「うん、なーや追りんでーいゃんむんぬ。豆腐喰し見でいよーでいる言るむん、私んねーよーい見ちょーたしぇー」。

くりから、子どもは正直者と言ってね。意味は、意味は正して聞かせなかったら、親がへた。「わらべー正直者」でいしぇーうりから出じたんでい。理屈はあうんだ。

［共通語訳］

子どもは正直者と言ったらね、これはまた何かと言ったらね、

「私は隣の家まで行って来るから、猫が豆腐喰うのを見ていなさいね」と言って、そうこうしているうちに、その猫は豆腐を喰っていたそうだ。親が帰って来るまでには、この豆腐は喰ってしまったのでね、「おまえは猫が豆腐を喰うのを見なかったのか」と言うと、

「はい、見ていた」

「あれ、追わなかったのか」と言うと、

「はい、あなたは追いなさいとは言わなかったもの。豆腐を喰うのを見ていなさいというので、私はそれを見ていました」。

それから、子どもは正直者と言ってね。（言葉の）意味は、意味は正しく聞かせなかったら、親がへた（に物事をたのむと、その言葉通りの解釈をする）。「子どもは正直者」というのは、それから出たそうだ。理屈はあうんだ。

②　おならの歌

仲程セツ（明治三十七年生）知花

［方言原話］

村ぬータンメーたーがー
屁よー　ひっちゃる屁
うぬ屁や　たーがひっちゃがやー
ウカマがひっちゃさ
私がひっちゃさ

昔ぬウカマー人ん隠きらりーるあたいまぎーさんでいち。あんさくとう盗人ぬ入に屁や「ブー」みかちウカマぬ中うていひっちょーるばーてー。あんさ

くとぅ、『ひるましーむん。人うらんしが、屁ひっち』。さくとぅ、なー、「ウカマがひっちゃか、私がひっちゃか」さくとぅよー、うりから話やるばー。

［共通語訳］

村のおじーさんたちが
屁を　ひった屁
この屁は　誰がひったかなー
ウカマがひったさ
私がひったさ

昔のウカマは人が隠れるくらい大きいものであったと。すると、泥棒が入って屁を「プー」とカマドの中でひったそうだ。そうしたもんだから、『珍しいことだ。誰もいないのにオナラの音がする』と（不思議に思った）。そうしたもんだから、もう「カマドがひったのか、私がひったのかなあ」といってね、それからの話なんだよね。

③　山芋盗人

比嘉良信（大正五年生）中の町

［方言原話］

盗人ぬよー、いっぺー忙しいものはやー、山芋盗人んでぃ。なんでかというとね、山芋よー、でーじな下ぎ薬やるばーてー。炊いて食べてねいつも腹まわりのものすごい早いんだよ、あれ。あんすぐとぅ、盗でぃちゃーに、うっさーしぇー、うっさどぅかみうーさにでぃ、盗でぃ来に煮ちかだどぅちむえーやしが、かでぃちゅてーさくとぅやーしくなやーに、また盗みーがー行ちゅたんでぃよー。あん、ゆながた寝んだん、行ち戻やーし、取てぃちぇー煮ちぇーかみかみすたんでぃ。

あんすくとぅ、山芋盗人忙なしむんどーでぃ。

［共通語訳］

盗人でね、大変忙しいものはね、山芋盗人である。なんでかというとね、山芋はね、たいそう消化のいいものであるわけ。炊いて食べてもねいつも腹の減るのもすごい早いんだよ、あれ。だから、盗んで来て、これだけで、これだけしか食べることができないだろうと、盗んで来て煮て食べたつもりだが、食べてしばらくするとお腹がすいて、また盗みに行ったそうだよ。それで、夜通し寝ないで、行ったり来たりして、取って来ては煮て食べたりしていたそうだ。

だから、山芋盗人は忙しいもんだよと。

④　ソテツをなぐった男

比嘉喜代吉（大正四年生）山内

サトウキビの葉っぱね、あれが蘇鉄に巻いておったって。ほうかむりして人間に見えたって。で、今度もう命がけやったって拳骨やってね、手も血だらけなって。あくる朝行ったら、蘇鉄であったって。しかばくー（恐がりや）です。

蘇鉄葉っぱをかえてね、丁度トゲが生えておったって。芽が出る時に刺が生えるでしょう。もう蘇鉄はね、

※1山芋　いもの種類の中では手入れがいらず一番作りやすい。一年に一度しか掘らないので、畑のあいたところに植えておく。縦、横それぞれ二尺ほどの穴を掘り、木の葉をたっぷり入れてから種イモを入れ、土や葉をかぶせておくだけで、一年たつとみごとに大きないもになる。中には一個で十五斤、三十斤の大きないもができることもあり、収穫期には部落でいも競争があって大きさ比べをするので、競って自慢のいもを作る。
（『聞き書沖縄の食事』―日本の食生活全集　沖縄編集）昭和六三年発行　発行所　社団法人農山漁村文化協会
※2蘇鉄　ソテツ科の常緑椰子状小低木。

葉っぱをかえてしまってね、芽が出る時には、赤い芽出るでしょう、刺があるさ、とっても。その時に、それ二、三枚、巻いておったそうだ。それで、ほうかぶりしておるように見えたって。だから、コーガーキー（ほうかぶり）しておるから（肝）ためしに、待っているといって。

私も、もう、自信のある人には負けないといってやったらしいよ。

⑤　燃えた貯金

比嘉フジエ（大正三年生）山内

次男が煙草買うたんびに、長男の方はお金ためて、「私、煙草吸わない。お金ためよう」。今日買ったら今日の分。明日買ったら明日の。そしてエーキンチュー（金持ち）なったってよ。

金持ちなったら、このお金でお家建てて、したら、このお家は一回に火事になってなくなってしまったって。そして、笑いよったって次男坊が、「兄さんの方がためたお金は一回になくなった」って。話さーねー。

V　聞き違い

(1) 英語の聞き違い

①　カマーン、カマーン

山内三郎（明治四十一年生）知花

［方言原話］

なー、んな戦ばんじ負きーがたーなたぐとう、皆ゴーんかいうしぇーやー。ゴーんかい入ちょーくとうやー。あんさくとう「戦負きていどぅうくとう、早くゴーから出じてい来よー」すしぇーアメリカー、「カマーン、カマーン」しぇーぎさんてー。あんくとう、うまんかいカマー名がうたんでいよー、うぬゴーんかいてー。

「ウリヒャーなーカマー、いやーのーじ知ちょーるむん。いやー名わかいるむんぬ、いやー一人やちょーん出じてい行けーわ」でいち、うぬ親ぬカマーんかい言みそーちゃくとうやー、なー、うれー、「とー私名知ちょーれ、私からどぅ初めーありさりーるするわからんむん。誰がらどぅ密告しぇーる」んでいち、うとぅるさ、うとぅるさし出じてい行じぇーぎさんてー。行じゃぐとうアメリカーなかいとういむたっていよー、あんさーにクワッチーんぬーんくういありし、や。あんさーに、うりが、すぐさんじありさーに、うりからパンパのー始またんでいさ。

［共通語訳］

もう、むなしく戦が負けそうになった時に、皆壕にいるさあねえ。壕に入っているからね。すると「戦は負けているから、早く壕から出て来なさい」というのに、アメリカ人は、

「カマーン、カマーン」と言ったようだね。すると、そこに、カマーという名の人がいたそうだよ、その壕に。

「ウリヒャーカマー、お前の名前を知っているもの。お前の名を知っているもの、お前一人でも出て行きなさい」と、その親がカマーに言われたのでね。もう、カマーは、

「これは私の名を知っていたら、私から初めはなにかあるかも知れないもの。誰がが密告したんだろう」といって、恐る恐る出て行ったようだね。行ったらアメリカ人に接待されて、そしてご馳走も何もかもいただいてさ。そして、カマーが、すぐ偉い人と仲良くなって、それからパンパンが始まったそうだ。

②　ナイントゥリー

島袋義雄（大正三年生）古謝

［方言原話］

私たーや南洋から引き上ぎてい来しが、「うぬ話ぬあたんどーやー」でいち皆ん冗談し言ん。

「うまからうっさーワッタームン」でい言ちゃぐとう、「ワッタイム」でい言んでいさーに「ナーヒントゥリ」でいいちぇーんてー。あんさぐとう「なー

※1ゴー　戦争中、空襲から身を守るためにつくられた壕のこと。
※2アメリカー　アメリカ人のこと。外国人を総称してアメリカーともいう。
※3カマーン　カムオン（こっちへこい）。
※4ウリヒャー　相手に注意、警戒を与える時発する言葉。
※5出じてい　統戦、山中の壕に避難していた人々は米軍によって収容所に集められた。
※6パンパ　パンパンという米兵相手の娼婦のこと。おもにサイパンをさす。
※7南洋　

ひん取りんでぃ」ち、はまとーてんてー。

「ぬーんち、うまいうりすが。うまー基地内やくとう出じり」でぃ言ちぇーんてー。うぬ言葉ぁアメリカー言ちょーしが沖縄人ぬーわからんしぇー。

「うまからうっさーワッターウム」でぃちぇーぎさん。あん言ちょーしが、またアミリカーや、時間どう言くとうやーあったーん。あんさーにさくとう、「なーひん取り」んでぃやー、はまてぃ取りぃぎたぐとぅてー。なー、オーエーふーじーんかいなたぐとう、大将ぬ来によー、「あん言んしんでーうれー、うんくとう言んどーやー」でぃちゃぐとう、通訳あびやーに、「あん言んどーやー」でぃちゃぐとう、沖縄口しぇー、あんでぃ言んどー「ナイントゥリー」でぃ言んねー「なーひん取り」でぃるばーどぅやんどーやーでぃ。

「ワッタイム」でぃしぇー、「私たーウム」でぃるちむえーどぅやんどーでぃ。「ナーイントゥリ」でぃしぇー、「なーひん取り」でぃるばーどぅやっさいやー。あんさーにさくとう、アミリカーからぬーから、なー、ぬーがら笑いんねーし、や、「あんどぅなとーんなー」んち、あんし、しまちぇーたんでぃぬ話。

うれー、胡屋[※3]うてぃぬ話どぅやんどー、アメリカーがうふくうやーにありそーしぇーやー。軍用地ぬハルさい、ガヤぬーん刈たい、ありそーしぇー。

［共通語訳］

私たちは南洋から引き上げて来たが、「こんな話があったよう」と皆、冗談で話ていた。

「ここからこれだけは私たちのイモ（ワッターウム）」と言うと、（アメリカ人は）「ワッタイム（何時ですか）」と言っていると思って「ナーヒントゥリ（九時三十分）」と答えたようだね。すると「もっと取りなさい（ナーヒントゥリ）」と言っていると勘違いして、一生懸命にイモを掘っていたんだろうね。

「どうして、そこでなにしているか。ここは、基地内だから出なさい」と言ったようだね。その言葉をアメリカ人は言っているが、沖縄の人はわからないさ、「ここからこれだけは私たちのイモ」と言ったようだ。そう言っているんだが、また、アメリカ人は時間を言うからね、あの人たちも、そうしたもんだから（沖縄の人は）、「もっと取りなさい」と思って、一生懸命に取っていた。もう、喧嘩のようになったので、大将が来て「時間だというほど、そう言うんだが」と言うと、通訳を呼んで来て、（ナイントゥリー（九時三十分）といっても、

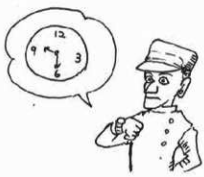
「私達のイモ（ワッターウム）」と言うんだよというと、沖縄の方言ではそう言うんですよ「ナイントゥリー」というのは「もっと取れ」という意味になるんですよと。

「ワッタイム」というのは「私たちのイモ（ワッターウン）」という意味になるんですよ。「ナーイントゥリ」というのは「もっと取りなさい（ナーヒントゥリ）」という意味だからね。そう説明したら、アメリカ人から沖縄の人まで、笑いこけてね、「そういうことになっているのか」と、それで、丸く

※1**基地内**　戦後、自分の土地を米軍基地に摂取されたため、農耕に出かける際には、許可をもらって基地の中に入り、黙認耕作地で田畑を耕し生活の糧を得ていた。

※2**アメリカー**　アメリカ人のこと。

※3**胡屋**　沖縄市の字。旧越来村。



おさまったそうな話。
それは胡屋での話だよ、外人がたくさんいて、働いているさぁねぇ。軍用地の畑に行ったり、カヤを刈りに行ったりするものだから。

(2) 芋の出来

① 聞き違い（芋掘り）

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

[方言原話]
このミンクジラーが芋掘いたんでぃしがや、側から知ってる人が通って、
「いったーわらべー、ゆー遊どーみ」と言ゅたからね芋掘る人にね。なんと聞き間違いしたもんか、
「むる、ひー虫うちゅ喰っていねーびらん」と言うて。こういう笑い話もあったんじゃがね。なんさー「いったーわらぼーたーゆー遊どーみー」と言うのを、「いったー芋ゆーんちょーみ」という聞き間違いなるさーねー。「むる、ひー虫うちゅ喰ていねーびらん」でぃ。

[共通語訳]
この耳の遠い人が芋を掘っていたというがね、側から知りあいの人が通って、
「お前たちの子どもは元気に遊んでいるか」と言ったらね芋を掘っている人にね。何と聞き違いしたのか、「全部、芋虫に喰われてありません」と言うて。こういう笑い話もあったんじゃがね。なんというか「お前たちの子どもはよく遊んでいるか」と言うのを、「お前たちの芋はよく育っているか」と聞き間違いさぁねぇ。「全部、芋虫に喰われてありません」と。

② 聞き違い（いものでき）

比嘉フジエ（大正三年生）山内

夫婦とも耳の遠い人に、通りがかりの人が、
「子どもたちよく遊んでいるかー」ってあいさつしたら、
「全部虫うちゅ喰ってないよー。虫がうちゅ喰ってないよー。（全部虫が喰ってしまってないよー。虫が喰ってないよー）」って言いよったってよー。そして、
「こんなじゃないのに、子どもよく遊んでいるかーって言ったのに」って笑いよったってよー。
「芋はよくできているかー」って、言ったって思ったんじゃないかねー。聞き間違いさー、これも。

(3) 聞き違いあれこれ

① あさって取ろう

松下盛一（明治四十五年生）池原

[方言原話]
具志川馬車持ちゃーがて、山原かい薬開しーが行ちゅるばーにてー三人やたんでぃ。荷物うーちてー、そんくとうちるばーに、東恩納ビラーうていて、マングースーぬ穴かいはいし見ちょーるちむえーやるばー。一人ぬ若先なやーにてー、

※**1ひー虫**　さつま芋に食い入る虫。これが入っているとさつま芋は食べられなくなる。（沖縄語辞典）。
※**2具志川**　沖縄本島中部の東海岸、勝連半島の基部に位置し、東は金武湾に臨む。現うるま市具志川のことで、方言ではグシチャーという。
※**3山原**　沖縄本島の北部のこと。北部は、平坦地が少なく山が多いので、山原（やんばる）とも呼ばれる。
※**4東恩納ビラー**　うるま市石川東恩納。県道三二九号線を現在の栄野比から石川向けに上っていく坂道のこと。
※**5マングースー**　食肉目ジャコウネコ科に属する中型の哺乳類で、四肢は短く耳と尾が長い。一九一〇年に農作物を荒らすネズミ駆除のため移入されたが繁殖力が大で、現在は希少動物への影響が懸念されている。

「でい、あさてい取ら」んでいちぇーぎさんてー。また、後なやーが、よ、
「明後日とぅん、うりがうんなー」でいち、オーエークウーエーするうちかい、マングースーやひんぎていはいたんでい。

［共通語訳］
具志川馬車持ちがね、山原に疎開しに行く時にね、三人だったそうだ。荷物を乗せて、そうやって行く時に、東恩納の坂で、マングースが穴に入って行くのを見たようなんだね。一人の者が先に行って、
「さあ、あさって（ほじくって）取ろう」と言ったようなんだね。すると、後から来た人がだね、
「あさって（明後日）まで、マングースがいるものか」と、喧嘩をしているうちに、マングースは逃げていったそうだ。

② くさかったか

新城安卓（大正二年生）　宮川

おばあさんが牛の草刈りていた。で、おじいさんは上にのぼって。昔は焚き物（に使うものは）枯りた枝を取ったり、薪取っていた。で、おばあさん下に草刈りていたら、おじいさんがね、こんな大きなオナラね「ブッー」みかしてさ（ひった）。そしたら、のぼっているおじいさんがよー、
「クサかったかーおばあさん」ったらよー、おばあさん、『草刈りたかー』と言うと思ってね、
「まだ刈らないよーおじいさん」って言よったって。

③ 二反のはば

瑞慶山良明（明治四十二年生）　宮川

侍がですねー那覇から来て、田舎で布を織っておる人（がいた）。行く時この人が股をはって（開いて）機を織っておるのを見たわけでしょう。それでこの人（侍）が行ってから、帰る時にまた見た。（機を織っている人は）また行く時のこのままだったらしい。この人（侍）が、
「うんじゅがむのー、長ばいえいびーさやー（長い間股を広げて機を織ってますね）」と言ったらしい。
「うー、くれー二反ちるぎーやいびーくとぅやーさい」と。二反ちるぎーといえば、一反の布を二つ合わした布だから、長ばい、長らくかかるという意味ですね。この人（侍）はこれ（機を織っている人）に長ばい。長ばはとーさやー（長い間股を広げていますねー）という意味（で言ったよう）だが。だから、そういう話もあるよー。

（4）カサギラセー

① カサギラセー

屋宜カメ（明治四十一年生）　安慶田

［方言原話］
山原はねー、重たいもん持ちきれないさーねー、通りがかりの男の人んかい、

※1 **あさてい**　「あさって取ろう」と思い違いして喧嘩になった。
※2 **那覇**　現在の那覇市。沖縄県の県庁所在地。

「うんじょー、くりカサギラチとぅみみそーれー」でぃちゃぐとぅやー。
「いーいー私ねーうれーならんどー」でぃひんぎたんでぃ。「うすりんでぃ」考どぅるばーてー、
「いーいー私ねーうれーならん」でぃひんぎたんでぃ。
あんすくとぅ、山原ん人やー、「うり上ぎてぃとぅらしぃそーれー」やれーわかいしが、「カサギラシ」んちゃぐとぅや、国頭ぬ方うてー、あんどぅ言んでぃ。「カサギラチ」んちゃんでぃよー。荷持ちゅしんかいえ、「カサギラシ」でぃちゃんでぃくとぅ。あんさーにうぬ男の人ぉビックリさーにひんぎたぐとぅ、うりやるばーてーなー。くりかーやなー「上ぎてぃとぅらしぃそーれー」やしが、あまー「カサギラシ」んでぃ言んでぃっさいや、山原ろー。

[共通語訳]
山原はねえ、重たいもん持ちきれないさあねえ、(手伝ってもらおうと)、通りがかった男の人に、
「あなた、これカサギラチもらえませんか」と言ったらね、
「いいや、私はそれはできないよ」と逃げたそうだ。「妊娠させて下さい」と言っていると思ったようで、
「いや、いや、私はそれはできません」と逃げたそうだ。
だから、山原の人はね、「これ上げて下さいませんか」と言えばわかるが、「カサギラシ」といったのでね(妊娠させてと勘違いしたようで)、国頭の方では、そう言うらしい。「カサギラチ」と言うそうだよ。荷を持つことに、「カサギラシ」というらしく、それでその男の人はビックリして逃げたので、お願いした人はどうしたのかと思ったんだろうねえ。この辺りは「上げてちょうだい」と言うが、山原は「カサギラシ」と言うそうだね、山原では。

②　カサギラセ

比嘉良信（大正五年生）中の町

[方言原話]
重荷を持ってきて、そこに一休みしている人がて、どぅー一人しぇーかんしひったていかみぅーさんぐとぅ。昔頭にのせるでしょう。頭にのせるもんだから、「え、いゃー、私にんかいカサギラシェー」でぃ言ねー、今度、これ聞いた人は、この「カサギラシェー」という言葉わからないわけよ。字ぬ通いてーんてー。あんさくとぅ、くぬ男とぅぬまるーしぇーるばーどぅやる。
村々ぬむる言葉ぬ全然違いくとぅてー。あんさーに「カサギラシェー」でぃいゃったくとぅ、うぬ人とぅぬまぬーしぇーるばーどぅやる。

[共通語訳]
重荷を持ってきて、そこに一休みしている人がね、自分一人ではこう持ち上げて頭に上げることはできないので。昔は頭に(荷物を)のせるでしょう。頭にのせるもんだから、
「ねー、あなた、私にカサギラシて下さい」と言うと、

※1 **国頭ぬ方うてー**　荷物を入れたカゴを背負うことをカサギユンという。北部等の狭い道や、傾斜地の多い所で見られる背負い運搬法である。

今度、これ聞いた人は、この「カサギラシェー（かつがせて下さい）」という言葉わからないわけよ。住んでいる所が違っていたんだろうねえ。だから、この男はうろたえていたわけさあ。

村々は全部言葉が違うからね。それで、「カサギラシェー」といわれたので、その人はうろたえていたわけさ。

③　カサギラセ

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

［方言原話］

「カサギラチトゥラシェー」でいしぇー、な、うぬ言葉どぅやしが、本当や、な、うれー勘違ぇーそーるばーるやる。

「カサギラチトゥラシェー」んちゃくとぅ、「上ぎていとぅらし」でいちむえーるやんでいどー。あん言ゆるとぅくまんあんでい。「上ぎていとぅらしぇー」んち「カサギラチトゥラシェー」でい言っとぅくるんあるくとーん。

うりかーやあんねー言ゃんしがよー、「カサギラチトゥラシェー」。

［共通語訳］

「（荷物）かつがせて下さい」というのは、も、それは言葉なのだが、本当はこれは勘違いをしているわけなんだ。

「カサギらして下さい」と言ったら、「荷物をあげて下さい」の意味あいのことらしいんだが。そういうふうに言うところもあるそうだ。「あげて下さい」というのに「カサギらして下さい」と言うところもあるようだ。

この辺はそんなふうには言わないがね、「カサギらして下さい」（とは）。

④　カサギラセー

屋宜ハル（大正三年生）安慶田

［方言原話］

沖縄市の人が山原かい行じゃれー、ハルなかいうる女ぬ、

「エータイヤッチー、私チブルんかいカサギラしみそーれー」でい言ちゃぐとぅ、うぬ人わからんしぇーやー。あんさぐとぅ、ちゃーひんぎし、カミラさんよーいはいたんでぃさいでぃしぇー聞ちゃん。

［共通語訳］

沖縄市の人が山原に行った時、畑にいた女が、

「もしもしお兄さん、私の頭にカサギラして下さい」と言ったら、その人はその言葉が（かつがせて下さいとは）わからないさあねえ。（妊娠させて下さいと言っていると思って）そこで、すぐさま逃げて、頭の上にかつがせないで行ってしまったということを聞いた。

※1カサギラチトゥラシェー　「妊娠させて下さい」という意味にもとれる。
※2カサギラしみそーれー　中部では「妊娠させて下さい」という意味。

⑤　カサギラセー

稲嶺カマド（大正二年生）　嘉間良

［方言原話］

中部の人がこれは行ったから。あっちは「カサギらちとぅらし」んちゃくとぅ、『カサぎらちんち、あんし簡単にカサぎらちんち』中部の男だからわからないさ、「カサぎらす」といって、何に言っているか。山原で、山原の女が。

［共通語訳］

中部の人が山原に行った時。あっち（山原の女）は「カサぎらせて下さい」と言ったので、『妊娠させろと、あんなに簡単に妊娠させろとは』中部の男だから、（中部でカサギの意味は妊娠のことなので）わからないさ「カサぎらして」といって、どういうことなのか（と困惑した様子）。

山原で山原の女が（カサぎらしは、荷物を頭の上にのせてくださいという意味でお願いした事であった）。

⑥　カサギラセ

徳里静（明治四十四年生）　住吉

［方言原話］

かたみとーしんかいる、あんいやりーたさ。

山原の人は頭からこんなして、ザルを後ろにかついでいるさーねー。これに「うまんかい、うすてぃとぅらしぇー」ぬちむえーどぅやしが、「カサギラシェー」んでぃとぅくまぬあんでぃよー。「カサギラシ」んでぃいたくとぅ、ちゃー追いさっとーたんでぃしとーゆぬむん。

［共通語訳］

かつぐことに、そういっていたんでしょう。

山原の人は頭からこんなして、ザルを後ろにかついでいるさあねえ。これに「上に持ち上げて下さい」という意味なんだが、「カサギラシェー」という所があるそうだよ。「カサギラシ（妊娠させて）」といったので、ずっと追いかけられていたという話（はヒル好きか）と同じような話である。

⑦　カサギミソーリ

普久原幸（大正五年生）　泡瀬

［方言原話］

山原ろーよーひー、うんぐとぅしディールかたみていさい、「カサギ」んでぃ言んよー、「カサギにん」でぃ言んよーやー。

あんさくとぅ「くれーカサギラチクミソーレー、とぅらしみそーれー」と言ったら男は、その男は逃げたと言うんじゃない、やー。

うぬ話聞いたことあるよー。

［共通語訳］

山原はね、このようにディールをかついだりするのに「カサギ」と言うよ、「カサギにん」と言うよね。

それで「これをカサギラして下さい、カサギらせ

※1頭から　頭から荷負う運搬具のこと。

※2ディール　荷負いカゴのこと。ヒモを額につけて荷負う。

※3その男は逃げた　「カサギラセー」という言葉は沖縄本島北部辺りでは「孕ませて」の意味だが、中南部では「妊娠」の意味があり、男は「孕ませてくれ」の意味にとり、逃げて行った。

てもらえませんか」と言ったら男は、その男は逃げたと言うんじゃない、ねー。
その話を聞いたことがあるよ。

⑧　カサギラセー

島袋義堅（大正三年生）古謝

［方言原話］
山原辺の「カサギラし」んでぃ言んでぃくとう、くりかーから行ちゅるのー、じゅんじゃーふぇーどー、どぅまんぐぃーしんうんどーでぃちぬ話やあん。

［共通語訳］
山原辺りでは（荷物をかつがせて下さいというのに）「カサギラせて」と言うそうで、この辺から行く人は（妊娠させて）と言っていると思って、ほんとにやっかいなことで、とまどう人もいるそうだという話はあった。

⑨　カサギラセー

宮城タケ（大正五年生）中の町

パーキはティールといって、耳、ヒモちゃんと付けられているわけ。こうしてからに持って、山原の畑は山野もたくさんあるわけ。で、山野がなくても、トーバル（平坦な所）でも、畑はこんなに。荷物は持つのはね、ここの頭にのせる人よりは、こうしてカサギてくる人は多く荷物は持つ。カサギて来てからね、面白い話聞いたでしょう。

したらね、もう長道こうして荷物持ってきたら、私方なんか塩屋だから、ずっと遠い所に薪取りに行きよったわけ。したら、途中で、友善の下りた道路の下。あっちによく休みよったわけ、ね。も、最近ではやってない。も、前の話であるから。こっち友善ができない前の話。あれができない、私方が小さい時。私らよりずっと上の姉さん方の話であるわけ。
して、そこで休んでいたんだって。暑いから夏でもあるし。こっちは木の下だから。薪下ろして休んでいたって。「な、にっかないるむんぬ早く帰ろう（も、遅いので早く帰ろう）」と言っていたら、「げーらー（帰ろう）」っと言ったら、四名いたらしいのよね、この人方。したらね、男の人がここ、二人来よったらしい。この人は、なんか中頭でもない、南部の人だったらしい。なんか、浦添の人だったらしいねー。したら、その人方にね、
「えー、兄さん、兄さん、うすてぃカサギラシェー」と言ったらしいのよ。「うすれー」と言うような、あれでしょう。そうじゃなくって、
「えー、くさーからうすてぃカサギラセシェー（ねえ、うしろから押してかつがせてちょうだい）」と言ったらしいのよね。したら、あれはね、遠道ではね、カサギらすの、こう押したらね持ちやすいわけよ。このカサギて持っているわけ。こう、荷物を押したらね立ちやすいわけさ。押したらすぐ立たれるから。
「え、兄さん、兄さん、くさーからうすてぃカサギラ

※1 山原　沖縄本島の北部のこと。山が多いので山原と呼ばれる。
※2 パーキ　カゴの基本形の一つ。
※3 塩屋　大宜味村の字。塩屋湾口の北岸から延びる砂嘴の上に立地。
※4 友善　大宜味村の字。押川（六田原）に建てられていたホテル。塩屋湾が一望できる絶景の場所。
※5 中頭　沖縄本島中部と周辺諸離島からなる。三山鼎立時代の中山の地域にほぼ相当する。
※6 南部　沖縄本島南部とその周辺離島をいい、南部地区、島尻とも呼ばれる地域。
※7 浦添　沖縄島南部に位置し、東シナ海に面する西海岸沿いにあって、宜野湾、那覇に隣接する市。

シェー（ねえ、兄さん、兄さん、後ろから押してかつがせて下さい）」と言ったから、

「ああ、くぬおばさんたーぬんでぃ言みしぇーが（はーっ、このおばさんたちはなんてことをおっしゃるのか）」と、

「え、とぅるばてぃ、ぬーんでぃやー目（ク）クルクルし言ちょーが兄さん（ねえ、なにボカーンとして目をクルクルして言っているのですか兄さん）」と、塩屋の言葉で言ったらしいんですよ。したらね、

「ぬ、人情（ンジョー）んねーん、うぬニンシェーグワー。やなニンシェーグワーたーやさ。うすてぃカサギラしーでぃちゃんてー聞かん（なに、人情もないこの青年達。意地悪な青年たちだ。押して担がせてと言っても聞いてくれない）」。

「えー、いったーぐるひー、くさーからうすていて持（ム）たしでぃちょーるちむえーどうやいびんなーさい（ねえ、あなた方が言っているのは、後ろから押して、持たして下さいという意味ですか）」と言ったから、

「あんすんてー（そうなんだよ）」と言ってからしたらね、押してから持たしたらね、あん、んちゃ、ちゃ、すぐカサギて（ああ、なるほど、すぐかついで）立たれるでしょう。『あー、それにそう言ったんだなー』と言ってからに。

⑩　カサギラセ

当山平治（大正五年生）　住吉

山原では女の人は、こう山道狭いもんだから、（荷物を運ぶ時には）丸いカゴやのこうとモつけて頭にかけて、すぐ狭い道も通れるようにやった。で、これ、下ろして休んでいる時に、「さあ、もう、ボチボチ行こうかな」と思うんだけど、自分でこう立ちきれないので、そこに中頭方面の人が通ったもんだから、山原（ヤンバル）の人でなくして、中頭の人がね、博労ね牛、馬を買いに北部に行った時に、山道でここに（休んでいる女の人に）偶然会ったもんだから、（女の人が）、

「あのー兄さん、カサギラチとぅらしぇー（ねえ、兄さんカサギらして下さい）」と言ったもんだから、もこの男の人はビックリして、「カサギラシ」っちゅーのは、「妊娠させてくれ」という意味でしょう、ここ（中部）では。むこうに山原のどこってはわからんけど、この頭にこうカゴにヒモついてるの、こう上げてくれ（というのを）、

「えー、兄さんカサギラチとぅらしぇー（ね、兄さんカサギらせて下さい）」と言ったもんだから、その人はビックリして、もう、すぐ急いで逃げたはず。

そして、その（男の）人が行った所が、また、この、そう言った女の人の家だったらしい。で、

「ぬーがオトー、うぬ人（ヒト）知っちょーんなー（なんでお父さん、この人を知っているの）」というと、

「あい、あんしぇー（それはもう）、くぬ畜産を買ったり、売ったりして知っているよー」んちゃぐとぅ（と

言うと)、「ハーナー、うぬ人とう、ぬーんならんしが。あんし、カサギラチとぅらしんちゃぐとぅ、知らんふーなーし、しゅぐ、しゅぐはいるするむんぬ（なんてこと、この人は付きあいきれないよ。あのように、荷物を上げるのを手伝って下さいとお願いしたら、知らんふりして、すぐ、すぐに行ってしまったもの）」と言ったもんだから、中頭あたりでは、そういう言葉は「妊娠させてくれ」ということだから、(と説明したら)納得したという話ですね。

(山原では)「上げてくれ」というのは、「カサギラチとぅらし」と言う、北部の人だったら分かる。この辺の（中部辺りの人は）なー、わからんわけさー。これ有名な話です。

⑪　カサギラセー

瑞慶山良明（明治四十二年生）　室川

この話はですね、このイモを掘って帰ろうとする時に、この大通りから人が来たんですよ。この芋を掘って、ティールというバーキに入れてからかつぐのこれは山原ではティールと言うよ。これに(イモを)入れてですね置いてあるものを、この（大通りから来た）男に、

「エーサイ、ぶりーやいびーしが、うり、カサギラチくみそーり（ねえ、そこのお方、すみませんがそれをカサギらせて下さいませんか）」と言うたらしい。ね、そう言うたから、この人は、「人ぬーくんがやー」と、「誰も来ないかなー」と言うたらしいです。これ意味わかる。「カサギラチ」と言うのはこの男は、これ（妊娠させて）と思ったわけよー。だから、「人やくんがやー（人が来ないかねー）」と言うたらしい。「うんじょー、ぬー勘違ぇそーが（あなたはなにを勘違いしているのですか）」と言うて、その話がありますね。

この人はただ、道ん人だから、(道中で会った人)、ただ通る人だから。これティールあるでしょう、これを持たしてくれ」という意味、言えば。山原はですね、全部このティールと言うてバーキ、言えばティールに入れて、こうカサギ（かつい）て歩くんですよ。これからこうして。ここ（頭）にのせて、こうして歩くんですよ。これに「カサギて歩ちゅん、カサギーン」という、だからね。

⑫　カサギラセ

新屋ヨシチ（大正八年生）　越来

女がね畑で芋を掘ってね、ザルに入れて、一杯入れて、自分では(頭の上にのせることが)できないさーね。そしたら、こっちから男が歩いていたといって、「カサギラシ」と。これは、金武方面の言葉でないかね。金武なんかこんなに言うみたいよ。「カサギラシンソーレー（頭の上にのせて下さい）」と言ってね。「カサギラシンソーレー（カサギらして下さい）でいねー（と言うと)、くまー「カサギラシ」んでいねー（ここで、「カサギラシ」というのは)、あれ（妊娠さ

※1ティール　竹籠の名称。一般に紐つきの籠をいい、「手籠」の意である。
※2バーキ　竹籠の基本形の一つ。一般に目の粗い笊をいう。
※3山原　沖縄本島北部の国頭郡は山が多いので山原という。
※4金武　沖縄本島北部、恩納岳のすそ野が東に緩やかに延びた台地上に立地し、南は金武湾に面する。

せること）さーねー、男と女のそうしないとカサギ（妊娠し）ないさーね。あっち（金武）はたぶん（頭の上にのせてもらうことを）「カサギラシンソーレー」と言うはず。うちのお母さんが金武の人だから、聞いた覚えがある。そしたら、

「うん」と言ってね、すぐこの女は、うしけーらちカサギラスンでぃちさくとぅや、（押し倒して、妊娠させようとしたらね）、

「そうじゃない、あんたそうじゃない。頭にこう手伝い」って。

そうではない勘違いの話。

⑬　カサギラセー

高島邦子（大正二年生）越来

「頭にのせてちょうだい」というのね。昔はね、ザルをね、長く作ってよ、あれにイモを全部放り込んで、綱をこのぐらいの幅に編むのがあるさー藁で編んだりしてね。髪結ぶようにして、三つ編みするようにしてこんなにして作って。ザルに耳作ってよ、これにつけて、これを自分の頭に、こうしてこっちに額にかけよった。して、荷物は全部、どんな重いもんでも持ちますよ、あれは、両方の肩使うから。

それで、名護羽地の人がね、あっちの人はいつも名護にお芋なんか野菜なんか持って行きよったって。それ、いっぱいかついでね、こっち（額に）にこうして、羽地まで一里あるかねー。あの道を通って来よったー。「カサギラシェー」といったらね、「カミラチとうらしぇー（頭の上にのせて下さい）」でいちょーるばー（と言っているわけ）。「カサギらちとうらしぇー」といったら、「加勢して、カサギラチトゥラシェー（荷物を上げて下さい）」と言ゆったわけさー。だけど、反対に聞く人がは、「カサギラチとうらしぇー」といったらもう、「妊娠させてとうらしぇー（下さい）」というのと間違うでしょう。だから、逃げるわけさー。こういうことは「カサギラシェー」。

⑭　カサギラセ

宜志政英（大正七年生）中の町

山原でないかねー。言葉が違うからね。あっちで「カミラチトゥラシ」と言うだろう、自分たちの所方言では。頭にのせるのは「カミトーン」とかなんとか。「カミラチトゥラシェー（頭の上にのせて下さい）」と言って、あっちの言葉は「カサギラチトゥラシェー」と言ったら、こっちはまた男は（妊娠させてと）勘違いしているだろう。「出来ない」と言って逃げたとか、なんとか話があったわけ。

その女が、

「エー兄さん、カサギラチトゥラシェー（ねえ、兄さん、カサギらしてちょうだい」と言って言ったら、もー、これービックリしているさー。あっち（山原）の人じゃなかったわけさー。あっちの人ならわかるさー。だけど、「カサギラチトゥラシェー」と言ったら、「ああ、かみらし（頭の上にのせて）」と。自分たちの所が頭に「カミーン（頭の上にのせる）」ということ、

※**1名護羽地**　沖縄本島名護市の地区名。旧羽地村。

※**2カサギラシェー**　山原では荷物を頭の上にのせて下さいというのを、「カサギラシェー」という。中部では「カサギー」は「妊娠」の意味があり、「妊娠させて下さい」という意味にもとれることから、誤解した話。

「カミラチトゥラシェー」と言ったら、「はい」とあげるわけさー。あっちでは「カサギラチトゥラシェー」という。だから、自分達がちょーど、あっちに行って『こういうのが大変』と言って逃げるわけよー。

⑮　カサギラセ

内田清栄（大正十年生）山内

芋畑で芋を掘ってザルいっぱいこう、積んだ若い女の人がですね、やっぱし男の旅人に、「えー兄さん、このカゴを私の頭にのせてくれ」という事をすね、「自分では持ちきれないので、ザルを一緒に私の頭にのせてくれ」ということを「カサギラチトゥラシェー」と、こういう言葉を言う村があるらしいねー。これ国頭ですよ、どこか金武あたりありませんか。

「カサギラチトゥラシェー」と言うもんだから、その「カサギラチ」といったら、「妊娠させてくれ」という（意味なので）勘違いする、この辺の人が、必ず。だから、その旅人はビックリしたというねー。

金武、山原といったら、こっちからあんまり遠くないでしょう。あんまり遠くないけど、こんなに言葉違うなーという話聞いた。

⑯　カサギラセー

知念勇助（大正七年生）古謝

山原でね、若い美女が芋掘りに行って、芋をたくさん掘ってバーキに入れて頭にカミレーやー（のせたいと）と思うが、自分の力ではできないもんだから、そこに美男子が来たもんだから、「うんじょーなー手貸らちうぬ芋カサギらちくいみそーれー（あなたの手を貸してこの芋をカサギらせてもらえませんか）」と言ったむんぬ（お願いすると）、「いーいーないさ、ディチャ（はい、はいできますよ、さあ、さあ）」んち手引ちゃーに、ウージぬみーかい行ちゅたんでぃ（と手を引いて、キビ畑の中に行ったそうだ）。

⑰　カサギラセ

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

ある女だちが二、三名ね、薪を取って来て休んでおる時に、だいたい三名おったらね、二人はこう上げて（持つ）ことができるが。そういう休んでおる時に、那覇の人がそっちに通ったらしいんだよねー。で、後の一人が（かつぐことが）できないもんだから、「えー、えー兄さん、私ハサギラシェー（ねえ、ねえ兄さん、私ハサギらして下さい）」と言ったらね、そうしたら、

「ウー、ウー（なに、なに）」って言って、もう、意味がわからんさーねー。「カサギラシ」といったら要するに、女と関係（もたないと）なんかやらんと妊娠やることはできないさーねー。そって、意味違いして、もう、どうしようかとうろたえていると、ある二人の人が「こうこうやって上げなさいという意味だよー」と言うたら、

※1カサギらちくいみそーれー「かつがせて下さい」という意味だが、男は「妊娠させて下さい」と勘違いした。

「ああそうすか。あなた達は、人を驚かして、そういうことをするんですか」と言って、冗談で別れたらしいんですよ。こういう話なんだよ。

⑱　カサギラセ

佐久田千代（大正七年生）宮川

これ、所によっての言葉（の違い）だったからさ。私たにーや「かみらしぇー」でいるいしぇーやー。「頭にのせてちょうだい」とお願いする。これが「カサギラシ」というから、こんな所の人が分からんわけだからね。こんなに勘違いするわけよ。だからこれ「妊娠させてくれ」と聞違えているわけ、この聞く人がはよ。

あっちの人がは「カサギリ、こんなして、こっち（頭に）のせさせてくれ」という意味だけどよ、あっちはまた（妊娠させてくれという意味。だから、これが違いだよ。めいめいのシマの（言葉の）違い。勘違いするわけ。

⑲　カサギラセ

比嘉フジエ（大正三年生）山内

持ちきれなくて頭にも。カサギルっていったら背中でしょうねえ。背中になにもかもこっちにあれしてから。山原あたりもそうだから、自分でできないから「ちょっと手貸してちょうだい」って、「カサギらしてちょうだい」って言うんじゃない。こっちは頭にのせるから、「頭にのせてちょうだい。自分ひとりでできないから」と言うのと同じじゃないかねー。

こっちは頭にのせるの「上げてとぅらしぇー（あげてちょうだい）」というんじゃないの。そうじゃなくて、カサギらせ（妊娠させ）に行ったんじゃないかねー。

⑳　カサギラセー

石川ツル（大正六年生）東桃原

これは「上げてちょうだい」でぃ言（ぃー）どぅんしぇー（というのは）「カサギラチ」んでぃし言ち（といったので、男は「妊娠させて下さい」と聞いているわけさ、「どこに行ってやるかー」と男は言っているさー。「これでないよー、これ頭にカサギなさい（上げてちょうだい）」でぃちゃぐとぅ（と言うと）、「そうですか」でぃやーに、上ぎらんよーいはいたんでぃ（と言って、上げないで行ってしまったそうだ）。

㉑　カサギラセー

照屋唯兵衛（明治四十年生）國田

「頭に（のせるの）手伝いしてくれ」という意味ね。だが、山原の言葉では「頭にカサギラチ」というのは、やっぱり「あげてくれ」と言う意味らしいんだが。

この辺から向こうに何か動物買いに行く人に、芋掘っている女がね、そっから男が通ったから、「私（ぅ）カサギラチとぅらしよー（私をカサギラチ下さいませんか）」して、この人ったザルかねー、何か叩いて非常に呼び掛けたらしい。そうしたらもー、『これは大変だ』と思って逃げたという話だよ、男は。

㉒　カサギラセー

玉城シズ（明治三十八年生）久保田

うれー島々ぬ言葉（しまじま）てー（それは、島々の言葉さ）。私のところは「上げてちょうだい、カミラシテちょうだい」と言ってね、「カシギラシェー」と言うところがあるって。このまた男は来てから、『ああ、そーむんやさやー（ああ、本当だねえ）』ってから。「芋カミラシェー（芋を上にのせて下さい）」って言ったから、して、

「あんた、またヒルもカミラシテー（上にのせて）でいちゃれー（と言ったら）、カミラシテー（上にのせて）、

「ヒルんないみしぇーんなー（ヒルもできますか）」でいちゃぐとう（と言うと）、ヒルる漬きてーんくとうや、（ニンニクを漬けてあるのでね）、ありどぅお客さんにうさぎーんでいちやしが（お客さんに差し上げようと思っているが）、取りに行ったから、この男がけー追い（ついてきた）こんな話があったわけ。

㉓　カサギラセ

瑞慶山千代（大正六年生）照屋

タキムン（薪）は取ったから、自分では（頭に上げることは）できないからね「兄さんカサギらちくいれー」って。「カミラチくいれー（頭に上げてちょうだい）」言うのにね、「カサギラチーくいれー」（と）山原の言葉（では言うそうだ）。

㉔　カサギラセー

宮城次郎（大正二年生）園田

（かつがせて下さいというのに）「カサギラち」というんだよ山原は、中部と違う。中部は「上げれ」というんだよ。あい、女にかんじんに持ち上げれ「カサギラチ」というふうに頼むんだのに。これが、こういうそうだ山原は「カサギラチ」と。

㉕　カサギラセ

知念眞章（明治四十二年生）胡屋

荷物を上げることを「カサギラセ」というんだよ。田舎の人がな、（中頭の人に）そう言うたら、も、ビックリしたとかいうなんだがな。

中頭では妊娠させることを「カサギラスン（妊娠させる）」。

(5)　ヒルも大丈夫？

①　ヒル好きか

金城眞良（明治四十年生）古謝

[方言原話]

客ぬめんそーちゃくとぅどー、

「うんじょー、ヒルんなみしぇーみ」んちゃくとう、

「あい、ないするないやーや」んちて。アンマーがクチャんかい、ヒルガーミんかいヒル出じゃしーがんち行じゃくとう、ちゃー追いやるばーてー。「ヒルんなみしぇー」でいやくとう。ちゃー追いさくとう、

※1ヒル　ニンニクのこと。ニンニク漬けは、大きく分けると、地漬、塩漬、泡盛漬の三種類ある。泡盛に漬けたニンニクは、お茶うけやおかずにして食べる。

「ぬーがうんじょー、うまんかいめんしぇーびたん」でぃ、
「うり、いやー、ヒルんないみでぃ言たさに」でぃちゃぐとぅ、
「あらん、ヒルんうさがいみしぇーみでぃるばーどぅやんどー」でぃちゃぐとぅ、
「かむしゃら一、かむしないみでぃ言るんしぇー、私ねー追てーくーんむん、ヒルんないみ、ないみすくとぅてー、恋事がやらーんでぃ思てぃ来んどー」でぃ。

[共通語訳]

客がいらっしゃったからね、
「あなたは、ヒルもできますか」とたずねると、
「そりゃー、できるさお前」と返事した。アンマーが裏座に、ニンニクを漬けたカメにニンニクを出しにといって行くと、(お客さんは)ずっと追いかけているわけね。「ヒルもできますか」ということだから。ずっと追いかけたので、
「どうしてあなたは、ここに来たんですか」と言ったそうだ。
「それは、あなたがヒルもできますかと言ってただろう」と言うと、
「違います、ニンニクを召し上がりますかということなんですよ」と答えると、
「食べるものであれば、食べることができますかと言えば、私は追いかけてこないものを、ヒルもできますか、できますかと言うので、恋事なのかと思って来たんだよ」と。

②　ヒル好きか

吉田（島袋）タケ（大正七年生）知花

[方言原話]

旅している男ぬうまんかいもーちゃぐとぅてー、くぬ家ぬ主ぬオカーがてー、
「うんじょーヒルんないみしぇーみ」でぃちゃぐとぅ。くぬヒル、ラッチョーぬヒルんでぃ思やーに、ヒルうさぎーんちやてーるばーてー。
「ヒルんないみしぇーみ」んちゃくとぅ、
「ああ、ヒルんないするる。いちやてぃんないするる」んでぃやーに、
「トートーあっけー」でぃやーに、すぐクチャグワーんけー、ガサガサうぬオカーんすんち、
「アイエー、うれーうぬくとーあいびらんでー。ヒルうさぎーんちとぅやたんでー」でぃちゃぐとぅ、
「アイエーナー、うんじょーなー」。勘違ぇ棒ぬ倒りーねーし、
「ナーナーでーじ」んでぃち、
「ハー、うれー、うぬくとーあらんどー」んでぃいちぐとぅ。私たーんで話ぬあたるばー。

[共通語訳]

旅している男がここにいらっしゃったからね、この家の主のお母さんがね、
「あなたはヒルもできますか」と聞いた。これはニン

※1トートー　人をせきたてる時に発する言葉。
※2ガサガサ　無理やり引っ張っていく様子。
※3アイエー　びっくりしたり、驚いたりした時に発する言葉。
※4ハー　驚いた、あきれた時などに発する言葉。

ニク、ラッキョウ（の漬物）のことで、ニンニクを差しあげようと思っていたわけさあ。

「ヒルもできますか」と言うと、

「ああ、昼でもできるよ。いつでもできるさ」と言って、「トートー歩きなさい」と言って、すぐ裏座に、ガサガサそのお母さんを引っぱったので、

「アイエー、それはあの事ではありませんよ。ニンニクを差し上げようと思ってですよ」と言うと、

「アイエーナー、あなたっていう方は」。勘違いはみごとに崩れて、

「これはもう大変なことだ」と、

「ハー、これは、そのことではありませんよ」といったという。私のところでそのような話があったわけ。

③　ヒル好きか

山内三郎（明治四十一年生）知花

［方言原話］

牛バクヨーがめんしぇーたんとうてー。あんさぐとう、夫南洋かい行じゃーに、牛飼らとーみしぇーるヤグサミアンマーがめんしぇーたんでいよー。あんくとう昔ぇーくぬ農家やヒルんでいし漬きやーに、あんさーに家ぬクチャグワーんかい立派ぬカーミんかい置ちありそーみしぇーしが。客ぬめんしぇーねーうり出じゃ茶わきしみみしぇーたんでいよー。

あんさくとう、牛買やーがめんそーちゃくとうや、茶や出じゃちぇーしが、茶わきんねーんしぇーやー、「ヒルんなみしぇーみ」でぃ、「うぬ漬物なみしぇーみ」でいちゃぐとうや、いふぇートゥルバやーに『トーくれーないるむんなー』でいやーに。クチャグワーんかい、ゆくクチャんかいうぬヒロー置ちぇーくとうやー、クチャグワーんかい行じゃくとうよー、男ぬ勘違しー、ちゃー追いし、けー行じゃんでぃ。

うりが笑い話やさ。

［共通語訳］

（ある家に）牛博労がいらっしゃったそうだ。そしたら（そこの家の）夫は南洋に行ってて、牛を養っている未亡人がいらっしゃったそうだよ。その昔、農家では二ンニクというものを漬けて、そして家のクチャグワーに立派にカメに入れて置いて保存していた。客がいらっしゃったらそれを出して茶うけとしていたそうだよ。

すると、牛買いがいらっしゃったのでね、お茶は出したのだが、茶うけがないさあねえ、

「ヒルもできますか」と、「この漬物食べれますか」と（いう意味で）聞いたら、（牛博労は）少しの間ポーっとして『トーこれはできるな』と勘違いした。クチャに、ましてやクチャにニンニク漬けを置いてるものだから、クチャグワーに（取りに）行ったらね、男は勘違いして、ずっと後をついて行ったそうだ。

それが笑い話さ。

※**1クチャ**　座敷の裏側にあるので、裏座ぐゎーともいわれる。若夫婦が寝室として使ったり、お産の場所になったり、納戸と同じように使われる部屋。

※**2トー**　意気込んで物事を始めようとする時などに発する言葉。

④　ナービナクーとヒル好きか

喜納兼優（八正七年生）東

［方言原話］

ナービがほげた場合は、フイゴでもってね木炭に鉄込めてよ、この鉄をとかすわけさー。とかしたノロノロなっているから、このほげたナベはこのとけたなに、なにしてクーするわけよ。これが、ナービナクーが理屈な者やてーるばーてー。

それで、畑に行っておるのはだんなさんであるわけ。だんなさんに、

「いったーナービふぎとーるナービねーんーなー」でいちゃぐとう、

「あん」でいちょーるばー。

「あんしぇーナービくーしみり」でいちゃくとう、

「いいよ」んでい言ちょーるばーてー、だんなさのー。

あんさくとう今度お家に来て奥さんに、

「ヒルんなみしぇーんなー」んでい奥さんが言たからよー、

「いったーオトーがしんでい言てーくとうや、ないん」でい言ちょーるばー。それで間違っていってニンニク取りに、クチャグワーに行く時に、この奥さんをだましているんだね。

というのは、うりジンブン持ちじゃなかったかねー、欲張りが。

［共通語訳］

ナベの穴があいた場合は、フイゴでもってね木炭に鉄込めてよ、この鉄をとかすわけさあ。とかした（鉄は）ドロドロなっているから、この穴のあいたナベはこの（鉄の）とけたものでふせぐことができるわけよ。それが、ナービナクーはずるがしこい人だったわけね。

それで、畑に行っておるのはだんなさんであるわけ。だんなさんに、

「あなた達のナベ、穴のあいているナベはありませんか」と聞くと、

「ある」と言ったそうだ。

「それじゃあ修理をさせてくれ」とお願いしたら、

「いいよ」と返事をしたようだね、だんなさんは。

そうしたら、（ナービナクーはその）家に行って奥さんに（鍋の修理のことを伝えると）、

「ヒルもできますか」と奥さんが言ったのでね、

「あなたのだんなさんがしなさいと言っていたので、できるよ」と答えたらしい。それで、勘違いしたナービナクーは、（奥さんが）ニンニクを取りに裏座に行く時に、奥さんをだましているんだね。

ということは、ナービナクーは頭がよかったんじゃないかねえ、欲張りで。

※1ナービナクー　鋳掛け師のこと。道具類と材料を入れた箱を担いで各地を渡り歩いて、鍋・釜を修繕する職業。修繕した穴に最後に味噌を塗って仕上げた。

※2クチャ　裏座のこと。主に二番座の裏。

⑤　ヒル好きか

太田キヨ（大正十三年生）比屋根

［方言原話］

ニンニクにはね、沖縄口しぇー「ヒル」というわけよー。隣のおじーさんが、おばーさんのところに遊びに来ているわけさー。

「ちゃーびら」と言ったら

「めんそーれー」でぃちさくとう、

「茶ぐわーうさがれー」んちゃくとう、

「いー、茶ぐわーまーさんどー、飲ましよー、おばーちゃん」でぃ言ちゃぐとう、

「いー、んだ、ヒルんあくとう、ヒルんうさがみしぇーらやー、ヒルんあくとう出じゃち来うー」でぃち、シミダワーんかいヒルつけてあるさーねー、裏ぐわーに行ったら、うぬおじーはね、

「アイナー、いゃーやヒルんすんなー。私んねーヒローならんしが」でぃやーに家かいはらっとーたんでぃ。

［共通語訳］

ニンニクにはね、沖縄の言葉では「ヒル」というわけよう。隣のおじいさんが、おばあさんのところに遊びに来ているわけさあ。

ごめん下さい」と言ったら

「いらっしゃいませ」といって、

「お茶を召し上がって下さい」とすすめると、

「はい、お茶は美味しいので、飲ませて下さいねおばあさん」と言うと、

「はい、また、ヒルもあるので、ヒルも召し上がるでしょう、ヒルもあるので出してきましょうねえ」と、裏の部屋にヒル漬けたものを置いてあるさあねえ、裏に取りに行ったら、そのおじいはね、

「ああどうしょう、あなたはヒルもできるの。私はヒルはできないけど」と言って家に帰られていたそうだ。

⑥　ヒル好きか

平田フミ（明治三十五年生）登川

［方言原話］

女のー、茶わきさー、お茶出してあるでしょ。こんなしてお菓子でなくて、昔は、自分が作ったヒルとダッチョーと。女の所はヒル漬けてあったはず。

だから、茶や出じゃちしぇーしが、茶わきぬねーびらん、

「うんじょー、ヒルんないみしぇーんなー」かい。「恋、ヒルんないんなー」でぃやー男のー言ん思やーに、あんしやちさんでぃやー。

こんな話だよ。あぬ、まる反対やしぇーやー。

［共通語訳］

女は、お茶うけさあ（それも出してあげようと）、お茶出してあるでしょ。こんなしてお菓子でなくて、昔は、自分が作ったニンニクとラッキョーと（漬けていた。女の所はニンニクを漬けてあったはず。

だから、お茶は出してあるが、お茶うけを出してなかったので、

※1ダッチョー　らっきょうのこと。らっきょうは五月に収穫し、夏の漬物として浅漬けにしたり、黒砂糖と酒で大きなカメに漬けこんだりする。（『聞き書沖縄の食事』―日本の食生活全集47）

「あなたは、ヒルもできますか」と（ニンニクを食べれますかとたずねたつもりが）「恋、昼もできますか」と男は言っていると思って、勘違いしていたという話があった。

こんな話だよ。それは、まるで違う話さあねえ。

⑦　ヒル好きか

屋宜カメ（明治四十一年生）安慶田

［方言原話］

生ち虫こーやーが行じゃくとぅやー、人ぬ家んかい、うま、スーやうらんアンマーがうたんでぃ。あんさくとぅやー、あんくとぅ、ニンニコーヒルんでぃしぇーやー。昔ぬ人ピロースっぴなーそーるカーミんかい漬きーたん。今ぬ人くささんちかまんしぇーやー。あんさくとぅ、

「うんじょーヒルんなみしぇーんなー」でぃちゃんでぃ。あんさくとぅ、うぬ女あん言やーにクチャんかいフィル取ぃが行じゃんでぃよー。うぬ男ちゃー追いし行じやー、あんしやたんでぃ。

「うぬちゃー追いしぬあとー、ちゃーなたがやー」んちゃぐとぅやー、

「あんし、ちゃー追し行じゃーに、うすらったがやー」でぃちゃぐとぅ、また、高原来るオカーがやー、

「アキサミヨー、カサギとーたんでぃどー」でぃ言るばーてー。

［共通語訳］

家畜を買う人が行ったらね、よその家に、そこはお父さんはいないで、お母さんがいたそうだ。それでね、そのニンニクには（方言で）ヒルというさーねー。昔の人はニンニクはこんな大きなカメに漬けていたよ。今の人は臭いといって食べないさあねえ。そこで、（家畜を買いに来た人に）、

「あなたはヒルもできますか」と言ったようだ。そして、その女はそう言って裏座にヒルを取りに行ったそうだ。その男はずっと追いかけて行っていたそうだ。

「その、ずっと追いかけて行った後はどうなったかねえ」と言ったらね、

「それで、ずっと追いかけて行ってから、やられてしまったのかねえ」と言ったら、また、高原から来ていたお母さんがね、

「アキサミヨー、妊娠していたそうだよ」と言うわけさ。

⑧　ヒル好きか

比嘉良信（大正五年生）中の町

［方言原話］

あるっ人ぬよー。この、なま、いゃーうま敬語さぎーしぇーやー。

「ヒルんなみしぇーんなー」ということはね、相手の男は侍がやらー、ゆかっ人がやらー、百姓がらーわからんばーんあしぇーやー。

あんさーに、こー、道から歩ちゅる人ぬ、生ちムシ買やーんでーやてーんてー。あんし来くとぅ、う

ぬ女　茶沸かち出じゃち、や、お客さんだから。
　ずぶの、まったく知らん人やたんてーん、人ぬ家んかい尋にて来る人、茶ぐゎー出じゃちゃい、やーさぎさそーねー、やーさん、芋かますんでいぬあたいどうやくとうやー、昔の人は。
　えーいーちょーてい、茶ぐゎーうさぎていさーにさくとう、茶わけーえーりんねーらん、ヒルとう茶と一ぐーやらんはじやしが。ヒルというのはニンニクですよ。だから、
「うんじょーヒルんなみしぇーんなー」んちゃぐとう、「ああ、ないるする」んち。あんさー、うぬ女クチャグワーんかいやヒル取がるやるふーじやしが、だーあれー宝物とー、内んじるかじみてーくとう、ちゃー追いそーたんでいる話やるばーてー。

［共通語訳］
　ある人がね。この、今、あなたはここで敬語を使っているでしょう。
「ヒルもできますか」ということはね、相手の男は侍なのか、士族の方なのか、百姓なのかわからない場合もあるさあねえ。
　それで、こう、道行く人は家畜を買う人であったんだろうねえ。それで、（ある家に）たずねて来たので、そこの女はお茶を沸かして出して、ね、お客さんだから。
　ずぶの、全く知らない人でも、家にたずねて来る人にはお茶を出してあげたり、お腹すかしているようであれば、すいてるだろうからと、芋をあげるというくらいするからね、昔の人は。
　そこに休ませて、お茶を差し上げたが、お茶うけはたぶんなくて、ニンニクとお茶はよい組み合わせではないかもしれないが。ヒルというのはニンニクですよ。だから、
「あなたはヒルもできますか」とたずねると、「ああ、そりゃあ出来るさ」と。そして、その女は裏座にはニンニクを取りにらしいが、その宝物は奥にしまっているから、（お客さんは）女の後を追いかけていたという話であるそうだ。

⑨　ヒル好きか

屋良千代（大正五年生）　越来

［方言原話］
「ヒルや好きやみ」んでいしぇーや、このヒルがあるさーね。あのニンニク、ニンニクは沖縄口「ヒル」と言よったさーねー。これが話はとってもよー、おかしいよー。これを考え違いしたらよー、変なモノになるわけさー。
　これはよー、昔はヒルはね、お茶の茶わきといって、ヒルは塩漬きさし、砂糖漬きさい、ヒル、ダッチョーはもう朝、夕さぬ食べ物ですから。茶わき、お茶菓子と一回ぐむ。もう、昔は菓子はないさーねー。昔は、ヒルとうダッチョーとうやか、このヒルとダッチョーはねー、あったわけさー。
　このある人が、も、てーふぁーやてーるばーるや

※1クチャグワー　座敷の裏側にあり、裏座小ともいわれる。納戸と同じように使われたり、お産の場所ともなった。家の北側に位置する。
※2ヒル　ニンニクのこと。
※3ダッチョー　らっきょうのこと。
※4てーふぁー　冗談などを言って人を笑わせる和げ者。

さに、てーふぁー話どうやんどーうれー。てーふぁ話からそーむんとう、かんしまじらーとーるばー。

あんしヒル出じゃたくとうどー、ヒル出じゃたくとう、お客さぬんかいどー、

「うんじょーヒルんなみしぇーみ」でぃちゃぐとうや、「ヒルんなみしぇーみ」でぃ言ちゃぐとうどうや、うりからぬ話どうやんどー。

「ないんどー、りっかー」でぃち、こんな話だよ。

「出来るよー」。

「ヒルんなみしぇーみ」んちゃぐとうや、

「ないんどー、りっかー」んち、

「クチャグワーんかい」でぃちゃぐとうや、うりからぬ話ムヌ笑い話どうやる。

このお客さんもジンブンがあって、てーふぁーやてーるばーてー。

「うんじょーヒルんなみしぇー」んち出じゃちゃぐとう、

「ないんどー、りっかー」でぃちゃぐとうやー、うりから、ムヌ笑い、てーふぁーなとーるばーどうやんどー。

[共通語訳]

「ヒルは好きですか」というのはね、このニンニクがあるさあね。あのニンニク、ニンニクは方言では「ヒル」と言よったさあねえ。これが話はとってもよおかしいよ。これを考え違いしたらね、変なモノになるわけさあ。

これはね、昔はニンニクはね、お茶の茶うけといって、ニンニクは塩漬けしたり砂糖漬けしたり、ニンニク、ラッキョウはもう朝、夕の食べ物ですから。お茶うけ、お茶菓子と同じ。もう、昔は菓子はないさあねえ。昔は、ニンニクとラッキョウのほかには、(あまりなく)、このニンニクとラッキョウはねあったわけさあ。

このある人が、もうひょうきん者だったんでしょうねえ。こっけいな話なんだよ、これは。こっけいな話から真面目な話とこう合わさってるわけ。

それでニンニクを出したらね、ニンニクを出したら、お客さんにだよ、

「あなたはヒルもできますか」といったらね、「ヒルもできますか」と言ったもんだからね、それからの話なんだよ。

「出来るさ、さあ行こう」と、こんな話だよ。

「出来るよう」。

「ヒルもできますか」と言ったのでね、

「出来るさ、さあ行こう」と、

「裏座に」と言ったからね、そのことからの話で、笑い話なんだよ。

このお客さんも知恵があって、ひょうきん者だったんだろうねえ。

「あなたはヒルもできますか」と出したら、

「できるよ、さあ行こう」といったからね、それから、物笑い、こっけいな話になっているわけさ。

⑩　ヒル好きか

粟国春子（大正二年生）山里

［方言原話］

「おヒルで付き合いできるかー」と言って、「ヒルなみしぇーみ」んちゃぐとう、うま見ちゃぐとう、しむ、クチャグワーに連れて行って。

後ろの方に、昔はカーミに漬けてあったの。「食べるかー」と言っているけど、「ヒルんなみしぇーみ」んちゃぐとう、「ないん」でい連れて行って、クチャグワーに行ってだったわけ。ヒル取りに行ったら、ちゃーぶいそーるばーてー。ヒル取りにカーミクチャグワーに取りに行ったら、この人は『しーが』でいカーミの側に行ったわけ。それでもの笑いが出ていたわけさー。

［共通語訳］

「ニンニクで付き合いできます」と言って、「ヒルできますか」と（男の人に）いうと、そこ見たら、台所（に近く）裏座に連れて行って。

後ろの方に昔はカメに（ニンニクを）漬けてあったの（置かれていた）。「食べるか」と言っているけど、「ヒルもできますか」と聞いたので、「できる」と連れて行って、裏座に行っていたそうだ。ニンニク取りに行ったら、ずっとついてきていたそうだ。ニンニク取りにカメ（を置いてある）裏座に取りに行ったら、この人は『出来る』と思ってカメの側に行ったわけ。それでもの笑いが出ていたわけさあ。

⑪　ヒル好きか

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

［方言原話］

昔、

「うんじょーヒルんないみしぇーん」んちゃくとう、ちょうどうぅふーじーてー。

「ヒルうさがいみしぇーみ」んでいれーゆるしが、「うんじょーヒルんないみしぇーみ」んちゃくとう、「ないるすん」んち、マッカイ持っちんじ裏座んかい行ちゃくとう、追てぃ来たんでぃよー。

ちょうどうぅったーぬん、うぬふーじーやるばーるやんどー。

［共通語訳］

昔、

「あなたはヒルもできますか」と言ったら、ちょうど（カサギラセー）と似ている話なんだが。

「あなたはニンニクも食べれますか」と聞いたらいいが、「あなたはヒルもできますか」と言ったので、「できるさ」と言って、お碗を持って裏座に（ニンニクを取りに）行ったら、（この人が）追って来ていたそうだよ。

ちょうどこの人たちも（カサギラセーの人と同じように）勘違いしているわけなんだよ。

⑫　ヒル好きか

島袋義堅（大正三年生）古謝

［方言原話］

うれ　昔ぃ話どぅやしが、本当がやたら。
客ぬ来に、
「うんじょーヒルんなみしぇーんなー」んちゃぐとぅ、
「うりないるすぅ」んち、うぬヒロー取いがー行じぇーんてー。昔ぃぇー漬けもんとか穀物カーミんかい入りやーに、クチャんし片付きーしぇー。うまんかい取いが行じゃくとぅ、男勘違さー追てぃ行じょーたんでぃ。うぬ話どぅやるはじどー。

［共通語訳］

これは昔話だが、本当にあったことか。
客が来たので、
「あなたはヒルもできますか」といったら、
「そりゃあできるさ」と、そのニンニクを取りに行ったようだね。昔は漬けものとか穀物はカメに入れて、裏座に置いてあるさあ。そこに取りに行くと、男は勘違いして追いかけて行っていたそうだ。その話だと思うよ。

⑬　ヒル好きか

普久原幸（大正五年生）泡瀬

［方言原話］

ある人が、女やぐさみぬ所んかい来に入ちゃぐとぅやー、
「うんじょーヒルんなみしぇーんなー」んちゃぐとぅ、
「アイ、ないるするいゃーや」と言って。ヒルというのはニンニクよ。あり漬きてーし取ていちゃーにうさぎーがやーんち、「うり、うさがいみ」でぃ言うつもりだけど、ついて来ていたって。

［共通語訳］

ある人が、未亡人の家に来て入ると、
「あなたはヒルもできますか」と言ったら、
「アイ、そりゃーできるさお前」と言って。ヒルというのはニンニクよ。ニンニクを漬けたもの取ってきて召し上げようと、「それ、召し上がりますか」と言う意味で聞いたようだけど、（勘違いして）ついて来ていたって。

⑭　ヒル好きか

普久原ウシ（大正二年生）嘉間良

［方言原話］

若い時にね、付き合いしぇーる男ぬ入ちちょーるばーてー、うぬ女の家んかい。あんさくとぅ、
「ヒルなみしぇーみ」んでぃ言ちゃくとぅ、うぬ女ぬヒル出じゃしーが行じゃくとぅ、後るんかい追ていちょーたんでぃ、裏ぬジャーんかい。

［共通語訳］

若い時にね、付き合っていた男が入って来ているわけさあ、その女の家に。すると、

「ヒルできますか」と言って、その女がニンニクを出しに行くと、（男が）後からついてきていたそうだ、裏の座敷に。

⑮　ヒル好きか

仲宗根蒲助（明治三十四年生）登川

［方言原話］

「ヒローゆくましるやる」んでぃ言たんでぃ男や。あんさぐとう、女ぬクチャんかいヒル取いが行じゃぐとう、追てぃ行じゃーにけーうすとーんでぃ。

［共通語訳］

「ヒルのほうがよいいいんだよ」と言ったそうだ男は。そうしたら、女が裏座にヒル（ニンニク）を取りに行くと、（男は）追って行き関係したそうな。

⑯　ヒル好きか

山田キヨ子（大正十三年生）大里

［方言原話］

女が男にさ、

「ヒルんないみー」と言ったからや、聞く人がーヒル、ニンニクさー、「ないみ」んちゃぐとう、「かむん」ちょーる意味ぇーやしが、

「でぃかーあんしぇー、ヒルんないらー」でぃち、クチャグワーんかい引っ張らってぃ行った。

この話はしよったから、聞いた覚えはあるさ。

［共通語訳］

女が男にさ、

「ヒルもできますか」と言ったからや、聞いている人はヒル、ニンニクさあ、「できますか」と言ったのは、「食べますか」という意味あいなのだが、（男は）「さ、それなら、ヒルもできるのであれば」と、（女は）裏座に引っ張られて行った。

この話をしていたので、聞いた覚えはあるさ。

⑰　ヒル好きか

与那嶺ツル（明治四十一年生）越来

［方言原話］

「ヒルんなみしぇーんなー」でぃ、

「ないん」でぃち。こっちがは、「ヒルんうさがいんなー」でぃしが、また、相手聞いた人は、

「ないん」でぃやーに、ちゃー追いし行じぇーんばーてー。驚いたって。

［共通語訳］

「ヒルもできますか」と聞いたら、

「出来る」と答えた。こっちは、「ニンニクを召し上がれますか」と言う（意味で聞いたつもりが）、また、相手聞いた人は、

「出来る」といって、ずっと後を追い回して行ったようなんだね。（それで）驚いたって。

⑱　ヒル好きか

宮城次郎（大正三年生）園田

［方言原話］

用事に行っている人がいたそうだ、女の家に、

「うんじょーヒルんなみしぇーみ」んちゃぐとぅ、

「すぐないんどー、うね早くクチャグヮーんかいりっかーしんち行きよーた話」「ないんどー」でぃぃやーに。

勘違いしてるんだよ。「ヒルんないんなー」んちゃぐとぅ、くり『恋しにいってみよう』思っていたそうさ。

［共通語訳］

用事に行っている人がいたそうだ、女の家に、

「あなたはヒルもできますか」と言うと、

「すぐできるよ、さあ早く裏座へ行こう」と行った話、

「できるよ」と言って。

勘違いしてるわけだよ。「ヒルもできますか」と言ったら、男は『恋しにいってみよう』と（言っていると）思っていたそうだ。

⑲　ヒル好きか

友寄ナヘ（明治四十一年生）住吉

［方言原話］

女がは、

「ヒルんないみしぇーみ」んちゃぐとぅやー、

「ヒルんないるする」んちゃぐとぅ。家の中にクチャグヮーんでぃちあいしぇーやー。うまかい取いがんでぃち行じゃくとぅ、『床とりに行ったはず』と思って、うぬ男やしぐボンないし行じゃーに、ちゃーうすいさんでぃ。

［共通語訳］

女は（ニンニクをあげようと）、

「ヒルもできますか」といったらね、

「昼でもできるさ」と答えた。家の中に裏座があるさあねえ、そこに（ニンニク）を取りにと（女が）行くと、『床をとりに行ったはず』と思って、その男はすぐ喜びいさんで行って、女を押し倒したそうだ（手ごめにしたそうだ）。

⑳　ヒル好きか

神里マカト（明治四十五年生）安慶田

［方言原話］

妻が夫に、

「ヒルんなみしぇーんなー」んちゃくとぅ、

「ぬ、ヒルんないるする」。な、また、うーてぃ行じゃーなかい、男ぬやー、ぐうーてぃ行じゃーに昼そーたんでぃ。

［共通語訳］

妻が夫に、

「ヒルもできますか」というと、

「そりゃあ、ヒルもできるさ」。そして追いかけて行って、男がね女を追いかけて行って昼していたそうだ。

㉑　ヒル好きか

喜友名トシ（大正九年生）　園田

［方言原話］

牛買やーが来くとぅ、お茶は出すでしょう。あんさくとぅ、

「うんじょーヒルんなみしぇーんなー」んちゃくとぅ、

「いートート上等やさ」んでぃ、まじゅんちりてぃ行じょーたんでぃ。うっさとぅわかいる。

［共通語訳］

牛買いが来たので、お茶は出すでしょう。そしたら、

「あなたはヒルもできますか」と言ったら、

「はい、サーサーいいことだ」と、一緒に連れ立って行っていたそうだ。それだけ知っている。

㉒　ヒル好きか

桑江カマド（明治三十四年生）　東桃原

［方言原話］

マース売いが行じゃくとぅてー、ちょーどぅうぬおばーさんが、

「うんじょーヒルんなみしぇーんなー」んちゃぐとぅ、

「いー、ないどー」でぃいやーにやったと。

その子どもがいるよ、本当ぬ事どー。

［共通語訳］

塩を売りに（ある家に）行ったらね、そこのおばあさんが、

「あなたはヒルもできますか」と聞くと、

「はい、できますよ」と返事してやったと。

その子どもがいるよ、本当の事だよ。

㉓　ヒル好きか

稲福ウキ（大正元年生）　久保田

［方言原話］

「ヒル好きですか」言うてこれ出した。なかなかわからないで。

「ヒルなみしぇーみ」でぃ言ちさー に、クチャんかいちゃー追いすたんでぃ。ヒル出じゃしーが行じゃくとぅ、追でぃちゅーたんでぃち。

［共通語訳］

「ヒル好きですか」言うてこれ出した。なかなかわからないで。

「ヒルできますか」というと、裏座にずっとついて来たそうだ。ニンニクを出しに行ったら、追いかけて来たといって。

㉔　ヒル好きか

城間文子（大正七年生）　比屋根

［方言原話］

女ぬ言ちぇーんてー、ちゃーしん、

「ヒルうさがいんなー」でぃちょーるばーどぅやたるはじやしが、

「ヒルんなみしぇーみ」んちゃぐとぅ、男が、

「うれー明るヒルんないんなー」でぃち。
この話も聞いた。

［共通語訳］
女が言ったんだろうね、たぶん、
「ニンニクを食べますか」という意味で聞いたと思うが、
「ヒルもできますか」と言ったら、男が、
「それは、明るいヒルにできるか」と。
この話も聞いた。

㉕　ヒル好きか

小谷シゲ（明治三十一年生）登川

［方言原話］
ヒル出じゃしーが行じゃくとう、女ぬ後じみから、ちゃー追いしめーたんでぃ。えー、またな「うまんけーめーくとう、出じゃしーがー行かんひん」でぃ言てーちさんでぃ。
うぬ話ー聞かりーたひが。

［共通語訳］
ニンニクを取りに行ったら、（男は）女の後から、ずっと追いかけていたそうです。それで「あなたが追いかけて来るので、私はヒルを出しには行かないよ」と言ったそうです。
そんな話は聞いたことはあるが。

㉖　ヒル好きか

高江洲マツ（大正六年生）諸見里

［方言原話］
ヒローくささしぇーやー、
「ヒルんなみしぇーなー」でぃちゃぐとう、
「クチャグワーまーやいびーが」でぃたんでぃ、うぬ人、相手ぬ人。

［共通語訳］
（ある男の人がある家で一休みをしていると、その家の女の人が、ニンニクはくさいさあねえ、（それで）、「ヒルもできますか」と言ったら、（あなたは夜の仕事を昼でも出来ますかと、言っていると思い）、「裏座はどこですか」と聞いたそうだ、その人は、相手の方は。

㉗　ヒル好きか

宮城福吉（大正六年生）美里

昔、ある友達の家に牛買いに行くさーねー。牛買いに行くから、ちゃんとお客さんだから、まー、その友達の奥さんであるか、おばあさんであるか分からないけれども。きれいにお迎えして、ゴザも敷いて、「休みなさい」と言って。も、だんなの友達だから。昔は煙草盆といって方言では火とうやーといったわけ。それを持ってきて、ちゃんとうぃむち（おもてなし）をして、お客さんを迎えて。また、お茶もあげたから、お菓子もないさーねー、その時代は。

だから、自分が作ってあるヒルを、漬けてあるヒルを、ニンニクを、
「うんじょーヒルんなみしぇーんなー（あなたはヒルもできますか）」と簡単に方言で言うわけさ。
「うん、ないするやー（うん、できるさ）」と言ってね、これを男であるから、
「ないする（できる）」といって、
「ヒルんなみしぇーんなー（ヒルもできますか）」と言って、これが勘違いで、あんさーに、
「ないんなー（できるんですか）」って、
「いー、ないする（はい、できるさ）」と。あんさーに、この奥さんは、昔はクチャといって方言で、ものかじゅみ（品物を保管）するクチャ（裏座）に。そのとこに行って、も、
「ヒルを出してきようねー」と言って行ったもんだから、このお母さんが先行ったもんだから、お客さんのお父さんは勘違いして、
「な、ないする（できるよ）」と言って、『もー行かんとならんさ、やー（もう行かないといけないなー）』と言って行ったもんだから、「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」と言うお母さんは、もう、ビックリして、
「とー、なーでーじなとーん（ああ、大変なことになってしまった）」ということで、クチャグワーからは帰って来て、
「うんじょー勘違ぇそーみしぇーんどー。くれー、うんじゅんかいうさぎーるヒルどぅやいびんどー。私がうんじゅ恋をして欲しいという意味ぁあいびらんどー。よー勘違ぇそーみしぇーくとぅ、（あなたは勘違いをなさっていますよ。これは、あなたに差し上げるニンニクなんですよ。私があなたに恋をして欲しいという意味ではありませんよ。なにか勘違いをしているみたいですね）」
「あんやら一、やんどーでーいゃん。私勘違ぇそーんいー（それなら、そうと言えばいいものを。私が勘違いしているというのか）」と言って。これからねー、大きい声が出たもんだから、
「人を恥かかして」。
そういう勘違いもあるから、モノはよく考えて話しなさいよという意味であるわけ。
昔はそういうこともあったという伝て話がありますねー。

㉘　ヒル好きか

比嘉フジエ（大正三年生）　山内

ニンニク、お客さん来たら、お茶出してから、
「ニンニクあがるかー」っていったら、あれ（ニンニク）ヒルというさーねー沖縄語でヒル。
「ヒルも、ヒルもなみしぇーんなー（ヒルも、ヒルもできますか）」と言ったらね、
「はい、できるよー」って。で、後ろのクチャグワー（裏座小）というかわかる。後ろの部屋、なにもかも置くところ。寝るところじゃなくて。あっちにこのヒルというもんは大きなカメに漬けてあったらしい

※1クチャグワー　裏座小ともいわれる。納戸と同じように使われ、お産の場所ともなった。家の北側に位置する。

よ。そして、取りに行ったら、お客さんも一緒に行ったらしいよ。

「ヒルもないみしぇーんなー（ヒルもできますか）」と言ったら、

「はい、できるよ」って言うから、一緒についていって。これも聞きパッペー（聞き違い）だー、ビックリして、

「あら、なんでこっちにお客さん来る」言うたら、

「あんた、ヒル、ヒルできるかって言うんじゃないか」って言ったらしいよー。

これ、やったか何したかわからんけど。聞き間違えてあるからさー、「ニンニクあるー」って言ったら、いいけどさー、昔の沖縄口だから、

「ヒルなみしぇーんなー（ヒルもできます）」と言ったら、

「はい、できるよ」って遠慮なく上がりこんでね。

㉙　ヒル好きか

瑞慶山良明（明治四十二年生）　宮川

昔よー、牛バクヨー。牛買う（ために）昔はもう、田舎どこ（にで）も行って牛を買って歩くから。

この牛バクヨーが、このある民家に行ってね、ウワーぬフル（豚小屋）に行って、豚を見たりしてからに、このお家に行って休んだらしい。言えば、家ぬふいじき（端）に腰を掛けて休んだらしい。この主の女がですねー、まお茶を出したからね女が、この女が、

「フィルんないびーがやー（ヒルもできますかねー）」と言うたから、

「うん、ないるする（うん、できるさ）」と言うて、

「そ、あん、ないるする。ヒルんないるする（そう、あ、できるさ、ヒルもできるさ）」と言ったから、この女がクチャグワー（裏座）に、ヒルガミからヒルを出しに行ったらしい。ここにこの人が追うて来てね、

「ぬーが、うんじょー（どうしたんですか、あなたは）」と言うたからねー、

「あい、ぬーいゃーヒルんないさにでぃら言うたさに（あれ、あなたはヒルもできますかと言ったでしょう）」と言うて。だから、もう分かるでしょうが。「昼もできるかなー」という意味よ。男が勘違いして。そういう話もあります。

㉚　ヒル好きか

知念善助（大正七年生）　古瀬

ウワー買やー（豚買い）がね、ある家を訪ねたらそこは女だちで、女主人で、お昼時間内だったわけでしょう。そこ行ったら、

「お茶もあがりなさい」んちすすめられて、お茶も熱いの出して、して、お茶うけといってニンニク漬けたもの。昔はニンニクは重宝だ。あれ出すつもりで、

「うんじょーヒルんなみしぇーみ（あなたはヒルもできますか）」と言ったもんだから、このウワー博労はね、早合点してね、

「あ、できるよー」と言ってね、これ（女主人）がクチャグワー（裏座）にそれ（ニンニク）出しに行ったら、

※1**牛バクヨー**　博労または家畜商のこと。
※2**フィル**　ニンニクのこと。
※3**クチャグワー**　裏座小ともいわれる。納戸と同じように使われ、お産の場所ともなった。家の北側に位置する。
※4**ヒルガミ**　ニンニクをつけてあるカメ。
※5**なみしぇーみ**　「召し上がれますか」という意味の問う言葉。
※6**ウワー博労**　豚など家畜の売買をする者。

すぐ、後からついていたと。そして、「うんじょーぬーしー（あなたは何をしに来たのですか）」。

こういう話はあったよー。

㉛ ヒル好きか

山内盛福（大正二年生）南桃原

お客に来てね、行ったら、そこのヤモメ女ジュリぬ家（ヤー）のね。こちらのお茶うけに、よくラッキョウとかヒル（ニンニク）とか漬けてなにするねー。

よく沖縄でね、たとえ、男なら酒（サキ）「いやー酒（サキ）ないみ」というんだよ、「酒は飲めるか」というのに「ないみ」と言うさーねー。「食べれるか飲むか」と言うのは。食べれるのにも「いやーこれないみ」かー食べるんだよ。ちょっと変わったなもの（言い方）なんだ。

それと同じで、あの男の人旅の人だったかなにか知らんが、そうしたら、

「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」と言ったらね、それで、

「おー、私（わん）ねー大好きだ。そういうの大好きだ」と言ってね、で、裏座に漬物ガメに取りに行ったらついて来た。その一緒にまたその続き、ついて来た人と。ん、ん、その話。

おばさんが、

「ヒルんうさがみしぇーみ（ニンニクを召し上がりますか）」と言うことだったはずよね。ヒルと臭いでしょう、ニンニクはね、だから好き嫌いがあるか。そーったら、「大好きだ」というふうに言ったら、それ取りに行ったら、また相手はそれと勘違いしてついて来たとか、その話よ。

㉜ ヒル好きか

宣志政美（大正七年生）中の町

牛買いに行ったそうですよ。たいていこの「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」と言ったら、もう、人付き合いがよかった人じゃないかねー。「ヒル（ニンニク）食べますか」と言ったことが、この人はまた、「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」といったら、「ヒルもできるか」ということ聞いてビックリしたわけね。

ヒル（ニンニク）はもー戦前は、目の前見える所に置いてなかったさ。クチャ（裏座）といってあるわけさー。そっちにヒル取りにこの女の「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」と言ったら、（ニンニクを）取りに（裏座）に行ったら、この男も行きよったとかなんとか話だけど。部屋に行ったわけだろねー。それで、この男の人もついて行きよったという話だが。これはもー冗談話かなにかわからないよー。入って来る人にあげようと思って「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」。「ヒル（ニンニク）もあがりますか」と言うことなんだが。「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」ったから、この男が勘違いして、また、どうせよりに行ったんだろう。（女の方が）ヒル取りに行ったら、この男も「できる」

といってついているわけさー。

㉝ ヒル好きか

新屋ヨシ子（大正八年生）越来

商売人がこっちに来たら、お母さん、姉さんだったか、「うんじょーヒルんなみしぇーみ（あなたはヒルもできますか）」と言うと、お茶わきにお菓子はなかったさーねー。昔は、お菓子はないからお茶出して、「うんじょーヒルんなみしぇーみ（あなたはヒルもできますか）」と言ったからね、勘違いして。クチャグワー（裏座）[※1]に漬物は置いてあるから、漬物出しにクチャグワーに行ったから、この男は勘違いしてねー、いーまーち（追いかけて）クチャグワーに行ったから、ビックリしてね、このお姉さんかお母さんかこの女の方はビックリして、「なんで」と言ったから、「ぬーが、いゃーがるヒルんなみしぇーみというから（どうして、お前が昼もできますかというから）」。勘違いして、これは食べるヒル（にんにく）。

㉞ ヒル好きか

稲嶺盛美（明治四十三年生）山里

ある、おばさんのお家にこう訪ねて行ってね、「うんじょーヒルんなみしぇーみ（あなた、ヒルもできますか）」言うたらしい。「あぁ、じこーないるする（あぁ、そりゃあできるさ）」。そして、ヒルというのはクチャグワーに、クチャグワーいうたら、裏座敷の片隅の方にね、カーミ[※2]にヒル（ニンニク）を漬けてあるわけ。ラッチョーとかヒルはね。「うんじょーヒルんなみしぇーんなー（あなたヒルもできますか）」と言ちゃぐとう（言ったら）、「はぁ、じこーないさやー（はぁ、そりゃーできるさ）んち、後からちゃー追いし（後ろからずっとついて行って）。ヒル、カーミ（カメ）の前にちゃー追いし行ってだよ、もの笑なって。（ヒルをつけてあるカメの所にずっと追いかけて行ってだね、もの笑いになった。

㉟ ヒル好きか

山口栄順（大正七年生）泡瀬

ある部落[※3]に行ってね、お茶を出してきましたらね、今度はね「ヒルもなみしぇーみ」というのはでするね、ニンニクのことですよ。ニンニクには方言では「ヒル」と言っていましたからね。だから、これを、「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」と言ったらね、この男の人はね、頭が良かったでしょう「はい、ないんどー（はい、できますよ）」と「ヒルんないんどー（ヒルもできますよ）」と。そして女の人がこのニンニク取りにクチャ（裏座）といって奥の方にね行ったら、追いて行ってね、それで、むこうでやられたって。

このニンニク取りに行ったけれど、男の人はちゃーいーまーし（ずっと追いかけまわし）てね、「いゃーヒルんないみでぃ言たしぇー（あなたはヒルもでき

※**1クチャグワー**　裏座小ともいわれる。納戸と同じように使われお産の場所ともなった。家の北側に位置する。

※**2カーミ**　貯蔵を目的として作られた大型の甕類。その形は多種多様。

※**3部落**　沖縄では部落と言う言葉は、地縁血縁共同体や小さい「シマ」を意味する。

ますかと言ってたさー」と言ってね、それで、押さえられてやられたさ。
そういう話は聞いた、これ実際の話。

㊱　ヒル好きか

金城ハル（明治四十一年生）東桃原

商売人が来たので、
「はい、いらっしゃい」といったら、座っていたそうだ。そしたら、「ヒルもないみしぇーんなー（ヒルもできますか）」というのはね、ニンニクのことをね「ヒルんなみしぇーんなー」と言ったそうだ。そーたらね、「はい」と言ったそうだ。そうしたら（ニンニクを）裏に取りに行ったらついて来ていたって、その商売人が。これ（ニンニク）をあげるために言ったのに、このヒルを食べるかーと言ったわけだよー」と言っていたそうだよ。
恥かいているわけさー、男が。だからその女の人が言いようが悪かったんだよ。「漬物あるがね、ニンニクをつけてあるが上がりますか」（と言えばよかったのに）。

㊲　ヒル好きか

屋宜ハル（大正三年生）安慶田

男の方がよ、来たら、相手は女だったって。その男の方によ、
「うんじょーヒルんなみしぇーんなー」でいやーにクチャグヮーんかい行じゃれー（あなたはヒルもできますかと言って裏座に行くと、くぬ男の子は、「いー、ないるする（そりゃーできるさ）」と言ってクチャグヮーまでい追てい行じょーたんでいいちぬ話ー（裏座まで追いかけて行っていたという話）。これだけよー。

㊳　ヒル好きか

佐久田千代（大正七年生）室川

「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」これも勘違いしているわけさ。「うんじょーヒルんうさがいゆしみしぇーんなー（あなたはヒルも食べることができますか）」と、誰でも（ニンニクの）好き嫌いがいるさーねー。だから、この（ニンニク漬けを）出す人はこう言っているけど、相手はまた勘違いしてね、「ヒル（昼）も男と女と会えるか」という意味に（とられて）こんななっているわけさ、勘違いしておるわけ。
（男が）追って行ったら、（女の人はね）ヒルガーミ（ニンニクを漬けてあるカメ）に手を突っ込んでいたって。

㊴　ヒル好きか

島袋シズ（明治四十一年生）池原

［方言原話］
ヒルというのはニンニク。ニンニク漬けておいしいでしょう。食べるのおいしいけんど、臭いから嫌いな人もいるでしょう。だから、

「うんじょーヒルんないみしぇーなー。うさいがいんなー」でぃ言ちょーるちむえーやしが、「あ、ヒルんないんどー」と言ってねー、「二人寝よう」ということを反対考えてやっていたって。そういう意味もあったさー。

［共通語訳］

ヒルというのはニンニク。ニンニク漬けておいしいでしょう。食べるのおいしいけんど、臭いから嫌いな人もいるでしょう。だから、「あなたはヒルもできますか。召し上がりますか」と言う意味で聞いたんだが、「ああ、ヒルでもできるよう」と言ってねえ、「二人寝よう」という意味で受け取っていたそうだ。そういう意味にもとられたそうだ。

㊵　ヒル好きか

佐久本トヨ（明治三十九年生）泡瀬

ちょうど、おじーさんがや、これスケベーのおじーさんか知らないがよ、ひ。

例えば塩売いが行ったらよ、これ例え話か分からんよー。

「あなたはヒルできますか」と言ったら、お昼でしょう。「ヒルはできますか」と言って、「ヒルはじょーぐ（大好物。とても好きだよ）言うたらね、暗闇に連れていって、ヒル（ニンニク）と昼と間違ってよ。「ヒルもできますかー」と、また、それ関係の事と女と男との関係。

で、私の親戚なかいい、そのおじーさんがずーと塩売して、あそこに居たから、おじーさん、おじーさんがやった話だよ。「ヒルもできますか」と言ってね、クチャグワー（裏座）に連れて行って、暗闇に連れて行って、ヒル（昼、子どもを）作って。こっちに山の子、山の子と言って連れてきたのは「おー、いやー、いやー、いやーや、こんな事出来るもんか」と言って私怒られたんですよ。

しかしや、これはね、あることはあったはずだ。だからね、食べ物のヒル（ニンニク）と「ヒルはできますか」と言ったら、「昼の子ども作るのできるか」と言ったが、勘違いの。

しかし沢山こんなの作った人いるよ。うん、昔から。

㊶　ヒル好きか

比嘉弘（大正十一年生）山内

お客さんが来てね、そこのお母さんが、「ヒルんなみしぇーみ（ヒルもできますか）」と言ったら、「はい」と言ったんでしょうねー、確かに。それでね、その家のお母さんは、やっぱし奥の方に昔の裏座ってあったんですよねー、クチャ、クチャという。そこのほうに置いてあったんでしょうねー、確かにそのヒルを、漬物。そして、それ取りに行ったらね、「おいで」と言ったら、ま、勘違いして、後をおってたという話があるんですがね。

※1ヒル　ニンニクのこと。
※2じょーぐ　大好きの意。
※3クチャグワー　裏座のこと。主に二番座の裏。
※4山の子　私生児。

㊷　ヒル好きか

玉城シズ（明治三十八年生）久保田

女の人が、お客さんの男の人にお茶を出して、「ヒルんないみしぇーんなー（ヒルもできますか）」でぃちゃぐとぅ（と言ったら）、「はい、ないんどー（はい、できますよ）」でぃちゃくとぅ（答えた）。ヒル漬きてーぬカミ（ニンニクを漬けてあるカメ）は（家の）後ろにあったみたい。あっちにコソコソ取りに行ったから、この男がね（裏座に）眠りに行きよったって。

㊸　ヒル好きか

諸見里マツ（大正元年生）古謝

牛とか馬とか商売しよったさーねー。この商売の人が来てから、「ヒルんないみ（ヒルもできますか）」というのは、ヒル、ニンニク漬けてあるさーねー。「これ召し上がるかねー（昼もできる）」といったら、後ろの小屋にコソコソ来ていたって男の人が、

㊹　ヒル好きか

照屋準兵衛（明治四十年生）國田

男は商い人だったんでしょう。商いに来て、茶ぐゎーは出して、「うんじょーヒルんなみしぇーんなー（あなたはヒルもできますか）」と話たらね、この男は早合点してしまって。クチャグワー（裏座）にしか漬物昔は置いてないからね、カメに。それ入れ物持ってクチャに行ったらね、もう、すぐついて行きよったちゅー、その話もある。

㊺　ヒル好きか

西平マツ（明治三十四年生）久保田

おじさんがね女の家に来たわけよね。して、したら、用事しに来たら、この女の人がよ、「うんじょーや、ヒルんうさがいんなー（あなたはね、ヒルも食べますか）」んちゃぐとぅやる（と言ったらね）、「ヒロじょーぐとぅやる（ヒルは好物だよ）」んちよ、この女の人がよクチャグワー（裏座）にねヒル（ニンニク）取りに行ったらよー、この男もね、ついて来ていたって。「昼も出来る」いゅうて。

㊻　ヒル好きか

比嘉ツル（大正六年生）東桃原

ニンニク漬けてあったでしょう。だから、「兄さんはヒルもうさがみしぇーんなー」という言葉ですけどね、「ヒルもできるかー」と言うから、『出来る』と思ってこの男の子はクチャグワー（裏座）に入って行ったって、間違って、勘違い。このヒルに勘違いしているさ。

ヒルはニンニクでしょう。「ニンニクもできるかー」と女の人はこう言っているけど、聞いている男の人

は「ヒルもないみしぇーんなー（昼もできますか）」という、エッチだから。

㊼　ヒル好きか

内田清栄（大正十年生）山内

国頭にそういう、むこう独特の方言があるとか言うよねー。それを勘違いしてこういうかっこうになったんじゃないかなーと思うわけですね。国頭という話は聞いたんですねー。

「ヒルんないみしぇーみ（ヒルもできますか）」と。いわゆる「ヒル（ニンニク）漬けされたあれ、お上がりなりますかー」という意味らしんだが、旅人は勘違いしたという。

聞いたことあるんですよ。細かいところはよくわからんがね。

㊽　ヒル好きか

島袋カナ（明治四十一年生）比屋根

おばーさんが、

「ヒルんなみしぇーんなー（ヒルもできますか）」と言うたからよー、

「んーできるよー」と言って男はおばーさん追いかけて。ヒル出してきてあげるつもりであるんだが、男はまた「ヒルもできる」と言って、おばーさん追いかけて行ったそうです。

㊾　ヒル好きか

知念真章（明治四十二年生）胡屋

自分の恋人なんだ、昔の。うりがよ（その人がよ）、ラッキョー出したんだよ。それが、自分の昔の恋人なんだから、

「ヒルんないみ（ヒルもできますか）」と言ったら、クチャグワー（裏座）について行ったという話もあるんだよな。

ニンニク（のヒル）とヒル（昼）の勘違いした。

Ⅵ　艶笑譚

〔一〕営みの始まり

（1）年に何回

①　年に何回

宮里秀栄（明治四十一年生）知花

〔方言原話〕

あぬよー、昔、御神んかいや、「牛ぇ幾月、馬ぁ一年」でぃちぃ、うぬ吟味言いわたしぬあてーぎさんてー。あんさくとぅ、馬ぬ一年なたくとぅよー、なーくさみち、

「一年、一年なーにる、私ねーしみーるぃ」んでぃ言に、あんさーにくさみちゃーに暴りてーるふーじてー。あんさーにくさみちゃーに暴りてーるふーじてー。あんさくとぅ、丁度、ばんじ暴りやーに、ひんぎーによー、

「人間のーさい、人間のーさい」んち追てぃ行じぇーるふーじ。あんさくとぅ、

「人間のーなー、いちやてぃんしむさ、いちやてぃんしむさ」んでぃ言に、あんさーに、いちやてぃんしむんでぃ。

年に何回やしぇーやー。うりが、馬ぁ一年なとーるばーてー。一年でぃる一回んないるばーやいさみやー。あんさくとぅ、丁度暴りてーるばーてー、な、馬ぬくさみちゃーに。あんさくとぅ、

「人間のーさい、人間のーさい」し、御神ぬ追てぃ行じゃくとぅ、

「いちやてぃんしむさなー、いちやてぃんしむさ」んち。あんさーに、いちやてぃんしむんでぃ。

〔共通語訳〕

あのね、昔、神様がね、「牛は幾月（に何回）、馬は一年（に何回）」と、（交尾の回数の）吟味言い渡しがあったらしいんだね。すると、馬は一年に（一回）になったからね、もう怒って、

「一年、一年に（一回）だけしか私はさせないのか」と言って、そして怒って暴れたようだね。そうやって、丁度、（馬が）暴れ（神様が）逃げてまわっている時によ、

「人間はどうしますか、人間は」と（神様のあとを）追って行ったようだ。すると、

「人間はもういつでもいい、いつでもいいさ」と言われたので、それで（人間は）いつでもいいことになったそうだ。

年に何回でしょう。これが、馬は一年に（一回）になっているわけさ、一年で一回だけ出来るわけさあね。そうしたら、まさに（馬が）暴れている時に、馬が怒って。そんな時に、

「人間はどうしますか、人間は」と、神様を追って行ったら、

「いつでもいいよ、もう、いつでもいいよ」と言われた。それで、（人間は）いつでもいいことになったそうだ。

② 年に何回

山内盛福（大正二年生）南桃原

神様、神様が（十二支の動物に恋の回数を決めていた）うん、最後に馬が行ったらね、回数減らされてね、

「一年に一回や一回、一回ぐらいだ」と（神様が）言って、（馬は）、

「それじゃー」と言って怒って神様蹴ってね。その後に人間が行って（聞くと）、

「も、勝手にしなさい」と言ったって。それで人間は勝手に自分らで（好きな時にやるようになった）。

[二] もの知らず

(1) 女知らずの夫

① カンダバー破り

替久原ウシ（大正二年生）嘉間良

南風原外間といって、あっちの跡継ぎする人ね、一升飯が食べきれなかったら、あっちの跡継ぎはできなかったって。してからに別から嫁さんもらってきて、その人かねー、その人がかねー。嫁さんもらったから、何もわからない、主人はもう。だったらその一嫁さんが、

「下、下」してやったら、

「こんな、こんな下、下、下」してやったら、

「うま、カーミぬいちょーんどー。うま、カーミどうやしが（そこにカメが置かれているよ。そこにカメがあるが）んでい言ったんでい。そんなことも言いよったって。なにかねー、これは、それは外間の話ではなかったはず。

嫁さんをもらっても、もー（夫婦の営みが）なんにも分からないから。二人とも畑行ってねー、畑行ったら、もー、ウェーキ（金持ち）は欲しいさーねー。だけどもう主人はこんなさーね。『これもー、どー、どーするかねー』といって（嫁さんは）考えていたはず。だったら、この嫁さんが畑行って考えてやって。そーして、ウージ畑（きび畑）あるさーね。ウージ畑にその主人も連れて行ってやったら。何かねーカンダバーといよったかねー、なにかねー（自分のあっちを）あれでおさえてからに、してから、その男の人に、

「あんたはとー、これ突き破れる。突き破ってごらん」

といって、そんな話があったって聞いたことはある。

なんだかその後から、もー味覚てからに、

「またも、行こうか、行こうか」って言よったって。その話はあったけれど。

カンダバーでおさえて、

「あんたこれ突き破れるか、これで突き破れるか」。それもずっと昔の話であるはずよ。

（南風原外間の跡継ぎする人は）一升飯食べきれなかったら、あっちの跡継ぎはできないっていう、そういう話もあったよ。そんな話も。

※1南風原外間　勝連町南風原の屋号。

※2カンダバー　さつまいもの葉。

※3とー　人を誘い、人をせきたてる時に発する言葉。

② 愚かな夫（女知らず）

比嘉フジエ（大正三年生）山内

嫁に行ってから、この御主人が女のことわからなくて、女の嫁さんが、こんな寄ゃー寄やーし（寄っ）ていったらしいよ。そしたらあれだったって。この主人は、

「こんなに寄ってくるなひゃー。カーミー（カメ）があるよー」って言よったってねー。

「あんまり寄りすぎたらあっちにカーミがあるからあんまり寄って来るな」って言われたって。『ああ、もーこの主人は、もー女のあれもわからんから』って別れたらしいよ。長いこと独身で亡くなったんじゃない。

③ 愚かな夫（女知らず）

山内盛福（大正二年生）南城原

妻は結婚して、ま、（夜の営みのことは）知っておるんですけども、夫は年下だったのか、また、そういう事知らなかった、なにか知らんが。

奥さんの通りでやって、このどーしすー期待して晩一緒に寝るけれども、それ全然その気配がない。そんで、女が男に寄り添っていくが、男はどんどん逃げていく。二人は裏座で寝ていたので男はとうとうカメ（ツボ）の所まで追い詰められ、女が一気に抱きつくとカメに抱きついてしまった。

④ 愚かな夫（馬から習う）

屋宜ハル（大正三年生）安慶田

［方言原話］

馬よーチルバチー見しやーに習ちぇーたんとぅか、ぬーとぅかでぃ言しぇー聞ちゃんどー。「人間ぬんぐとぅーやん」でぃいち、えーりん習ちぇーるばーよ。首里の話だはずよ。

［共通語訳］

馬の交尾するのを見せて（夫婦の営みを）教えたとか、なんとかというのを聞いたよ。「人間も同じだ」といって、たぶん教えているわけさ。首里での話であったはずよ。

⑤ 愚かな夫（夜の仕事）

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

あるよく働く夫婦に、

「お前達は昼間働くことばっかりしないで夜の仕事もしなさい」と言った。すると夜、田の畦に泥を一生懸命たたきつけていた。

夜の仕事とは夜の営みのことだと教えるとその通りにしたという。

⑥　愚かな夫（かゆの穴）

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

ある男が嫁をもらう。子どもが産まれて妻の性器が広くなったといって心配している。

お婆さんがご飯（おかゆ）を持って来て、ご飯にお箸を突っ込み、

「オハシを抜くと元通りになるでしょう。妻の道具も同じで元通りになるから心配するな」という。

（2）男知らずの女

①　愚かな嫁

山内盛福（大正二年生）南風原

首里であったとかなんとかね、その話はだったな。全くその通りです。

で、（武士の娘は夜の営みを）知らないもんだからね、（二人並んで寝ていると、女の手が男のあそこに何気なくいってしまい触っていると）もう夫が、いわゆる自分のものね、勃起てなにしておって、初めは小さくて、大きくなって、

「アイ、もー（ああ、どうしよう）」びっくりして（娘は実家へ）行ってね、

「も、今はね、も、牛ほどの大きさなっておるよー」と言ってね、お母さん所行っていったってね。わからなくてそんなことも。そんな話はあったとか。

そのようなね営みはしなかったって。これは嫁さんが知らなかった、無知だったという話。

もう一つのあれは旦那さんがだねー。

②　愚かな嫁

佐久田千代（大正七年生）室川

おかしいよや、とっても。やがて、これ（ヒル好きかの話）に似ているけどね。やっぱし、これはまた女がわからんわけさー。

あのね、ぬーとうんでいがらーし（なにかの拍子にだと思うが）、まじゅん寝（ニン）とーしが、やっぱしドキドキして寝られんさーね。だからなんとかして、あの下の方に手を、どんなにしてか、わざっとじゃないけど、触って、触ったからね、何か大きくなるのがあったって。わざっとでないよ、これは。だからね（女は）逃げてきているさ、お家に。

「ぬーが、ひんぎていちゃる（どうして逃げて来たの）」んち、こう言うさーねー。そーったらね、

「こんなこんなして、もー、今、今時分お家に入らんくらい大きくなっているはず」と言よったって。おかしいでしょう。

③　足りない骨

宮里秀栄（明治四十一年生）知花

［方言原話］

あのねー、ある所でよー洗骨（しーしんぬしゃ）そーるばーてー。あんさくとうー、

「なー（ぬ）ちぬ骨（ぬ）やー」し泣ちゅたんでぃ、夜、妻（つぃ）ぬてー、

「なー（ぬ）ちぬ骨やー」し泣ちゅたんでぃ。

※1 **洗骨**　ある期間経過した遺体を取り出し、洗い清めて骨壺に納骨すること。

※2 **なー（ぬ）ちぬ骨**　男性の性器のこと。

うっさる私間ちょーっさー。

［共通語訳］
あのね、ある所で洗骨しているわけさ。そうしたら、「もう一つの骨はどうしたのかねえ」と泣いていたそうだ、夜、妻がね、「もう一つの骨はどうしたのかねえ」と泣いていたそうだ。
それだけ私は聞いているさあ。

（3）うぶな娘

①　三人娘の知恵比べ

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

三人の娘が話をしていた。一番何も分からない者（娘）が、男の人の前についているもの（性器）は「肉だ」と言った。二番目の娘が「いや、グスミチ（軟骨）だ」といった。三番目の娘が「いや、骨だ」という。さわってみると「なるほど」と納得したと言う。

（4）子の勘違い

①　ハブどーい

宮里秀栄（明治四十一年生）知花

［方言原話］
うれーよー、わらびぬ上から夜、サナジぇー脱じゃーに、スンチャースンチャーし行じゃくとう、「ハブどーい」しちわらばーがあびーたんでいる。

［共通語訳］
それはだね、（お父さんが）子供の上から夜、フンドシを脱いで、（お母さんのところへ忍んでいこうとするときに）引きずっていったから、「ハブだー」と子供が叫んでいたって。

②　子供の勘違い

伊佐安弘（明治四十一年生）山里

白川の方でね、ある家の子どもが、お父さんが母さんの前にフンドシを脱いで行ったわけさ。したら、この子どもは目覚ましてね、「アキサミヨーなー、サナジぬ落ていとーんどー（ああ、どうしよう、フンドシが落ちているよー）」してしゃべってね、ビックリさせたことが事実あるんだよ。これほんとの話。

※1ハブ　沖縄に生息する陸生毒蛇のうちのハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三種の総称。日本の毒ヘビ中、毒性が非常に強く攻撃的で危険。体長は大きいものだと二メートル前後もある。
※2白川　沖縄市の字。市の北寄りに位置する。旧越来村。現在は米軍用地として摂取されている。
※3アキサミヨー　驚きの時に発する言葉。

(5) スケベな聞き違い

① 棒貸せ

上根ウサ（明治三十一年生）宮里

［方言原話］

昔ぬ言葉なー敬てぃんうーや。「うんじゅ」んでぃん言い、またくりかんい、「うんじゅぬ御茶碗」ぬんでぃん言いや。また道具んかいん鍬んかいぬ、「うんじゅぬ鍬」んでぃ言い。また担みーる棒、「うんじゅぬ棒」んでぃ言いや。

あんさー、隣いぬ人ぬうまんかい来に、「アンマー、今日私んにんかい、うんじゅぬ御ボー貸らしみそーり」んでぃ言ちゃくとぅ、「いゃー、私ホー借らんでいるいぇーみひゃー」でぃあーなかい、追ぎらっていやらちゃんでぃ。

あんさー、うぬお母や、敬っていうる言葉分からんなやーなかい、お母がいぇふ考やてぃ、首里ぬアンマーが。

［共通語訳］

昔の言葉は敬って使うしね。「あなたさま」とも言うし、またこれには、「あなたさまの御茶碗」とも言うし。また道具にも、鍬にも、「あなたさまのお鍬」とも言う。また担ぐ棒にも、「あなたさまの御棒」と言うしね。

そして、隣の人がここに来て、「おばさん、今日私にあなたさまの御棒を貸して下さい」と言ったから、「お前は、私のホーを借して言うのですか」と言って追っ払ってやったそうだ。

それは、このおばさんは、敬っている言葉とはしらなかったので、おばさんが変な考え方をして、首里のアンマーが（勘違いしたという話）。

② 棒貸せ

喜屋武英正（明治三十年生）久保田

［方言原話］

これは私の部落の人だがね、首里豚買いに行って、豚買てぃから、「御ボー貸らしくみそーれー」んちゃぐとぅ、ぬらーったんでぃ。

「いゃーぬーでぃー言ん」し、「ホー貸らし、御ボー貸らしんでぃる言んー」んち。どぅーくる話やたるばーてー、うぬ人ー。あん言んでぃ。うやめー言葉すんでぃ、「うんじゅなー御ボー」んちゃぐとぅ、「棒」でー言んたるふーじ、「御ボー貸らしみそーれー、さんじゅごー口し、よー、ぬーらーていよー」でぃうぬ人言たんよー。私たー島人よどー、うれー。本当のことこれ。

「おばーさん、御ボー貸らちきぃみそーれー」、しら、ごー口さん。「いゃー、ぬーんでぃー言んでぃーち、ぬらーったんどーやー」んち。御ボーんちぇーんちよー。あれー私たー島ん人よ。

※1 御ボー　「ボー」は性器のこと。借りることを「カイン」といい、「敬いすぎて「御」をつけたばかりに「ウカイ」となり「交接したい」という意味となり勘違いされた。

※2 ホー　女性の性器。

※3 首里　王府の置かれていた郷。文化・経済の中心。現那覇市首里町。

※4 アンマー　母親。お母さんのこと。平民の言葉。ここでは、おばさんとした。

※5 部落　シマ、集落を意味する。

［共通語訳］

　これは私の村の人だがね、首里に豚を買いに行って、豚を買ってから、（豚を担ぐ棒を借りようとある家をたずね）、

「御棒を貸して下さいませんか」と言ったら怒られたそうだ。

「お前は何と言うのか」と。

「ホー貸して、御ボー貸してと言うのか」と。自分のことを話していたわけね、この人は。あのように言われたそうだ。敬う言葉を使おうと、「あなた方の御ボー」と言ったら、「棒」とは言わないで「御ボー」を貸して下さいとお願いしたら、文句を言われ、怒られた」とその人は話していたよ。私達の村の人だよ、この人は。本当のことこれ。

「おばーさん、御ボー貸して下さい」、たいそう文句を言われた。

「お前、何と言ったかと、怒られたよ」と。御ボーと言ったためにさ。その人は私達の村の人よ。

③　タチュンナー？

比嘉フジエ（大正三年生）山内

（草刈に行った時、女の人がカマを忘れてしまった。カマを二つ持っているおじーさんが、

「あんた、カマなかったら、うちのカマもろうかー」

と聞いたら、（女の人が）、

「うん。タチュンナー（立ちますか）」って言いよったって、もらう人が。「よう切れるのー」と言ったらいいけど、「タチュンナー（立つか）」と言ったらね、

「うん、時々は立つけど、毎日は立たんよー」と言ったよー」って、この言われたおじーが話するさーねー。も、大笑いよ、こんな言って。「時々立つけど、毎日は立たんさー」って、これ言ったら、言ったら、「またこんなもんに、言うからねー」って、おばー言いよったって。「切りーんなー」と言ったら、「切れるねー」って言うのと同じだから。

「なんであんたは切れるねーと言わんで、タチュンナーと言うからさー。まるけーてぃ（時々）は」。年寄りだから、

「まるけーていは立つけど、時々は立つけど、毎日は立たんよー」って。

「またこんなもんにひきまーしていくからねー」って言ったらしいよー、おばーが。

「なんで、あんたは言いようが違っているんじゃないかー。切れるかー」って言ったら、切れるよー」って言うけど、タチュンナーって言うから、もー、時々立つ。時々は立つよー」って言ったからもー、大笑いよーって、このおじー笑いよったさー。

　いつも男の人が言うさーねー、

「女、真昼間からできますか」って。おばーたー、

「もう少し休んでからやろう、やろう」。

※1タチュンナー　刃物などがよく切れること。

④ 形見の帯

宮里秀栄（明治四十一年生）知花

［方言原話］

あぬよー、夫ぬけーぬ亡ちょーるばーてー、妻ぬ生ちちゃーに、夫けー亡ちょーるばー。あんさーに立派な帯持ちょーたるばー。あんさーに、夫ぬ、『うりんしぇーやー』んでぃ思てぃそーしが、「うれーすな、すな」し止みてーたるばー。いー御祝儀なかい出じゃすどうたみねー、うぬ帯汚ちぇーならんしぇーやー。あんすくとう、夫けー亡ちゃるばー。けー亡ちゃくとう、

「なー一回のーしみとーかんたるやー」し泣ちゅたんでいるばーてー。うぬ泣ちゅしが、「なー一回のーしみとーかんたるやー」とう、うぬ、はっちゃかとーるばーてー。あんくとう帯のことだが、人ぬ聞ちぇー、「なー一回のーしみとーかんたるやー」でぃしぇー……。

［共通語訳］

あのね、夫が亡くなっているわけさあ、妻は生きて、夫は亡くなっているわけ。それで（夫は生前）立派な帯を持っていたわけ。それで、夫は、『立派な帯をしめたい』と思っていたらしいが、「これは、ダメダメ」と（妻が）帯をしめさせなかったそうだ。お祝い事があった時にしめていくには、この帯は汚したらいけないさあねえ。すると、夫は亡くなってしまったわけ。亡くなったから、

「もう一回はさせとけばよかったねえ」と泣いていたそうだ。この泣いているのが「もう一回はさせとけばよかったねえ」というのは（形見になった帯をもう一度させておけばよかったといっているが）、別のことと勘違いされた。それは帯のことだが他の人が聞いたら「もう一回はさせとけばよかったねえ」というのは……。

⑤ プッシ、プッシ

宮里秀栄（明治四十一年生）知花

［方言原話］

あぬよー、ライカムうていやたんでいる話てー。ちょーどう、女ん三人車から降りやーに、あんさーにニンシェーターまた三人うてーるふーじ。あんさくとう、

「来わ、来わー」さーにあびやーによー、「プッシ、プッシ」でぃたんでぃ。あんさくとう、『ないんんてーやー、くったーや』んでぃいぃーに、あんさーに、

「でぃー、まじ、行じんだ」でぃやーに行じぇーるふーじ。あんさくとう車押すらさったんでぃ。

［共通語訳］

あのね、ライカムであったという話さー。ちょうど（アメリカ人の）女も三人車から降りて、そうして（沖縄の）青年達もまた三人いたようだ。すると（アメリカの女性が）、

※1**なー一回のー**　「男と女の営みをもう一回させておけばよかった」という意味に取られてしまった。

※2**ライカム**　沖縄本島中部にある沖縄市の字名。

「おいで、おいで」と呼んで、「押して、押して」と言ったそうだ。すると、(青年達は)『出来るかもしれない、この女たちと』思って、そして、「さあ、ます、行ってみようか」と言って行ってみたようだ。すると、車を押すように言われたそうだ。

⑥　ヒー貸して

上原ツル（大正七年生）　東桃原

山原という所はさ「ヒー貸して」という言葉は「女の下」（の意味）って。

[三]　並外れ

(一)　中城百合の花

①　中城百合の花

宮城次郎（大正三年生）　園田

[方言原話]

チンチンにヤクボーち出じやーにて、また四つに割って病気取って。

この話から、ジュリ呼びーが行じゃーに、な、くりやか上等ねーんばーてー。かんし、はたかていどううくとう。これが話があったよ。

うぬ、ジュリアンマーんでいしん昔ぇーうーたんでい。ジュリアンマーんでいしぇーくぬ使とーる親分やるばーてー、ジュリアンマー。子ぬむんどうむるさるはじやしが、うれーちかなとーしやんむんぬびかーどうさるはじやしが、くぬアンマーがさせたわけ。「ダンジュガカマドゥー」はまた、どうくすごいから。おもしろくて。この話があったよ。中城百合の花。

病気、チンチンに出来、かんし手術やたんよ、四つに。はたかていどうくとう。

この話ぁーあんまり、ぬーやら私が信用さんさ。

[共通語訳]

チンチンにヤクボーが出たので、四つに割って病気を治した。

この話から(病気が治ったので)、遊郭に遊びに行ったら、この人のモノより上等なものはないわけさ。こう、広がっているから。こんな話があったよ。

その、ジュリアンマーというのが昔はいたそうだ。ジュリアンマーというのは、このジュリを使っている所の親分なわけなんだよ、ジュリアンマー。子(ジュリのお客さん)とみんな関わったと思うんだが、それは、自分が抱えているジュリのお客さんとだけ関わったかと思うんだが、このアンマーがさせたわけ。「なるほどカマドゥー」(という言葉は)また、あまりにもすごいから、おもしろくて。この話があったよ。中城百合の花。

病気、チンチンに出来(たので)こう手術したら四つに。広がっているわけだから。

この話もあったが、「どうかなー」と思うわけさ。

※1ヒー　「火」のことを「ヒー」というが、山原では女の大切なところを「ヒー」というので、勘違いされる。

※2ヤクボー　病気。この病気になった場合は、切ってウミを出す手術をした。よってその後が百合の花みたいに裂け、大きかったことから、「中城百合の花」と呼ばれるようになった。

※3ジュリ呼びーが　女郎遊びをする者。

※4ジュリアンマー　遊女の抱え親。

※5ダンジュガカマドゥー　「だんじゅが」は「なるほど」とか、「いかにも」という意味がある。カマドゥーは人の名か。

これあんまり、なにか私は信用しないさ。

② 中城百合の花

喜屋武英正（明治三十年生） 久保田

[方言原話]

下に病気さーに四ちんかい割りていさくとう、うぬ、立ちーねーかんしふぁたかいたんでぃ、うぬはねー。手術さっとーくとう、病気さーに。

あんさーに親アンマーが、「ぬーんちうんぐとうすがやー」、どうーぬジュリん子ぬさくとう、あとージュリアンマーが、『私が寝んていとぅらりんしぇー』そーるぽーてー。

「ぬーんちうぬ子あんすがやー」。ちゃーうりがどうーにーすたんでぃ、うぬ女うまくさきさーくぬひゃー四ちんかいさかち、あん、はたかていさくとうやー、女なー。

ジュリアンマー『ぬーんち』ゆくみーじゅんしぇー。ありすんでぃいやーに、「今日や私が寝んていとぅらりんさー」でぃ。あんしさくとう『だんじゅがカマドゥーが』したんでぃ。「あんしるうむさーにしぇーる」でぃ。

[共通語訳]

下に病気して四つに割れてしまったので、その、立つとこうして広がったようだ、その男根は。手術されているから、病気して。

それで、親アンマーが、「どうしてそうするのかねえ」、自分のジュリがそう（様子が変）なので、しまいにはジュリアンマーが、『私が寝てみよう』と思ったわけね。「どうしてその子は様子が変なのかねえ」。いつもそのジュリがうめいていたそうだ、その女は。ここがこのように四つにさいて、広がっているので、女はもう。

ジュリアンマー「どうしてか』と不思議に思っているさあ。確かめようと「今日は私が寝てみることにしよう」と。そうしたら『なるほどカマドゥーがうめいたのがわかる』と言ってたそうだ。「それで、喜んでしてたんだね」と。

③ 中城百合の花

比嘉良信（大正五年生） 中の町

[方言原話]

うぬ女いーむのーあたてーんだんであてーる。道具んでいしぇーむる道とーしぇーやー。あんすくとう、くれーたぶん、うぬふーじーあたてーんだんなやーに、初めていあたていさくとう、『やっぱり中城な一番いー所』でいやー、中城からめんしぇーしぇー、くれ、絶対ぬがちぇーならんというのが、うぬ人ぬ考方やたるはじどー。

百合ぬ花というのは、中入ていこうはたかるということですよ、だから馬みたいに。馬はあれはものすごいよー、あれー洗面器ぬうひ広がらんがやー。いや、ほんとよ。あれ、入るまではそんな大きくないんだがね、中いってこう広がるんだよ、あれは。

※1道具　男性の性器のことをいっている。
※2中城　沖縄本島中部に位置する。

だからね、あれで、はたがるもんだから、馬はすぐ面ぜんと向ちょーしぇーならんというのはそれなんだよ。入らなくなるんだよ。広がってしまって先が。あんすくとう。うんにんねー人んん喰いくとう。だから、馬は種付けする時には、暗かだからね、そこで合流する。ミー馬あまから中んかいありするばーてー。これで、やりよったと。

放牧しているのはもー毎日のことだからどうにもならんけどね。うんぐとうーやたんでぃ。

［共通語訳］

その女（ジュリ）はいいモノに当ったことがなかったんだはず。道具というのはみんな異なっているでしょう。だから、これ（ジュリ）はたぶん、このような方に当ったことがなく、初めて出会ったので、『やっぱり中城はもう一番いい所』といって、中城からいらっしゃる方は絶対に逃がしたらいけないというのが、その（ジュリ）の方の思いだったんだろう。

百合の花というのは、中に入るとこう広がるということですよ、だから馬みたい。馬はあれはものすごいよう。あれは洗面器の大きさぐらい広がらないかねえ。いや、ほんとよ。あれ入るまではそんな大きくないんだがね、中いってこう広がるんだよ、馬は。だからね、中で広がるもんだから、馬は（種付けするとき）すぐ、面前と向かわせてたらいけないというのはそれなんだよ、（広がって）入らなくなるから。広がってしまって先が。だから、そのときには、すぐ人間にもかみつくので、だから馬は種付けするときには、暗いところで、そこで合流する。雌馬はあそこから中に入れるわけさ。これでやりよったと。

放牧してるのは、もう毎日のことだからどうにもならんけどね。そうだったそうだ。

［四］動物との交わり

（1）妻と犬の浮気

①　犬と妻の裁判

宇栄原カマド（明治三十九年生）越来

［方言原話］

夫は警察だけどね、犬を養いておったらしいよ、この家は。だから、夫が仕事から帰ってお家に行くでしょう。な一、「ワウ、ワウ、ワウ」いうてな、な一夫ぬ足かんでからよー、わぶって中に入りなかったって、ね、犬がどー。さくとう、『くぬ犬おー珍しいやっさー。ぬーがやー、私のーや、うまぬ主どうやるむんぬ、私が行けーあんし私わぶいるやー』んでいちよー、ある人んかいむる話しぇーぎさん。うみちっとうなーある人んかい話し、さくとうや、「あんしぇーいやーや不思議やっさー。いやー妻ぬ腹調ぴてい見ちみりよー」でい言たんでい。さくとう、ガマクやガマコーむる犬ぬ爪形がこんなしてあったって。

これ内地にね、所帯持っている時の話よー。側に

※1ジュリ　那覇の遊廓の遊女のこと。

いったよー、これ見たよー。この男も分かりよったよー、交番所よ。

裁判したって、裁判したからね、

「こんな者置いたらいかないから、犬もこの嫁もね殺しなさい」って殺した。殺したよ、見ているから分かるよー。

［共通語訳］

夫は警察だけどね、犬を養っておったらしいよ、この家は。だから、夫が仕事から帰ってお家に行くでしょう。な、「ワウ、ワウ、ワウ」いうてな、も、夫の足かんでからよう、吠えまくって中に入れなかったって、ね、犬がよう。したら、『この犬は珍しいなあ。どうしてか、私はここの主なのに、私が行けば、あんなに吠えるのかねえ』と、ある人にすべてを話したようだ。思い切ってある人に話をするとね、「それはお前不思議だね。お前の妻の腹調べて見て下さい」と言ったそうだ。すると腰に、腰には犬の爪形がこうあったそうだ。

これ内地にね、所帯持っている時の話よう。側に行って、これ見たよう。この男も知っているよ。交番所よ。

裁判したって、裁判したからね、

「こんな者置いたらいかないから、犬もこの嫁もね殺しなさい」って殺した。殺したよ、見ているから分かるよ。

②　犬と女の裁判

桑江朝盛（明治四十五年生）中の町

あれは裁判に行って、裁判に行っての話よ、あれは。

あれはね、犬と、犬と自分の家内がね、恋しておるという。で、恋しておるという裁判かけて、じゃあ裁判官の前行って、この、裁判はもう明かされた。「じゃあ、家内のね、背中を見てみなさい。犬の爪型があるでしょう」と言ったらしいんだよ、裁判官がね。じゃあ、この女が言う分にね、

「じゃあ、裁判官の女も、こう、犬とやっておりますよう」と言うて、あんた言われてね。言われて、そってやったら、裁判官の女も（同じだということを）、自分わかっておったんだよ、裁判官はね。こういうといって。こういう意味よ。

で、裁判にかけられたらね、自分はもうバレてしまった。これ、わかる裁判官はね、あの人も妻もね犬と一緒におるはずと、妻。そして調べたら、案外そうであったという話よ、あれは。

③　犬と女

西平マツ（明治三十四年生）久保田

犬はよ、時分が来たらよ、この女の所に来るわけよ。男がね、仕事に行くんでしょう、時間かけてわかるわけよ、この犬は。犬がよ、この女と寝るわけよ。ナイチャー（本土の人）よくうるよー。それでよー、もう、この犬がなー、一生懸命二階に上がって行くて、や、この夫の仕事に行ったら、犬が。一生懸命

※1ナイチャー　沖縄では日本本州のことをナイチ、ナイチの人をナイチャーとか、ヤマトゥンチューとよぶ。

上がって行くからね、もう近所の人にも、もう、ウワサ聞いているよね。それで、夫はよ『こんなに犬がね』。弁当持って行ってよ、この夫は、仕事に行かん。二階からね上がって見たって。現場うすてよ（おさえて）これ犬も殺してね、妻も殺したんでしょう。

④　犬と女

島田敏（明治四十二年生）山内

自分の犬とね、抜けないで病院に連れて行ったことを話。夜の皆友達が話してるのそれ本当だったよ。自分の養っている犬とね、男がいないから、自分の旦那さ。犬も道具と言ってたよ。いーねー犬の道具よ、カラマチどうすぐとうよーいー（からまるそうだからね）、中に入れたらカラ（からまる）。同じ犬でも長いこと離れないんだってよー、同じ犬でも。だけど、人間としてはもう、大変さーもー、あんた。女の道具と男の道具と中に入れたらね、この中の（抜けなくなったので）、病院行ったんでい、犬も連れて。それを男いつもそんな話していたよー。那覇にあったっんち、よー。うぬ話すたんどー。あんさくとう、でーじどー、すぐ。（その話していたよ。だから、大変だよ、もう）。

（2）娘と馬

①　馬と女

普久原ウシ（大正二年生）嘉間良

人間、馬とその女の人は（関係を持った）。馬は重いさーね、だから馬小屋行って天井に縄掛けて、そして（馬の）お腹（縄）引っ張って、あっちにやって、そうしてやりよったって。

そして、女の人（がそのようなことをしていることを）分かってから、その縄を旦那さんであるか、兄弟であるかはっきり分からないけどさ、縄を切って。だったら、そのまま、もう女の人死んでしまったはずよ。その縄を切ってしまったら押しつぶすさーねー。

そうしてからに、もー死んだからね、その女もちゃんと埋めて。その馬も殺したのかねー、どんなかねー。あの桑の木があるさーねー、そこのところに埋めたかねー。そしてその桑の葉は蚕養うさーね。あの蚕の顔は馬に似ていると言よった。馬の顔みたいにであると言よった。

［五］艶笑譚あれこれ

①　春夏秋冬の営み

山内盛福（大正二年生）南桃原

「春三夏六八、秋一無冬」という言葉わかる。これねー、新里の校長をしておる人、その人が言ったよね。「だいたいね、こういう営みはね、こうこうしてやるの本当だ、こうなんだそうだー」と、「こういう言葉があるよー」と。意味わかるでしょう。「春三夏六八」ね、これね、三日ごしに春。春は。夏はね六日ごしに暑いもんだから疲れるよ。秋はね、週一。一日ごしでもいいねーと。冬は別に暑くもないから無冬、無し毎日と。ナシという意味じゃない。つまり、隔日じゃーナシに、毎日という意味です、無冬。無冬はね夫婦寒いから、くっついているわけでしょう。「無冬はやらないという意味じゃない。この休む事は無いと言う意味で毎日という、そういう言葉だよー」と言って。

②　馬と娘

比嘉良信（大正五年生）中の町

［方言原話］

若い娘がてー、昔ー水んかみていどうあっちゅしぇーやー、桶んかい。あんすくとぅ、丁度この女ぬ水んかみていかんし、ヨイ、ヨイしちゃーぎーに、馬ぬばんじそーたんでい。あんさぐとぅ、うりがクージャー、クージャーすし見じゃーにや、うぬ女あわてぃやーに、あとーふちかちばさい、ちちんちねーらんよー。すぐえーぬぎてぃずぶぬれになっていよー。

［共通語訳］

若い娘がね、昔は水も頭にのせて運ぶあねえ、桶に。すると、ちょうど、この女が水を頭にのせてこう、ヨイヨイと歩いていたら、馬が交尾の最中だったそうだ。すると、馬がどんどんやるのを見てね、この女は興奮して、しまいには手に力が入り桶の底がぬけてしまった。たちまち水をかぶってしまい、ずぶぬれになってしまった。

③　女好きのタンメー

佐久本トヨ（明治三十九年生）泡瀬

一人のおじーさんはや、これ他島おじーさんだったそうだがね。

臨終の時によ、なかなか死なれないって、なかなか。「なんの気がかいですかおじーさん」言ゅーたらね、「私はね、天国行ったら女がいないからこれが心配よー」と言うたらね。

「あーあーあー、おじーさん、天国行ったらね、あれや、あれや、これや、これやもーたくさんバーキ、ソーキに入らないくらいねたくさんいるよー」言ゅうたらね。

「ああー、そうかねー本当か」といって、「本当だよ、おじーさん」言うてね。その時に遺言し

※1水んかみていどう　水汲みは娘たちの大事な仕事の一つだった。
※2バーキ、ソーキ　竹で編んだザルのこと。

てから、亡くなられたおじいさんが（いる）。伝え話があるさ。
　これほんとの話やるはじだよ。

④　双子が生まれる訳

喜納兼増（大正二年生）登川

［方言原話］
　バスぬ中うてぃサムレーウンメーたー御話うがどーしがよー。
「ぬーがやー、今ぬ世あんしターチューん子ぬ生まりーどぅやー」んでぃ一人ぬウンメーがあん言みしょーちゃぐとぅ、
「たとぅまいぬ事やさ」んでぃ。
「ぬーがいゃーあん言る」
「ムシルぬ、前や一ちなー、一ちなーかんし機織りし織てぃ、うりんけー寝んてぃ、夫婦ぬ用事んしますてーしが、今かんし二ちん、三ちん繋じゃーに、繋じムシルぬ上うてぃ夫婦いちぇーさーに、あんさーに、ターチューやうほーく生まりーん」んでぃ。「こんな出来事じゃないかなー」でぃ。

［共通語訳］
　バスの中で士族のおばあさん達の話をお聞きしたんですがね。
「何事か、今の世、あんなに双子が生まれるのかねえ」と一人のおばあさんがそう言われたので、
「当たり前の事だよ」と。
「どうしてあんたはそう言うの」
「ゴザは、以前は一枚、一枚こうして機織りで織って、それに寝て、夫婦の用事もすませていたけど、今はこうやって二つも三つも繋いで、繋いだゴザの上で夫婦は一緒になるので、それで、双子がたくさん生まれるのよ」と。「こんな理由じゃないかなあ」と。

⑤　「笑」の字のはじまり

亀島忠睦（明治三十五年生）室川

　昔ね「笑い」という言葉が、それがなかったそうです。そしてね、犬が来てねカゴから食い物魚を食べてねー、出れなかったからね、その時は皆が笑ったそうです。
　そうしたら、犬は足はその時は三本しかなかったって、手と足がね。男ね、男から犬の足につけてね、犬は四本なっておるわけ。男の今は三本でしょう。これ一本を犬につけたそうです。そうしたから「笑い」という言葉ができた。
　これは学校の先生から聞いた。

Ⅶ 補遺

① 馬の屁

新城安平（大正二年生）室川

アラタバル言うてね田んぼの名前、地名や、アラタバル。馬によ、昔はこれにイージャーイと言うた。今はスキと言うている。馬に田んぼをスキでやってるさー。カチチャーというかウネ（ウニ）。海のあれ非常に栄養があるよねー。そして、それ、今でも東京の一流のにぎりスシなんかでね、あれ上にかぶして輸出している。非常に栄養があるそうや、あれ。それ食べたらね必ず大きなオナラが、また、プープープーして出るそうです。それはたくさん食べていたこの（人が）、スキやっていたら（オナラをしてしまった）、そしたら突如馬がビックリしてよ、スキをはねよったという。そんな意味にはね、

アラタバルうとてい　（アラタバルで）
生ガチチヤわいば（ウニを割って食べたら）
屁はプーみかし（屁をプーとひったら）
馬が驚るかち（馬が驚いて）
ゆざいはに（鋤を跳ねた）

② うれしい、楽しい、喜ばしい

金城初子（大正五年生）センター

楽しいやら、おもしろいやらのあれになってしまうけどね。

三名の子ども、この木こりは女の子ばっかり産んでいるわけ。もう、年取ってから、結婚してから長いこと（子どもを）産まなかってね。年取ってから産んだからね、上の子は、

「ああ、うれしいなー」といって、「うれしい」（名前）つけて、三名続けて女の子ばかり産んだからね、二番目の子どもは「楽しいねー」といって、三番目の子どもは「喜ばしい」といって（名前）つけているわけ。

その子どもたちが、小学生になった時に、お父さんはいつもの通りに木こりに行っているわけ。木こりの途中で木に押されて死んでいるわけさ、お父さんは。お母さんが弁当作って、

「うれしい、楽しい、喜ばしい、早く弁当持って行きなさい、お父さんの所へ」。この子どもが弁当持って行くまでにはお父さん死んでいるわけ。三名とも泣いてくるわけ。お母さんが、

「なんで泣くのー」って言ったら、

「お父さんが木に押されて死んでいる」。お母さんが子どもたち抱きつけて、

「うれしい、楽しい、喜ばしい」といってねー、三名囲んでから泣いていたって、お母さんが。

これ子どもの名前だけど、こんな名前つけたらね、

お父さんが死んでも、「うれしい、楽しい、喜ばしい」になっているさーねー。死んでも「喜ばしい」なっているわけさ。でも、お父さん、あんなふうがよかったって。

③ 枕絵

山内盛福（大正二年生）南桃原

結婚した場合に、絵に書いていったんだよ。今でいう普通の性行為の話さーねー。それをね、花嫁衣裳箱の中に入れて本だて持たしよったって。これね、それにはやっぱり男女セックスのこと書いておったんですよ。

だからそういうふうに結婚の場合にね、それをよく、枕絵をね、枕絵というのはなんでしょう、男女のセックスにまで読んだんですよ。それを持たしよったとかなんとか。

今はもう子ども時分から男女のセックスの事詳しく知っているさーねー。昔ならね、そういうことを夫婦はそうするもんだと分からないうちに結婚する者もいたはずさ。誰にも言えない。

それはまー、しかし、事実かなー、作り話じゃーないかなーとも思うしね。

本文掲載話一覧

Ⅰ 巧智譚

〔一〕とんち話

(1) とんち小僧

① 夏枯草、冬青草・鳴るのはどちら・内か外か …… 普久原幸（泡瀬） …… 8
② 鍬の数 …… 平田嗣昌（登川） …… 9
③ ジンブナー …… 屋宜カメ（安慶田） …… 10

(2) 謎かけ歌

① こじきの話 …… 伊佐ツル（泡瀬） …… 11
② 夏冬一緒と夜昼一緒 …… 松下盛一（池原） …… 11
③ うた問答 …… 高江洲義総（泡瀬） …… 12

〔二〕知恵比べ

(1) 盗人退治

① 臼で盗人を捕らえた話 …… 島袋次郎（知花） …… 13
② 頓知で泥棒をこらしめた懲さん …… 普久原幸（泡瀬） …… 14
③ 頓知で泥棒を捕まえた話 …… 普久原幸（泡瀬） …… 14
④ 煙管の裁判 …… 金城眞良（古謝） …… 15
⑤ 親譲べ …… 金城眞良（古謝） …… 15
⑥ おまわりと盗人 …… 屋宜カメ（安慶田） …… 16

(2) 牛の上歯

① 侍の牛 …… 久場政三（園田） …… 17
② 牛の歯 …… 普久原幸（泡瀬） …… 18

(3) 夫の改心

① 夫を改心させた妻 …… 内間シモ（城前） …… 19
② ジュリ通いをやめさせた妻 …… 湧田トミ（センター） …… 21

(4) 知恵比べあれこれ

① インナーを取った人 …… 本部ツル（室川） …… 21
② 娘の厄除け …… 新城安平（室川） …… 22

Ⅱ 形式譚

〔一〕話に葉なし

① 話に葉なし …… 喜屋武英正（久保田） …… 24
② 田芋の葉 …… 比嘉良信（中の町） …… 24

Ⅲ 誇張譚

〔一〕業比べ

(1) 壮大な力比べ

① 大力者の牛担ぎ …… 普久原幸（泡瀬） …… 26
② 仁王仏とマカ仏 …… 新崎カマド（中の町） …… 26

〔二〕巨大なもの

① 海で一番大きなもの …… 喜屋武英正（久保田） …… 27

Ⅳ 愚人譚

〔一〕愚かな嫁

(1) 屁ひり嫁

① 屁ひり女 …… 神里マカト（安慶田） …… 28
② へひり嫁 …… 普久原幸（泡瀬） …… 28
③ 屁ひり嫁 …… 徳里カメ（園田） …… 29
④ 屁ひり嫁 …… 喜屋武英正（久保田） …… 30

⑤ 屁ひり嫁
⑥ 屁ひり嫁
⑦ 屁ひり嫁

〔二〕愚か者

(1) 田舎者と上流言葉

① ウーミー嫁
② 侍の鶏
③ 桃買うか

(2) ぬー聞ち／ぬー着ち

① きていったもの
② きていったもの

(3) 旅人と山亀

① 旅人と山亀
② 旅人と山亀
③ 旅人と山亀
④ 旅人と山亀
⑤ 旅人と山亀
⑥ 旅人と山亀
⑦ 旅人と山亀
⑧ 旅人と山亀
⑨ 旅人と山亀
⑩ 旅人と山亀
⑪ 旅人と山亀
⑫ 旅人と山亀
⑬ 旅人と山亀
⑭ 旅人と山亀

(4) 愚か者あれこれ

① 豆腐を見ておけ
② おならの歌
③ 山羊盗人

西平マツ（久保田）……30
佐久田千代（室川）……30
佐渡山ゴセイ（城前）……31
桑江朝盛（中の町）……31
久場政三（園田）……32
稲嶺盛英（山里）……33
普久原幸（泡瀬）……33
内間ヨシ子（大里）……34
吉田（島袋）タケ（知花）……34
高江洲義総（泡瀬）……35
棟里静（佳吉）……36
屋宜カメ（安慶田）……36
高江洲昌保（センター）……37
喜屋武ヨシ（久保田）……38
喜納兼優（東）……38
上原ウシ（佳吉）……39
嘉陽よし子（比屋根）……39
当山平治（佳吉）……40
平亀（美里）……40
新城安平（室川）……40
渡慶次光子（大里）……40
神里マカト（安慶田）……41
友寄ナヘ（佳吉）……41
金城ナベ（松本）……42
宮城タケ（与儀）……42
宮城次郎（園田）……42
西平マツ（久保田）……42
比嘉喜代吉（山内）……43
屋宜ハル（安慶田）……43
山内盛福（南桃原）……44
伊佐安弘（山里）……44
照屋カマド（園田）……44
神村盛昌（園田）……44
中野京子（山内）……45
照屋ツル（照屋）……45
喜屋武英正（久保田）……45
仲宗根カメ（登川）……45
平田フミ（登川）……46
島袋ヤス（山里）……46
宮里信栄（古謝）……46
宮里ヨシ（与儀）……46
比嘉フミ（与儀）……46
粟国春子（山里）……46
金城眞良（古謝）……47
仲程セツ（知花）……47
比嘉良信（中の町）……48

④ ソテツをなくった男
⑤ 燃えた貯金

V 聞き違い

(1) 英語の聞き違い
① カマーン、カマーン
② ナイントゥリー

(2) 芋の出来
① 聞き違い（芋掘り）
② 聞き違い（いものでき）

(3) 聞き違いあれこれ
① あさって取ろう
② くさかったか
③ 二反のはば

(4) カサギラセー
① カサギラセー
② カサギラセ
③ カサギラセ
④ カサギラセー
⑤ カサギラセー
⑥ カサギラセ
⑦ カサギミソーリ
⑧ カサギラセー
⑨ カサギラセー
⑩ カサギラセ
⑪ カサギラセー

比嘉喜代吉（山内）……48
比嘉フジエ（山内）……49
山内三郎（知花）……50
島袋義堅（古謝）……50
桑江朝盛（中の町）……52
比嘉フジエ（山内）……52
松下盛一（池原）……52
新城安平（室川）……53
瑞慶山良明（室川）……53
屋宜カメ（安慶田）……53
比嘉良信（中の町）……54
喜屋武英正（久保田）……55
屋宜ハル（安慶田）……55
稲嶺カマド（前間良）……56
徳里静（住吉）……56
普久原幸（泡瀬）……56
島袋義堅（古謝）……57
宮城タケ（中の町）……57
当山平治（住吉）……58
瑞慶山良明（室川）……59

(5) ヒルも大丈夫？
① ヒル好きか
② ヒル好きか
③ ヒル好きか
④ ナーピナクーとヒル好きか
⑤ ヒル好きか
⑥ ヒル好きか
⑦ ヒル好きか
⑧ ヒル好きか
⑨ ヒル好きか
⑩ ヒル好きか
⑪ カサギラセー
⑫ カサギラセ
⑬ カサギラセー
⑭ カサギラセ
⑮ カサギラセ
⑯ カサギラセー
⑰ カサギラセ
⑱ カサギラセ
⑲ カサギラセ
⑳ カサギラセー
㉑ カサギラセー
㉒ カサギラセー
㉓ カサギラセ
㉔ カサギラセー
㉕ カサギラセ

新屋ヨシ子（越来）……59
高島邦子（越来）……60
宜志政英（中の町）……60
内田清栄（山内）……61
知念善助（古謝）……61
桑江朝盛（中の町）……61
佐久田千代（室川）……62
比嘉フジエ（山内）……62
石川ツル（東桃原）……62
照屋唯兵衛（園田）……62
玉城シズ（久保田）……63
瑞慶山千代（照屋）……63
宮城次郎（園田）……63
知念真章（胡屋）……63
金城眞良（古謝）……63
吉田（島袋）タケ（知花）……64
山内三郎（知花）……65
喜納兼優（東）……66
太田キヨ（比屋根）……67
平田フミ（登川）……67
屋宜カメ（安慶田）……68
比嘉良信（中の町）……68
屋良千代（越来）……69
粟国春子（山里）……71

⑪ ヒル好きか
⑫ ヒル好きか
⑬ ヒル好きか
⑭ ヒル好きか
⑮ ヒル好きか
⑯ ヒル好きか
⑰ ヒル好きか
⑱ ヒル好きか
⑲ ヒル好きか
⑳ ヒル好きか
㉑ ヒル好きか
㉒ ヒル好きか
㉓ ヒル好きか
㉔ ヒル好きか
㉕ ヒル好きか
㉖ ヒル好きか
㉗ ヒル好きか
㉘ ヒル好きか
㉙ ヒル好きか
㉚ ヒル好きか
㉛ ヒル好きか
㉜ ヒル好きか
㉝ ヒル好きか
㉞ ヒル好きか
㉟ ヒル好きか
㊱ ヒル好きか

喜屋武英正（久保田）……71
島袋義堅（古謝）……72
普久原幸（泡瀬）……72
普久原ウシ（嘉間良）……72
仲宗根浦助（登川）……73
山田キヨ子（大里）……73
与那嶺ツル（越来）……73
宮城次郎（園田）……74
友寄ナヘ（住吉）……74
神里マカト（安慶田）……74
喜友名トシ（園田）……75
桑江カマド（東桃原）……75
稲福ウキ（久保田）……75
城間文子（比屋根）……75
小谷シゲ（登川）……76
高江洲マツ（諸見里）……76
宮城浦吉（美里）……76
比嘉フジエ（山内）……77
瑞慶山良明（室川）……78
知念善助（古謝）……78
山内盛福（南桃原）……79
宜志政英（中の町）……79
新屋ヨシ子（越来）……80
稲嶺盛英（山里）……80
山口栄順（泡瀬）……80
金城ハル（東桃原）……81

Ⅵ 艶笑譚

〔一〕営みの始まり

（1）年に何回

① 年に何回
② 年に何回

〔二〕もの知らず

（1）女知らずの夫

① カンダバー破り
② 愚かな夫（女知らず）
③ 愚かな夫（女知らず）
④ 愚かな夫（馬から習う）
⑤ 愚かな夫（夜の仕事）

㊲ ヒル好きか
㊳ ヒル好きか
㊴ ヒル好きか
㊵ ヒル好きか
㊶ ヒル好きか
㊷ ヒル好きか
㊸ ヒル好きか
㊹ ヒル好きか
㊺ ヒル好きか
㊻ ヒル好きか
㊼ ヒル好きか
㊽ ヒル好きか
㊾ ヒル好きか

屋宜ハル（安慶田）……81
佐久田千代（室川）……81
島袋シズ（池原）……81
佐久本トヨ（泡瀬）……82
比嘉弘（山内）……82
玉城シズ（久保田）……83
諸見里マツ（古謝）……83
照屋唯兵衛（園田）……83
西平マツ（久保田）……83
比嘉ツル（東桃原）……83
内田清栄（山内）……84
島袋カナ（比屋根）……84
知念真章（胡屋）……84

宮里秀栄（知花）……85
山内盛福（南桃原）……86

普久原ウシ（嘉間良）……86
比嘉フジエ（山内）……87
山内盛福（南桃原）……87
屋宜ハル（安慶田）……87
桑江朝盛（中の町）……87

⑥ 愚かな夫（かゆの穴）

（2）男知らずの女
① 愚かな嫁
② 愚かな嫁
③ 足りない骨

（3）うぶな娘
① 三人娘の知恵比べ

（4）子の勘違い
① ハブとーい
② 子供の勘違い

（5）スケベな聞き違い
① 棒貸せ
② 棒貸せ
③ タチュンナー？
④ 形見の帯
⑤ ブッシ、ブッシ
⑥ ヒー貸して

［三］並外れ
（1）中城百合の花
① 中城百合の花
② 中城百合の花
③ 中城百合の花

［四］動物との交わり
（1）妻と犬の浮気
① 犬と妻の裁判
② 犬と女の裁判

桑江朝盛（中の町）……88
山内盛福（南桃原）……88
佐久田千代（室川）……88
宮里秀栄（知花）……88
桑江朝盛（中の町）……89
宮里秀栄（知花）……89
伊佐安弘（山里）……89
上根ウサ（宮里）……90
喜屋武英正（久保田）……90
比嘉フジエ（山内）……91
宮里秀栄（知花）……92
宮里秀栄（知花）……92
上原ツル（東桃原）……93
宮城次郎（園田）……93
喜屋武英正（久保田）……94
比嘉良信（中の町）……94
宇栄原カマド（越来）……95
桑江朝盛（中の町）……96

③ 犬と女
④ 犬と女

（2）娘と馬
① 馬と女

［五］艶笑譚あれこれ
① 春夏秋冬の営み
② 馬と娘
③ 女好きのタンメー
④ 双子が生まれる訳
⑤「笑」の字のはじまり

Ⅶ 補遺

① 馬の屁
② うれしい、楽しい、喜ばしい
③ 枕絵

西平マツ（久保田）……96
島田敏（山内）……97
普久原ウシ（嘉間良）……97
山内盛福（南桃原）……98
比嘉良信（中の町）……98
佐久本トヨ（泡瀬）……98
喜納兼増（登川）……99
亀島忠堅（室川）……99
新城安平（室川）……100
金城初子（センター）……100
山内盛福（南桃原）……101

調査日誌と調査協力者

沖縄国際大学口承文芸学術調査団による沖縄市字池原・登川の調査

【調査日程】

一九八〇年

【調査地域】

沖縄市字池原

【調査団長】

沖縄国際大学文学部教授　遠藤庄治

【口承文芸研究会】

大城直樹・花城洋子・小橋川生枝・喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子・大熊享・西銘千恵美・大本敬子・西江美智・池原弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ・仲松庸尚・安里和子・渡慶次勲・仲宗根悦子・与那原早苗・佐渡山美智子・神晴一郎・湧川紀子・比嘉和男・崎原有美恵・辺土名美智代・富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・川上

【美里中学校】

金城あつ子・上江洲リカ（美里中3年）・緑間直美・安田啓子・幸喜愛

一九八〇年

五月　十八日……花城洋子・小橋川生枝・喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子・大熊享・西銘千恵美・池原弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ・仲松庸尚・安里和子・渡慶次勲・仲宗根悦子・与那原早苗・佐渡山美智子

一九八五年

七月　一日……金城茂雄・辺土名初美

七月　二日……宮城利旭・廣山実・翁長雅代・辺土名初美

七月　八日……辺土名初美

七月　十八日……辺土名初美

七月　二三日……宮城利旭・金城茂雄・川崎義隆・辺土名初美

七月　二六日……宮城利旭・金城茂雄・辺土名初美

七月　二九日……仲松庸尚・辺土名初美・宮城利旭

八月　九日……辺土名初美

一九八八年

一月　三十日……比嘉悦子・宮里実雄・宮城昭美（わらべ歌調査）

二月　六日……比嘉悦子・宮城昭美（わらべ歌調査）

一九八九年

二月　二八日……比嘉悦子（わらべ歌調査）

一九九五年

十月　一八日……宮城昭美（わらべ歌調査）

【調査日程】

一九八〇年

【調査地域】

沖縄市字登川

【調査団長】
沖縄国際大学文学部教授　遠藤庄治

【口承文芸研究会】
大城直樹・花城洋子・小橋川生枝・喜納弘子・岡田浩・新城悦子・島袋美奈子・大熊享・西銘千恵美・大本敬子・西江美智・池原弘子・玉城弘美・仲宗根フキエ・仲松庸尚・安里和子・渡慶次勲・仲宗根悦子・与那原早苗・佐渡山美智子・涛晴一郎・湧川紀子・比嘉和男・崎原有美恵・辺土名美智代・富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩・川上

【美里中学校】
金城あつ子・上江洲リカ（美里中3年）・緑間直美・安田啓子・幸喜愛

一九八〇年
五月　十八日……大城直樹・大本敬子・西江美智・涛晴一郎・湧川紀子・比嘉和男・崎原有美恵・辺土名美智代・富村朝夫・仲原敦子・山岸信浩

一九八五年
八月　十二日……辺土名初美・仲松庸尚
八月　十四日……辺土名初美・宮城利旭（民俗調査）
八月　十九日……辺土名初美・仲松庸尚
八月　二六日……辺土名初美・仲松庸尚
八月　二七日……辺土名初美・宮城昭美
九月　二七日……辺土名初美・宮城昭美
九月　三十日……辺土名初美・宮城昭美・仲松庸尚・真栄城栄子
十月　一日……辺土名初美・宮城昭美

二〇〇五年
七月　十二日……宮城昭美

【調査地域】
知花（旧美里地区）
一九八五年
九月　九日……辺土名初美・仲松庸尚
十月　三日……辺土名初美・宮城昭美
十月　十三日……辺土名初美・下田博美・島袋芳敏・安里和子・宮城昭美・照屋寛信・山本啓子・比嘉久・山本康八・辺土名朝三

一九八六年
七月　八日……宮里信勇・宮城昭美
七月　九日……宮里信勇・宮城昭美
七月　十日……宮里信勇・宮城昭美
七月　十一日……宮里信勇・宮城昭美
七月　十四日……宮城昭美
七月　二一日……宮城昭美
八月　六日……宮城昭美
八月　七日……宮城昭美・高江洲裕美

一九八七年
七月　十四日……宮城昭美
九月　十日……辺土名初美
十月　二六日……宮城昭美

一九八九年
三月　十一日……恩河尚・宮城昭美（わらべ歌調査）
一九九〇年
十二月二六日……比嘉悦子・宮城昭美（わらべ歌調査）
一九九一年
十二月十一日……宮城昭美
一九九五年
二月　十七日……宮城昭美
一九九七年
十二月十九日……玉代勢豊子・宮城昭美

［調査地域］

松本（旧美里地区）

一九八七年
五月　二七日……宮城昭美・高江洲裕美
五月　二八日……宮城昭美
六月　二六日……宮里純子・宮城昭美
六月　二九日……宮里純子・宮城昭美
七月　一日……宮里純子・宮城昭美
七月　七日……宮里純子・宮城昭美
七月　八日……宮里純子・宮城昭美
一九八八年
十二月二七日……宮城昭美（わらべ歌調査）

沖縄市旧美里地区民話調査（第一次民話調査）

（1）調査団　沖縄市口承文芸調査団

（2）調査団編成
①団長　沖縄国際大学教授　遠藤庄治
②幹事　沖縄市立郷土博物館　宮城昭美　比嘉ゆり子
沖縄国際大学　上門博之　宜保勝　山城綾子
③調査月日　一九九〇年三月十一日～十四日
④調査員　遠藤研究室　平識美恵子
遠藤ゼミナール受講生
日本文学作品研究受講者有志
沖縄国際大学日本語表現法演習
沖縄民話の会

美里（旧美里地区）

一九八七年
六月　二二日……桑江良秀・宮里純子・宮城昭美
一九九〇年
（寿）　三月　十一日……仲松庸尚・與座範秋・比嘉ゆり子・
謝敷勝美・遠藤庄治・桃原笑美子・
上門博之・赤嶺明美・山城直美・
崎山用彰
（旭）　三月　十四日……平良真也・平敷美恵子・上門千賀子・
犬養憲子・諸喜田綾子

松本（旧美里地区）

一九八七年

五月　二七日……宮城昭美・高江洲裕美

五月　二八日……宮城昭美

六月　二六日……宮里純子・宮城昭美

六月　二九日……宮里純子・宮城昭美

七月　一日……宮里純子・宮城昭美

七月　七日……宮里純子・宮城昭美

七月　八日……宮里純子・宮城昭美

一九八八年

十二月二七日……宮城昭美（わらべ歌調査）

明道（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十四日……上門博之・比嘉ゆり子・石原由香里・宜保勝・桃原笑美子・平良真也

吉原（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十三日……平敷美恵子・宜保勝・桃原笑美子

東（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十四日……崎山用彰・宮城昭美・謝敷勝美・與座範秋・山城綾子

宮里（旧美里地区）

一九八九年

十二月　五日……比嘉ゆり子・宮城昭美

一九九〇年

三月　十一日……豊岡早苗・宮城昭美

七月　六日……宮城昭美・宮里信勇・上門博之・武嶋昭子

古謝（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十二日……宜保勝・與座範秋・謝敷勝美・村山友江・宮城昭美

七月　六日……與座範秋・仲宗根広恵・宮里英樹・稲嶺悦子・照屋京子・平識美恵子

一九九七年

十月　二日……遠藤庄治・阿波根祐子

東恩原（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十三日……嵩山政子・宮城昭美・謝敷勝美・石原由香里・上門博之

七月　六日……加島三史・香村夏子

一九九一年

七月　十日……比嘉悦子・宮城昭美（わらべ歌調査）

二〇〇五年

五月　二五日……宮城昭美

大里（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十一日……渡慶次勲・古堅利江子・上門千賀子・喜久山政信・平良真也

泡瀬（旧美里地区）

一九九〇年

二月　十二日……知花春美・平良真也・伊良皆八重子・豊岡早苗・山城綾子・与那嶺礼子・飯田泰彦・犬養憲子・比嘉ゆり子・遠藤庄治・崎山兼洋・崎山用彰

七月　六日……宜保勝・森章吏・山城綾子・崎山用彰・通事美香・粟国実・石川小百合

一九九三年

三月　十七日……宮城昭美・波平裕子（わらべ歌調査）

十二月十四日……宮城昭美

高原（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十一日……平敷美恵子・比嘉久・島本要・与那嶺礼子・山城綾子

七月　六日……平良真也・大川清子・富平恵智子・豊岡早苗・与那嶺昭郎

比屋根（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十三日……遠藤庄治・與座範秋・犬養憲子・上門千賀子・諸喜田綾子・仲宗根広恵

七月　六日……諸喜田綾子・新垣孝幸

与儀（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十三日……比嘉ゆり子・豊岡早苗・瀬底正祥・山城綾子・崎山用彰・香村夏子

明道（旧美里地区）

一九九〇年

三月　十四日……上門博之・比嘉ゆり子・石原由香里・宜保勝

沖縄市旧コザ地区民話調査

（1）調査団　沖縄市編集事務局

（2）調査員　宮城利旭・宮城昭美・比嘉寛勝・上間和夫・辺土名初美・金城茂雄・宮里純子

（3）調査月日　一九八五年・一九八七年

沖縄市旧コザ地区民話調査（第一次民話調査）

（1）調査団編成（沖縄市口承文芸調査団）

①団長　沖縄国際大学教授　遠藤庄治

②幹事　沖縄市立郷土博物館　宮城昭美

③調査員　沖縄国際大学　上門博之　宜保勝　山城綾子

遠藤研究室

沖縄民話の会

日本民話の会

緑樹苑職員
遠藤ゼミナール受講生
日本文学作品研究受講者有志
沖縄国際大学日本語表現法演習

④調査月日
一九九〇年八月十九日～二三日

沖縄市旧コザ地区民話調査（第二次民話調査・補足調査）

（1）調査団
沖縄市口承文芸調査団

（2）調査目的
沖縄市コザ地区補足調査

（3）調査団編成
①団長
沖縄国際大学文学部教授　遠藤庄治
②幹事
沖縄市立郷土博物館　宮城昭美
③調査員
沖縄国際大学　石川小百合・大川清子・香村夏子・照屋京子
遠藤研究室　武嶋昭子・平識美恵子・上門千賀子・豊岡早苗
遠藤ゼミナール受講生
上門博之・宜保勝・加島三史・崎山用彰・諸喜田綾子・山城綾子・與座範秋・宮里英樹・平良真也・森章史・粟国実・新垣孝幸・石川小百合・稲福悦子・大川清子・香村夏子・照屋京子・通事美香・仲宗根広恵・与那嶺昭郎・謝敷勝美
沖縄国際大学国文科学生有志

④調査月日
一九九〇年十二月十四日～十六日・二二日

沖縄市旧コザ地区民話調査（第三次民話調査・補足調査）

（1）調査団
沖縄市口承文芸調査団

（2）調査団編成
①団長
沖縄国際大学教授　遠藤庄治
②幹事
沖縄市立郷土博物館　宮城昭美
沖縄国際大学　石川小百合・大川清子・香村夏子・照屋京子
③調査員
遠藤研究室　武嶋昭子・仲尾由美
遠藤ゼミナール受講生
与那嶺昭郎・粟国実・通事美香・加島三史・新垣孝幸・石川小百合・大川清子・謝敷勝美・照屋京子・新垣良子・新垣純子・池原健・稲福留美子・犬養恵子・小橋川一・桃原笑美子・友利幸子・仲地香織

④調査月日
一九九一年八月十七日

越来（旧コザ地区）
一九八九年
十一月　八日……比嘉悦子・宮城昭美（わらべ歌調査）
一九九〇年
八月　二一日……豊岡早苗・新垣登季子・新垣孝幸・謝敷勝美・照屋京子・喜瀬智美・知念美佳子・石川小百合・有銘和江・大田判・稲福悦子・宮城美雪・與座範秋・宮城加代子・上門博之・普天間みどり
八月　二三日……崎山用彰・仲里香
十二月十六日……照屋京子・宮里英樹・大川清子・上門博之・

城前（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　二三日……平識美恵子・金城奈緒子・加島三史・平田明子・香村夏子・森章史・謝敷勝美・平良真也・宜保勝・米盛恭子・仲宗根広恵・座嘉比巻・大川清子・石川小百合

十二月十六日……石川小百合・宜保勝・粟国実・豊岡早苗・與座範秋・仲宗根広恵

嘉間良（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　二三日……照屋京子・久保田聡子・豊岡早苗・新垣登季子・新垣孝幸・有銘和江・遠藤庄治・新屋むつき・伊良皆八重子・豊岡早苗・仲里香・粟国実・新城真恵・稲嶺悦子

十二月十四日……豊岡早苗・諸喜田綾子・稲嶺悦子

住吉（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　二三日……上門千賀子・瑞慶覧優子・宮里英樹・与那嶺昭郎・通事美香・高良陽子・冨平恵智子・山城綾子・大川清子・平良真也・武嶋昭子・石川小百合・仲里香・謝敷勝美

十二月十六日……平良真也・加島三史・香村夏子

一九九一年

八月　十七日……稲福留美子・石川小百合

室川（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　二一日……上門千賀子・瑞慶覧優子・宮里英樹・金城奈緒子・通事美香・仲里香・与那嶺昭郎・高良陽子・山城綾子・嘉陽田尚行・平良真也・新田尚子・大川清子・宮城正美

十二月十四日……上門千賀子・新垣孝幸・石川小百合・武嶋昭子・通事美香

安慶田（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　二十日……遠藤庄治・上田和子・比嘉玲子・照屋京子・有銘和江・岸本かおり・粟国実・稲嶺道子・島元要・崎山須麻子・平良真也・新田尚子・大川清子・宮城正美・宮城幸子

八月　二三日……上門博之・普天間みどり・與座範秋・宮城加代子・宮城昭美

十二月十五日……上門博之・瀬底正祥・山城綾子・平良真也・崎山用彰・諸喜田綾子・宮城昭美

照屋（旧美里地区）

一九九〇年

八月　二十日……上門千賀子・玉城直子・宮里英樹・
運天雪江・新垣孝幸・前田静華・宮城美雪・
通事美香・萩堂剛・与那嶺昭郎・
田場美恵子・高良陽子・宮城昭美・
翁長利江・知念美佳子・新垣登季子

一九九一年

八月　十七日……桃原笑美子・粟国実・友利幸子・照屋京子・
武嶋昭子・香村夏子

センター（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　十九日……上門博之・伊野波智美・與座範秋・
知念美千代・石川小百合・川満祐子・
謝敷勝美・平敷邦祐

一九九〇年

八月　二三日……稲嶺悦子・謝敷勝美・平安名邦祐

一九九一年

五月　二三日……宮城昭美・香村夏子・謝敷勝美・
石川小百合・照屋京子・大川清子

胡屋（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　十九日……遠藤庄治・上田和子・比嘉玲子・
諸喜田綾子・嘉陽田尚行・照屋京子・
岸本かおり・田本かおり・山城綾子・
安次嶺寿・崎山須麻子・平良真也・儀間薫・
大川清子・比嘉和男・宮城幸子・宮城正美・
粟国実・稲嶺道子

十二月十四日……宮保勝・香村夏子・森章吏・粟国実

一九九四年

二月　九日……渡平祐子・宮城昭美（わらべ歌調査）

中の町（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　二三日……遠藤庄治・新屋むつき・粟国実・
久保田聡子・照屋京子・諸喜田綾子・
平讃美恵子・新城真恵・加島三史・
平田明子・森章吏・香村夏子・森章史・
香村夏子・上門千賀子・瑞慶覧優子・
通事美香・宮里英樹・豊岡早苗・
与那嶺昭郎・宮保勝・宮平・平良真也・
宮城昭美

十二月十四日……宮里英樹・香村夏子・与那嶺昭郎・
照屋京子・與座範秋・山城綾子

園田（旧コザ地区）

一九八五年（越来グスク発掘調査）

十一月十九日……金城茂雄・辺土名初美・宮城利旭・
宮城昭美

十一月二七日……金城茂雄・辺土名初美・宮城利旭・
宮城昭美

一九八七年

七月　十七日……比嘉寛勝・上間和夫・宮城昭美

七月　二一日……上間和夫・宮里純子・宮城昭美
七月　二八日……上間和夫・宮里純子・宮城昭美

一九九〇年
八月　十九日……上門千賀子・玉城直子・島元要・
運天雪江・通事美香・萩堂剛・与那嶺昭郎・
田場美恵子・仲松節子・宮城昭美・粟国実・
稲嶺道子
八月　二三日……上門博之・普天間みどり
十二月十四日……平良真也・上門博之・与那嶺昭郎・
大川清子

一九九一年
六月　十七日……比嘉悦子・宮城昭美（わらべ歌調査）

久保田（旧コザ地区）

一九九〇年
八月　二十日……平敷美恵子・平良美香・津嘉山朝昭・
加島三史・新城真恵・伊波つばな・
香村夏子・知念小百合・大城博充・
崎原さおり・武嶋昭子・泉克也・宮城紀子・
仲宗根広恵・前田英一
八月　二二日……通事美香・高良陽子・冨平恵智子
八月　二三日……仲宗根広恵・武嶋昭子・大川清子・
山城綾子・米盛恭子
十二月十四日……宮城昭美・山城綾子・新垣孝幸
十二月二一日……宮城昭美・大川清子・石川小百合・
照屋京子

諸見里（旧コザ地区）

一九九〇年
八月　十九日……平識美恵子・新城真恵・津嘉山朝昭・
平良美夏・加島三史・伊波つばな・
香村夏子・知念小百合・森章吏・富永麻希・
宜保勝・崎原さおり・仲宗根広恵・
前田英一・武嶋昭子・池原健・野原恵・
喜久山くに子・
八月二十二日……照屋京子・久保田聡子・加島三史

山内（旧コザ地区）

一九九〇年
八月　二十日……豊岡早苗・當眞篤・上門博之・金城奈緒子・
稲嶺悦子・宮里由美・高吉直紀・與座範秋・
宮城加代子・知念美千代・石川小百合・
川満祐子・大田判・謝敷勝美・
平安名邦祐

一九九一年
八月　十七日……池原健・宮城昭美・宜保勝・仲地香織・
加島三史・山城綾子・犬養憲子・
新垣孝幸・小橋川一・新垣純子・謝敷勝美・
仲尾由美・遠藤庄治・通事美香・
大川清子

南桃原（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　十九日……豊岡早苗・當眞篤・新垣登季子・崎山用彰・翁長利江・新垣孝幸・宮城美雪

八月　二三日……新垣孝幸・與座範秋

十二月十六日……上門千賀子・森章吏・諸喜田綾子・通事美香・山城綾子・稲嶺悦子

山里（旧コザ地区）

一九九〇年

八月　二一日……平識美恵子・津嘉山朝昭・加島三史・平田明子・香村夏子・大城博充・宜保勝・宮里由美・武嶋昭子・宮城紀子・仲宗根広恵・高吉直紀・粟国実・冨平恵智子・宮城昭美

十二月十六日……平識美恵子・与那嶺昭郎・仲尾由美

一九九一年

八月　十七日……新垣良子・与那嶺昭郎

○編集協力者

（表紙イラスト・挿絵作成）長浜益美

○翻字

上門博之・宜保勝・山城綾子・香村夏子・石川小百合・大川清子・照屋京子・山内智子・宮城昭美

○資料整理

上門博之・宜保勝・山城綾子・香村夏子・石川小百合・大川清子・照屋京子・山内智子・宮城昭美・比嘉ゆり子・辺土名初美・屋良奈那子

○原稿作成及び編集

比嘉清和・八田夕香・宮城昭美

○参考文献及び資料

『沖縄語辞典』国立国語研究所編集・大蔵省印刷局発行・一九八十年

『沖縄文化史辞典』真栄田義見・三隅治雄・源武雄編・東京堂出版発行・一九八二年

『沖縄大百科事典上・中・下』沖縄大百科事典刊行事務局編集・沖縄タイムス社発行・一九八三年

『沖縄語辞典―那覇方言を中心に―』内間直仁・野原三義・研究社発行・二〇〇六年

『聞き書沖縄食事』日本の食生活全集47　沖縄編集・社団法人　農山漁村文化協会発行・一九八八年

『おおぎみの昔話』遠藤庄治・大宜味村教育委員会発行・一九九八年

『中城の民話』遠藤庄治・中城村教育委員会発行・一九九九年

『北中城の民話』遠藤庄治・北中城教育委員会発行・一九九三年

『本部町の民話　上巻・昔話編』遠藤庄治・本部町教育委員会発行・二〇〇四年

『伊江島の民話』遠藤庄治・伊江村教育委員会発行

『よなばるの民話』遠藤庄治・与那原町教育委員会発行・一九九〇年

『西原町史　別巻　西原の民話』遠藤庄治・西原町役場発刊・一九九一年

『沖縄市の伝承をたずねて（本格昔話編）』沖縄市立郷土博物館編集・沖縄市教育委員会発行・二〇一〇年

沖縄市の伝承をたずねて　笑い話編

沖縄市文化財調査報告書第 40 集

平成23年3月31日　発行

発　行　沖縄市教育委員会
編　集　沖縄市立郷土博物館
〒904-0031　沖縄県沖縄市上地2－19－6
TEL（098）932-6882
印　刷　（株）琉球コスモセブン
沖縄県沖縄市上地3－2－20
TEL（098）932－4951